

大學文科に學び、雜誌「幼年世界」を主宰し、「人と藝術」等に寄稿して居るが、未だ著作は無し。

現住所 東京府荏原郡大井町字元芝七八六

五味清吉

ゴミセイキチ(畫)

舊姓は小原明治十九年一月盛岡市に生れ、東京美術學校に入つて大正二年西洋畫科を卒業し、文展へは第四回に「煙」第五回に「秋のおとづれ」第六回に「たけに草」第七回に「ハチスとシラン」第八回に「新天新地」第九回に「秋草」第十回に「木槿の花」を出しその「ハチスとシラン」は三等賞を受けた。光風會にもまた度々出品してゐる。

現住所 東京市麴町區富士見町二丁目三三

小宮豊隆

コミヤトヨタカ(評)

明治十七年三月福岡縣京都郡犀川村に生れ、東京帝國大學文科大學の獨文科を出た。氏は夏目漱石

に師事したもののうちで最も師の面影を傳へてゐる作風だと言はれてゐる。漱石の「三四郎」は氏を「モデル」にしたといふ説があるがさうではなささうだ。初め小説に筆を執つて「烙印」を公にしたが、今は主として評論家として立つてゐる。演劇に關する議論は殊に多く發表する。文章は流麗高華得がたい能文家であると共に見識また非凡である。慶應義塾の講師を勤めて居つてシユニツレルの「アナトホル情話集」ストリンベルヒの「父親」等の翻譯をも出した。東北帝大法文學部に聘せられて獨逸文學の講座を擔當し、得意の獨逸戯曲を講ずることになり、それがため大正十一年より二年間佛獨伊へ留學を命ぜられた。

近く著した「傳統藝術の研究」は著者が主として日本の藝術に關する論文を集めたもので「眞偽といふこと」「挿花藝術」「三味音楽について」「橋口五葉の浮世繪」「花道と橋がかりと」「能樂の面」「雅樂を見て」「去來と芭蕉と」「茶につつま」

現住所 京都市中長者町室町四

故小室樵山

コムロシヨウザン(書)

等數十篇の論説を集めたもので我國に於ける傳統藝術についてこれほどまでに理解ある徹底した。しかも新しい議論は類例がない。一體氏は漱石の門人だが漱石は芝居が分らない獨逸語はいかぬこの二點に於て小宮氏造詣に服してゐたのである。

現住所 東京市赤坂區青山南町六ノ一〇八

小村大雲

コムラダイウン(畫)

名は權三郎。明治十六年十一月島根縣簸川郡平田町に生れ、森川會文、都路華香、山元春舉に師事し、三十四年京都美術協會で褒状を得たのを初めに、第五回内國勸業博覽會、日本美術院、名古屋全國繪畫共進會、京都青年會等で受賞し、文展へは第六回に「釣日和」第七回に「放ち飼」第八回に「憩」第九回に「東」等を出して各三等賞を得第十回に「畫舫」第十一回に「神風」を出品して何れも特選となつた。大正八年更に帝院推薦となり、大正十二年帝院展覽會審査員の候補に擬せられた。

に師事したもののうちで最も師の面影を傳へてゐる作風だと言はれてゐる。漱石の「三四郎」は氏を「モデル」にしたといふ説があるがさうではなささうだ。初め小説に筆を執つて「烙印」を公にしたが、今は主として評論家として立つてゐる。演劇に關する議論は殊に多く發表する。文章は流麗高華得がたい能文家であると共に見識また非凡である。慶應義塾の講師を勤めて居つてシユニツレルの「アナトホル情話集」ストリンベルヒの「父親」等の翻譯をも出した。東北帝大法文學部に聘せられて獨逸文學の講座を擔當し、得意の獨逸戯曲を講ずることになり、それがため大正十一年より二年間佛獨伊へ留學を命ぜられた。

現住所 京都市中長者町室町四

故小室樵山

コムロシヨウザン(書)

名は正春、樵山は其の號、本姓を高橋氏、初め下谷金杉に住したが、中歳御徒町に徙り、後復金杉に隠れた。夙に書を萩原秋巖に習ひ、後ち築地活版所及び弘道軒の請に應じて楷書活版の母字を書いた。今世に流傳する所の楷書活字皆之に據つてゐる。常に佛教を信じ時に尤も日蓮上人を崇仰した。天資豪宕嘗つて名利の念なく。市中に隠れて大沼枕山、小野湖山、中根半嶺の諸家と翰墨の交をなして、詩酒徵逐殆んど虚日がない。其の師萩原秋巖の墓は三の輪淨閑寺に在るが香火久しく絶えてゐた。樵山は忌辰毎に必ず往つてこれを展した。嘗て俊徳塾を興して子弟に教育したが名士法學博士高田早苗は其の門に出た。明治二十六年十月十五日年五十二で病歿した。

小室翠雲

コムロスイウン(畫)

明治七年十一月群馬縣館林町に生れ、南宗畫家、田崎草雲に學び、日本美術協會等で屢々受賞し、日本畫會及び南畫會幹事となり、日本美術協會委員となり、四十年には高島北海、望月金鳳、荒木十畝、佐久間鐵園、山岡米華、田中頼嶂、益頭峻南等と文展對抗の正派同志會を組織した。文展に於ては第八回以來日本畫部審査員となつたが、作品は第二回に「青山白雲」第三回に「雪中山水」第四回に「山海圖」第五回に「春景山水、秋景山水」第六回に「四時佳興」を出して毎に三等賞を得、第七回に有名な「寒林幽居」を出品して遂に二等賞を受けた。第八回に「逍遙」第九回に「駒ヶ嶽秋粧」第十回に「天空海濶」第十一回に「層巒群松」を出し、大正十一年支那に遊んで研究し、十二年大震災後大阪毎日新聞主催の日本美術品展覽會に於て審査員にあげられた。氏は漢詩にも長じて専門詩人と應酬してゐる。

上山雜詠

萬木號風雲散銀、

山連板谷勢嶙峋、

三五二

相逢一笑春生坐、不是當年訪戴人。
携詩來過上之山、家在瓊林玉樹間、
爲是靈泉堪養氣、淹留三日欲忘還。

次韻佐藤六石見示

深憂平日爲斯文、萬卷琳琅借自君、
講讀欲酬昭代化、微才我似負山蚊。

氏が支那に渡つた時原田恕堂は

送小室翠雲兄之支那

畫傳當年渡海來、阮瑜妙境箇中開、

如今一派斬新筆、後素頽瀾欲挽回、

滿載畫圖航海行、藝林盛事世皆驚、

縱橫健筆翠雲子、待看中原騁大名。

と送つた。袖海氏は翠雲を評して詩筆と畫筆と雙美なりと激賞してゐる。書も亦なかく味のあるもので氏は南畫家の重要な三要素を完備してゐる大家である。大正十三年遂に最高名譽の帝展會員に擧げられた。

現住所 東京市麴町區中六番町四二

小森三好

コモリミヨシ(劇)

明治三十一年十二月十日兵庫縣に生れ、第一神戸中學校を経て早稲田大學獨逸文科に這入つて學んだ。まだ著作集は無いが、戯曲雜誌「舞臺藝術」同人として多くの演劇評論に筆を染め、又早稲田大學文科の演劇學會の會員として脚本を書いて居る。併しこれまでの業績をこゝに擧げる人では無くて、未來の活動と發展とに望みをかけて置く前途有爲の青年作家である。

現住所 東京市外西巢鴨宮仲二五四四

小山榮達

コヤマエイタツ(畫)

名は政治。明治十三年三月東京小石川福音町に生れ、洋畫は本多錦吉郎に、日本畫は鈴木榮曉、小堀鞆音に學び、紅兒會、日月會等の會員となり、東京勸業博覽會、日本美術協會、日本美術院等で賞状を受け、三十八年三月上野に戰畫展覽會を開き獨力數百枚の揮毫を出陳して斯界の人々を驚嘆

せしめた。文展へは第五回に「兵燹」第六回に「大漁」第七回に「大衆勢」「沙那王」第八回に「睡魔」第九回に「雷鳴の陣」第十回に「北國さむらひ」第十一回に「狩」帝展第五回に「奥下向」「冬ざれ」を出して好評を得、大正六年町田曲江、矢澤弦月、三井萬里、古川修等と藝術社を起した。

現住所 東京府下田端三二五

故小山正太郎

コヤマシヨウタロウ(畫)

氏は越後長岡の藩醫良運の長男で、安政五年一月同地に生れ、幼時藩校に入つて漢籍を學び、後畫に志し明治四年上京して洋畫を川上冬崖の聽香讀畫塾に學び、又フランス人ゲリノーにも就いて教を請ふた。七年業成つて陸軍兵學校に奉職して教鞭を執り、更に工部省美術學校に於てフォンタネーに就いて正式に洋畫を學び、十年同校教授となつた。氏はその當時「寫眞法範」と題して畫帖を出したが、これは本邦最初の石版印刷であつて又鉛筆畫手本の最初のものであつた。十一年の頃

十一人の同志と共に十一會を起して洋畫の研究普及を謀つた。十四年の交西洋畫排斥の論が高くなつたとき、氏の憤然として之に對抗し、その考の誤つてゐることを辯駁して洋畫の基礎を確立した。十九年東京府工業共進會に十一會員の作畫を出陳し、二十年畫塾不同舎を設けて後進の子弟を導き、二十一年明治美術展覽會を開いて、畏くも明治天皇の臨幸を仰ぎ、本邦洋畫の興隆を來さしめた。又長く東京高等師範學校に奉職して圖畫專修科の教授となり、文部省美術展覽會の開設によつてその第一回より第七回まで洋畫部の審査員であつた。作品には「鍾子期未來」「濁醪療渴黃葉村店」「山村嫁女」「川上冬崖肖像」等がある。

しかし技術方面よりも洋畫の普及に於て大なる功績がある。不同舎には前後三百人からの學生が集まり、其の中には中村不折、滿谷國四郎、吉田博鹿子木孟郎、中川八郎、下村爲山、石川寅治、板倉贊治、高村眞夫、寺町國太郎、等太平洋畫會の主なる畫家は皆氏の門より出てゐる。餘技として

文人畫をよくし馬は最もその得意とするところであつた。明治四十五年頃太陽に發表した「畫と題辭」等によつても氏が如何に漢詩を理會し文人畫的南畫的素質を多く有してゐるか分かる。晩年あまり振はないので寂しく暮してゐるうち大正五年一月六日年六十で歿した。

近藤經一

コンドウケイイチ(劇)

明治三十年四月二十八日東京市に生れ、第二高等學校を経て東京帝國大學に入りその文學部を卒業して、爾來創作生活をやつてゐる。「第二の誕生」「玄宗と楊貴妃」「ルクレシヤ」「無名の道」「七年の後」「櫻藤の巻」等を出した。脚本「七年の後」は七年前に別れた戀人が訪ねて來る等の戀愛が復活しさうになる、男はそれをのける。女は電車にふれて死ぬ。作者は極めて眞摯な態度で男の苦悶を裏づけてこの作を立派に生かしてゐる。あくまで白樺派の特徴をもつてゐる作である。この集には外に四篇の脚本を収めてあるが、皆とりど

りに面白い。文學研究のために大正十二年夫人と共に外國に行き同十三年歸朝した。

現住所 東京市四谷區鹽町一ノ二二

近藤浩一路

コンドウコウイチロ(畫)

名は浩(ひろし)明治十七年山梨縣に生れ、四十三年東京美術學校西洋畫科を卒業し、讀賣新聞等に漫畫を書いてその一種異つてゐる畫風で廣く知られてゐる。文展へは第七回に「下京の夜」を出した。大正七年赤穂會同人となり、又美術院同人となつた。大正十二年長さ十間の長物「鵜飼六題」を出して好評を博した。

現住所 京都鹿谷東京市本郷區湯島新花町一〇三

靈雲寺境内

近藤雪竹

コンドウセツチク(書)

名は富壽、長く遞信省に奉職して従六位勳六等を授けられた。氏は夙に書道に志して日下部鳴鶴の門に入り、大正書界の明星と仰がるゝに至つた。

今は漢魏六朝の墨蹟を研鑽して諸體をよくし、中にも隸書に於ては他に比類なきほどの妙手と稱せられるに至つた。「楷書前赤壁賦」「蘭亭帖」「二宮尊徳翁報徳訓」等はよく氏の長所を出してゐるので好評を得てゐる。鳴鶴門中最も名をなしてゐる人では丹羽海鶴比田井天來及氏を推すと云はれてゐる。大正十年五月「氏が遞信省に勤續すること四十二年になつたので表彰せられた。

現住所 東京市外中澁七二六

サの部

故西郷孤月

サイゴウコゲツ(畫)

名は規、孤月は號父は信州松本藩主であつて名を續と曰ふ。夙に東京美術學校に繪畫を學び明治二十七年業を卒へて同校の助教授となり、幾もなく同校に紛擾あつたので岡倉覺三氏等と共に之を去り、更に相謀つて谷中に日本美術院を創立した。

孤月人となり豪宕で筆力雄健大に橋本雅邦の屬望する所と爲り其の女に配した。後故有つて妻を去り、各地に浪遊し深山大澤を跋涉し天然の山水を探り以て筆力を養つた。四十五年臺灣に航し揮毫して大に名聲を博し、更に支那に遊ぼうと欲して臺北に淹留中遽かに病を得て東京に歸養し、大正元年八月三十一日遂に歿した享年四十。氏は晩年多く地方にあつてあまり振はなかつたが、嘗つては下村觀山、横山大觀、菱田春草等の諸氏と共に一時橋本雅邦門下の四天王と稱せられたものである。その代表作には第三回繪畫共進會出品の「春曉」第九回の「高砂」等がある。

故税所敦子 サイシヨアツコ(歌)

京都の人、林氏の出で二十歳の時薩摩藩士税所篤之の後妻となり、二十八歳の時夫に先立たれ、翌年夫の郷里鹿兒島に赴き姑に至孝を盡して大に淑徳の譽があつた。藩侯齊昭は其の善行を賞して世子の傳としたが、世子の夭折したので敦子は之を

悲しんで殉死しようと思つたが、姑は之を止めた。藩主久光侯の息女香蘭院が近衛忠房に嫁した時、侍女として従つて行つた。明治八年皇后陛下國內に才女を召された時、高崎正風は敦子を推薦した。これより兩陛下に仕へて文學の諸務を掌り、御製御歌の拜寫をしたり、宮女の質疑に答へて盡すところ多かつた。後腸を病んで明治三十三年二月四日年七十六で卒した。「御垣の小草」はその家集である。

うちとけて、まひ遊べども黒髪の

亂るゝ筋は、なき世なりけり

あしたづの、つけし跡のみ、見ゆるかな

雲井の庭の今朝の初雪

時計る、器の針も、をりくは

後れさきだつ、世にこそありけれ

不綺語戒

深からぬ心や見えむ水の泡のうきたることを人に語らば

爲造惡業因

子を思ふやみこそやがで後の世の暗きに迷ふし
るしなりけれ

信解品の心を

谷ふかく音をそなきける呼子とり巢立ちし花の
かけを忘れて

提婆品の心を

わたつみの底にひらけしはなかつらかゝるみの
りをたのまさらめや

藥王菩薩

暗き夜のやみを照らさん人なれやその身をのり
のともし火にして

不惡口戒

こゝろして吹なはをきの上風も人の耳にはさは
らざらまし

平素筆寫した法華經の心持を歌に詠んだものは
この外澤山ある

西條八十 サイシヨウヤツ(詩)

明治二十五年一月東京市牛込拂方町に生れ、早稲

田大學英文科を卒業後東京帝國大學文科の撰科を出た。氏は大正十一年より長詩雜詩「白孔雀」を創刊し、之を主宰して編輯に従つてゐるが、その執筆者のうちには日夏耿之助、吉江孤雁、前田春聲、柳澤健、堀口大學、故北村初雄の諸氏を網羅して、純抒情的詩的立場に立つて象徴主義をどこまでも押通さうとするのであるから、其特色は極めてはつきりしてゐる。詩集「砂金」「靜かなる眉」「見知らぬ愛人」「空の羊」童話「不思議な窓」抒情小曲「海邊の墓」譯詩集「白孔雀」の外「現代英詩講話」「動物自叙傳」等數多の著作がある。「見知らぬ愛人」は氏一流の懐しい夢の故郷を思はせるもの、「空の羊」は眞晝の美しい夢を歌つた「パステル」「蠟人形」純情の女性相良恵子さんに送つた抒情詩「空の羊」孤獨感を歌つた「夕星」等愛誦すべきものが多く、またその詩作の餘裕を以て、外國の童話、民話、詩、小説からとつて創作した童話「不思議な窓」は、その空想を自由に高翔させて、この局限された現象世

界の背後に在る輝かしい超精神の世界の存在を窺はしめ、「海邊の墓」には婦人や子供のためにものした抒情小曲を集め山田耕作氏の作曲をも添へてゐる。氏の詩の特色はかの庶民的な白鳥氏や福田氏等とは反對にあくまで高貴で氣品を尊んだ象徴的なものである。氏は株式會社建文館社長兼取締役を勤めてゐたが小石川に探偵専門の書籍店を開業して眞珠書店といふのを計劃中だそうな。大正十三年四月柳澤健と共に渡歐した。

心の月

心のおくの

月かげの

照らすこみちぞ

しづかなれ。

妻をもつれず

わが子をも

誘はでひとり

たどりゆく

心のおくの

月かげの

冴ゆるこみちぞ

たのしけれ

現住所 東京市外淀橋町柏木四三三(目下在外)

齋藤 香村

サイトウコウソン (俳)

本名は芳之助、明治十五年二月二十七日山形縣鶴岡町に生れ、同三十年頃より句作を試み、同四十年頃俳書堂に入り、翌四十一年「ホト、ギス」發行所に勤め後株式會社能樂書院社長となつて現在に至つた。嘗ては「ホト、ギス」や「國民新聞」等に盛に投句したものであるが現在は社務繁用のため作句甚だ少いといふことである。氏の著書には「能樂萬代鑑」「能裝束模様集」「謡ひ様二百十番」「聲の出し方と假名扱ひ」その他能樂に關係あるもの多くある。氏の句は「新春夏秋冬」に出ている。氏は餘技として謡曲、能樂、小鼓、和歌、寫眞等の多方面に涉り、嗜好も芝居、長唄、清元歌澤等多様である。

松低し霜の苦屋の向きくくに

先馬に夕日影消ゆ枯野かな

初冬や江に突き出で、北廂

現住所 東京市麴町區飯田町三ノ九

齋藤 知白

サイトウチハク (俳)

名は伊三郎、明治四年七月二十四日福島縣會津宮の下に生れ、採鑛冶金學を修めて足尾、松岡等に勤めた後、自ら大藏、五萬洞、信夫、茂世路の諸鑛山を經營した。氏は南畫の名家川村雨谷について俳句を學び、正岡子規在世中に日本派に歸し、大正二年「新緑」に引續き「眞白」を發刊した。

萱草の花の赤きに毛蟲かな。

山漆皆花つけて土用かな。

山駕の村に下れり柿若葉。

現住所 東京市本郷區西片町一〇

齋藤 吊花

サイトウチヨウカ (文)

名は謙作、又潮青居とも號し、明治十年二月大阪府下高槻町に生れ、「心扉録」「吊花小品」「天地有趣」等の著がある。主として自然描寫に力を用ひたのであるが今はあまり聞かぬ。

現住所 大阪府泉北郡濱寺公園内

齋藤 豊作

サイトウトヨサク (畫)

明治十三年六月埼玉縣に生れ、明治三十八年、東京美術學校西洋畫撰科を卒業し、翌年佛國に遊び七年間ラファエ・コランに師事して研究した。文展へは第六回に「秋の色」第七回に「夕映の流」を出し、大正三年二科會創立に際して選ばれてその鑑査員となり、其第一回に「初冬の朝」「夏の夕」「水草」「農家の裏庭」「雨後の海」を出した。その得意とする所は風景畫であつて、殆んどそれが専門であると言つてもよいほど自然描寫をやつてゐる。

現住所 東京市麴町區平河町五丁目一九

齋藤 俳小星

サイトウハイシヨウセイ (俳)

名は徳藏、明治十五年九月埼玉縣所澤町大字所澤に生れ、十二三歳の頃二人の姉と共に月並の老人と共に家に團樂して句作したのが始めて、其の頃既に「煙草すふひまもなき年の師走かな」と云ふやうな句を作つた。三十三年の頃上京中家に凶變があつて歸宅後家に在つて友人の勸誘により岡村

武野老氏の門に入つて作句三昧に入り、與謝野蕪村正岡子規の句に傾倒するに至つた。三十六年近衛兵に徴集せられ、日露戦役中は殆んど中絶したが、除隊後茶骨氏等と俳諧雜誌「武藏野叢誌」を經營し、約一年の後鈴木芋村氏同誌を繼承してより數年で休刊することになつた。爾來同人と句作に熱中して餘念が無い。氏の句は「ホト、ギス」「俳諧雜誌」「雲母」「山鳩」等の諸雜誌や「東京日々」「國民」の新聞紙等に投稿してゐる。

築城の巨石を運ぶかすみかな

水清く石美しく山爽かな

餘花咲くや谷の中なる谷の寺

現住所 埼玉縣所澤町

齋藤 芳洲

サイトウホウシュウ(書)

氏は下總の佐倉藩士で嘉永五年四月生れた。通稱利恒、字は子常、芳洲はその號である。幼い時から書道を好み、同藩士平林晩香に就いて潭香の流派を學び、明治六年東京に出で、晋唐の書風を研

究し後一家をなした。下谷中學の習字教授を囑托されたこともあるが一般の依頼によつて碑文の揮毫を専門としてゐる。氏が七十一歳の作に「澤國霜遲木未疎、秋來更覺愛吾廬、芭蕉綠潤偏宜墨戲、就明窓學草書」とあるのを見てその矍鑠として尙入木道に精進してゐるのがわかる。

以前住所 東京市日本橋區本町一ノ一〇

齋藤 茂吉

サイトウモキチ(歌)

本名は茂吉(シゲヨシ)茂吉(モキチ)はその號である。明治十五年七月二十七日山形縣南村山郡堀田村金瓶に生れ、東京帝國大學醫科大學を卒業し、故伊藤左千夫の門に入つて歌を學んだ。歌道に對する氏の豊かな天分と恐るべき心熱とは今や新派の一方の大將格となつて、押しも押されぬ重鎮となつた。長崎醫專の教授を奉職する傍作歌や歌論「アラ、ギに發表した歌集」「赤光」「あらたま」評釋「短歌私鈔」「童馬漫語」等の著がある。氏の作歌態度はいかにも眞劍である氏は人の素通を

してゆく所を二度も三度も立止つて考へてゐる。かゝる眞劍な態度に住することは到底普通の人に出来ることでない。「童馬漫語」の如きは實に好收穫である、尙嘗て行つたアラ、ギ所載の萬葉輪講は一讀の價值がある。鋭敏なる感受性と純眞なる心情とによつて生れる氏の歌には撥ね返すほどの

生命の力がこもつてゐる「ひた赤し煉瓦の塀はひた赤し女刺し、男に物言ひ居れば」氏にはかくの如く異常な世界を詠んだ歌が可なり多い。これは氏の専門の職掌から自然かゝるものが題材となるのである。

かなしきいろの紅や春ふけておさな草さける野
べを來にけり。

山がひに日に照らされし田のみづやものゝ命の
幽かなりけれ。

山かげのしづかなる野に二人ぬて細く萌えたる
蕨をぞ摘む。

道の奥は春まだ寒し遠じろくはさまを出づる川
のさびしさ。

われひとりと思ふ心に居りにけりをさなき露す
でにねむりつ。
みちのくのわが故里にかへり來て白頭翁を掘る
春の山べに。
谿ふかく白きは吾妻山なみの雪解の水のたぎつ
なるらし。

大正十年頃獨逸に留學して精神病理學を研究し、歸朝の後腦皮質の實驗研究で醫學博士となつた。現住所 東京市赤坂區青山南町五ノ八一

齋藤 與里

サイトウヨリ(畫)

名は與里治。明治十八年九月埼玉縣北埼玉郡樋遣川村に生れ、初め三十八年京都へ出て西洋畫の大家淺井忠に就いて學び、三十九年二月、鹿子木孟郎と共に佛國に渡つてジャン・ポール・ローランスのアカデシイ・ジュリアンに學んだ。後、イタリイ、スペイン、スエーデン、ベルギー、オランダイギリスの諸國を歴遊して四十二年九月歸朝し、其の作を太平洋畫會展覽會に出品し、又瓊珩洞に

展覧した。大正元年高村光太郎、岸田劉生、木村莊八、眞田久吉、小林徳三郎、萬鐵五郎等とフェーザン會を起し、大正五年には萬鐵五郎、川上涼花、眞田久吉、川村信雄、齋藤五百枝、又木亨三、埴原久和代等と日本美術家協會を起した。文展へは第九回に「朝」第十回に「收穫」を出して後者は直に特選となつた。フェーザン會、日本美術家協會、國民美術協會等にも出品がある。歸朝して間もなく「日本及び日本人」に「繪畫の新傾向と私見」を發表して以來多くの新聞雜誌に美術批評の筆を執つてゐるので作家としても評論家としても有名になつた。

八年大正日々に入社した。亦一方春陽會の驍將として活躍してゐる。

現住所 大阪市外天下茶屋寺田筋北

故齋藤綠雨

サイトウリョクウ(小)

舊藤堂藩の典醫齋藤謙堂の長子で名を賢と呼び年少の頃から天才縱横奇警の筆致人をして驚嘆せし

めた。上京の後初めて「曙新聞」に入り尋で「自由の燈」に移り後又「めざまし新聞」に入り綠雨と改め筆力益々自在、その深刻なる文藝評論は漸く其の特有に歸するに至つた。爾後「東西」「今日」「國會」「改進」「朝日」「讀賣」「萬朝」等の諸新聞に出入し最後に「二六新報社」に入つた。其痛罵奇警皮肉の評論は明治文壇に一異彩を放つた。著す所の小説「油地獄」「あられ酒」「あま蛙」等最も名高い。性狷介興が湧かなければ筆を執らない。晩年肺を患ひ孤獨窮迫三十七年四月十三日本所區綠町の藤堂藩舊知の寓に逝いた。年三十八。死する前自ら死亡の廣告文を草して發表した。本郷區東片町の大圓寺に葬り、法號は春曉院綠雨醒容と諡られた。氏の號は宮崎晴瀾氏の撰んだもので本所綠町に育つた氏によくあふものであつて綠雨は若葉の雨といふことである。幸田露伴氏は綠雨の最も敬服してゐる人であるところから、氏の案によつて雅號をそのまゝ春曉院綠雨醒容として、居士號も何も附けないことにしたのださう

現住所 東京市芝區芝愛宕町二ノ一四

坂井久良岐

サカイクラキ(川柳)

川柳新派の宗匠であつて井上劍花坊等と共に斯壇の大家と仰がれてゐる。嘗つて寺崎廣業畫伯の新年宴會に川柳の短冊二百枚を撒布して大喝采を博したことがある。氏は畫贊が得意で、畫を妨げぬ巧みな詠み方をしてゐる。

筑前は辨天さんが唄ひ出し
年々歳々同じからざる候補
朝顔にわれはめし喰ふ男かな
袁世凱朕と稱した夢を見る
鬢さんも新傾向の選者なり
天命を成るほど知つて河東節
令夫人丸太格子に目を見張り
八右衛門の翁がはじめし十あまり七文字の歌に
我はよりなむ。
春
享樂のこゝの巷も朝とくに坐る戀しき大江戸の

酒井覺醉

サカイカクスイ(畫)

播州の人、元治元年七月生れた。父は默喙と言つて氏はその長子である。幼名金三郎、大斗と號す。會つて高橋由一に就いて洋畫を學び、傍ら寫眞術を研究して朝野新聞社に聘せられ、繪入朝野新聞の洋風挿畫を擔任し、寫眞電氣版を以て紙上に光彩を添へた。本邦新聞洋風畫の挿入は之を以て嚆矢とする。後氏は寫眞師となつたが洋畫の素養を之に應用して濕版法乾版(瞬間寫眞)不變色寫眞其他技術の精を附した。氏は又寶生流謡曲を好み、家元寶生九郎の直傳を受け、業餘友を集めて謡音を弄してゐる。

やなぎやのお藤がさせる横櫛のうつれる水に酒
中花咲くも

氏は川柳の詩的立場は諷刺皮肉など言ふ小さな藝術に立脚してゐない。もつと大きな日本民族享樂の大團體のコーラスであることを主張して居る。現住所 東京市麴町區富士見町六ノ一〇

坂井犀水

サカイサイスイ(評)

明治四年に生れて坂井家の養子となつたが、中學時代に養家の没落に遭つて夙に自活の途に立たねばならなかつた。實家は氏の幼年時代金澤藩の家老の一分家に仕へた關係で、宏壯な邸宅と庭園と什器との中にひたつて居たので、美術と園藝に對する趣味を持つやうになつた。二十四年帝室博物館技手に任ぜられ臨時全國寶物取調局に兼務し、奈良の京都に屬出張して古美術に親しむ機械を得た。二十六七年頃加越能郷友雜誌に美術論を發表したのが美術評論をもつて立つ因縁であつた。二十八年宗教研究の念切に動いて、京都大徳寺の廣

洲老師に參禪し、更に三十年轉じて神戸關西學院其他でキリスト教を研究した。三十三年畫報社の「美術畫報」編輯を囑せられ、三十五年「畫聖ラファエル」を著し、次いで「美術新報」創刊の企に參與し、「月刊スケッチ」を發行し、白馬會の機關「光風」の編輯に當り、三十九年凱戰紀念五二會審査幹事並に美術部審査員を囑託せられ、四十二年再び「美術新報」に入つて主幹となり、大正二年「美術週報」主幹となつた。これ後に「美術旬報」となり「美術月報」となり、大正十二年の末に至つて「國民美術」となつた。大正五年「美術」の主幹となり、朝倉文夫氏の後援を得た。かくて多年美術館建設の事を提唱し、爾來同志を説いて美術建設期成會を起して輿論の喚起に力めた。氏はかく二十五年の長き間美術界に貢獻するところ尠くないので、大正十三年四月二十八日祝賀表彰されるに至つた。

現住所 東京市

堺 利彦

サカイトシヒコ(文)

もと枯川と稱した。一名貝塚澁六といつてゐる。明治三年十一月福岡縣京都郡豊津村に生れ、第二高等中學校に學んだ。小學校教師や新聞記者をしたことがある。社會主義者として幸徳秋水等と共に活動し入獄したこともある。澁六は獄中米四分麥六分の飯に命をつないだ記念ださうな。この頃鋒銚を藏めて賣文社を起して文章の代作を業とする傍雜誌「新社會」を發刊してゐる。著書頗る多く「ルソーの自傳」「社會主義倫理學」「賣文集」「自由社會の男女關係」「人と超人」「女性中心説」「社會主義研究」「猫のあくび」「新社會」「猫の百日咳」「樂天囚人」等の著の外、「薔薇の刺」等の作がある。

文章の方は所謂文士の企及し得ないよい要素をもつてゐるが、極端な赤化思想をもつてゐるので其の筋の注意人物となつてゐる。令嬢眞柄女史も亦父の感化によりて極端に新しい思想を懷き其の筋

の手によつて拘引されたことも一再ではない。大正十二年の夏に起つた大事件にも山川均氏伊藤野枝女史等と共に目星をつけられたことは人の知る處である。

病監はさすがに人の家に似たり花園近く窓低くして。

くろがねの窓にさしいる日の影のうつるをまもりけふも暮しぬ。

行春を若菜の底に生きのこる娘十五にして我よりも丈高き春。

既にいく年白髪ぬきつゝ文を賣る十二の骨をほらむりてより後。

等の歌の外、次の俳句によつても利彦氏の思想は十分に汲み取ることが出来ると思ふ。

髪刈れば胡麻鹽おつる寒さかな。最近に出した「野外劇的一幕」は、東京監獄で大震災に逢つた前後の深刻な思出を例の如く皮肉に且つ鋭く書いたものである。

現住所 東京市麴町區八ノ二四

榊原紫峯

サカキバラシホウ(畫)

名は安造。明治二十年八月京都に生れ、初め京都美術工藝學校に學び、後に繪畫專門學校に入つて四十四年優等の成績をもつて卒業した。文展へは第三回に「動物園の猿」第四回に「ながき日」第五回に「花ぐもり」第六回に「南園の一隅に於ける曲と眠り」第七回に「夕榮」第九回に「白梅」第十一回に「梅雨晴れ」を出し、褒状又は三等賞を得、院展へは第二回「秋草」を出して好評を博した。大正七年一月、土田麥僊、小野竹橋、村上華岳、野長瀬晚花等と國畫創作協會を起して爾來文展へは出品しない。大正十二年大震災後大阪毎日新聞社主催の日本美術展覽會の日本畫部審査員を囑せられた。

現住所 京都市岡崎御坊前

阪口五峯

サカグチゴホウ(詩)

名は恭、通稱仁一郎、越後の人、雅文會の顧問と

して詩壇に重きをなし、其の作詩は「大正詩文」「斯文」其他に發表してゐる。明治三十七八年役の頃議政壇の人となつたこともある。

川中島懷古

亂山大野環四方、關左形勝如荆襄、
二水中分川中島、干今人說古戰場、
越公雄邁本天授、機山輜略旗鼓當、
孫吳並世境壤接、一龍一虎相騰驤、
鷺湖秋風拂星墜、失箸大息好敵亡、
越公固爲仁義戰、鹽車不辭輸敵糧、
風義堂堂照簡冊、千載流芳名字光、
我來此地弔遺跡、英雄不見空彷徨、
春日之山青翠嶺、北望臨風神爲傷、
明發立馬古城上、天寒日暮雲荒荒、
館森袖海氏は之を評して「韓蘇の手筆、此に非れば此の題目を賦するに足らず。眞に國分青厓氏の謂はゆる一氣莽々蒼々然たるもの」と、其の凡手で無いことが知られる。

氏の曾祖考文仲は醫師であつたが傍俳句俳文を善

くし、良寛をその五合庵に問うたこともあつた。その時の良寛に示した歌に次のやうなのがある。萩箸と世に聞くものを茅箸は花惜しみてか枝惜しみてか。

故坂崎 斌

サカザキアキラ(文)

新聞雜誌記者、紫瀾と號し、高知藩士であつて幼時神童と言はれた。十六歳の頃藩の致道學館に教授となり、出で、阪谷朗廬の門に遊び、塾長に擧げられた。明治八年松本裁判所判事となり、征韓論を唱へて官を辭し、土佐に歸つて百做社を起し又自由黨の創唱者板垣退助の下に在つて愛國公黨の設立に盡力し、爾來新聞雜誌の記者となつた。氏はまた明治維新の史蹟に通曉してゐるので維新史料編纂局編纂委員を命ぜられたが大正二年二月十一日腦溢血を患ひて歿した年六十一。東京青山に葬つた。

坂田九峰

サカタキユウホウ(詩)

氏は快太郎、明治二十一年の帝大卒業で、第三高等中學校の教授となり三十三年六月獨逸に遊學し、三十五年歸朝して復職し三十七年四月醫學博士の學位を與へられた。岡山醫專教授岡山縣病院外科醫長として長く學理と實際に通じてゐる氏は四十三年六月職を罷めて、上西川の自邸で開業し今日に至つた。氏は頗る愛嬌に乏しく醫者には相應しくないと言はれてゐるが、交り深いものは皆氏の眞味を味ふことが出来る。眞面目にして其間に洒落を言うて時に諧謔人の腮を解かしめたり奇行逸話に富んでゐる。氏は頗る詩を能くし又書に巧である。高野竹隱の指導を受けた西川吟社は氏の率先して組織したところ、氏は關西詩壇に於ける一重鎮であると言つても過言であるまい。

丙辰元旦

日出三山外 春回萬國先 東風方柳色
絕域尙烽烟 休事虎狼噬 各憑天地全
皇州佳氣滿 瑞鶴下豊田
甲寅元旦

湛々硯碧帖三春波、 要唱開年第一歌、
籠罩梅花三萬里、 東春詞筆壯山河、
現住所 岡山市西川

坂田 玉輔

サカタギヨクホ(劇)

氏は大阪の演劇著作者であつて、天保十四年九月九日京都に生れ、幼より文學を好み劇界に交つて深く著作に留意し、明治八年始めて演劇著作者となり佐藤玉輔と稱した。其後中村翫雀京阪の間に劇遊するに及んで翫雀と深く交りを結び、終に魁と稱し又金澤龍玉の舊名繼で龍玉と改めた。著作の世に行はれるもの頗る多い。

現住所 大阪市南區笠屋町二九三

故坂田 警軒

サカタケイケン(漢)

名は文平、字は夫卿、天保十年五月備中川上郡九名村に生れた。嘉永六年阪谷朗廬が興讓館を起した時、警軒年十五であつたが行つて學んだ。朗廬之を愛すること子の如く、警軒も亦これに事へるこ

と父のやうであつた。勉學殆んど寢食を忘れるほどであつたため學業も亦大に遊んだ。後都講に擧げられたが生徒皆悦服した。萬延中肥後に遊び木下犀潭の門に入り、井上毅、竹添進一郎と同じく學んで、木門の三才と稱せられた。尋いで江戸に遊び安井息軒に従學したが、同門の人々はその長者の風に感化された。のち備前藩主池田氏の聘に應じて賓師と爲つた。明治元年朗廬聘せられて廣島藩に赴いた時、警軒繼いで館長となり四方より從學するもの益々多くなつた。山田方谷閑谷翁を督する時、氏も招かれて行つた。明治十二年縣會議員となり、次いで議長となつた。三十三年我邦の帝國議會が始めて開會された時選ばれて衆議院議員となり後再選された。其後慶應義塾、高等師範學校、斯文學會、哲學館等の講師と爲り、至るところ人望があつた。二十二年八月十五日年六十二で歿し青山に葬られた。著書誌文若干卷ある。警軒は儀容頗端莊恭謙、沈厚寡默、喜怒色に形さない。雅容あつて物と忤はない。學問は洛陽を主と

して漢唐に出入し、生徒を教へるには材に従つてこれを教導し徳化一郷に遍く、馬丁牧童まで亦禮讓を知るに至つたといふことである。

坂本紅蓮洞

サカモトグレンドウ(文)

名は易徳、慶應二年九月東京麻布六本木に生れ、少時田中天徳について數學を學び、後慶應義塾を卒業した。嘗つて高知中學、立教學校等に教師を勤めたことがある。現に慶應義塾大學文學部教授で東京帝國大學文學部講師をしてゐる。
現住所 東京市牛込區辨天町六ノ七

坂本繁二郎

サカモトシゲジロウ(畫)

明治十五年三月久留米市京町に生れ、早く父を失つたので十二歳の時、其地の中學校教師森三美に就いて洋畫を學んだ。三十五年、青木繁と東京に出で、小山正太郎畫伯の不同舎に入つた。文展へは第一回に「茂安村の一部」第四回に「張り物」第五回に「海岸」第六回に「うすれ日」第七回に

坂本雪鳥

サカモトセツチヨウ(文)

名は三郎、明治十四年四月福岡縣柳河に生れ、明

「魚を持つて來てくれた海女」を出し、「海岸」は三等賞を得た。大正三年、二科會の鑑査員となり第一回に「牛」第二回に「牛」第三回に「母子」第四回に「髪を洗ふ」等を出した。「日本風景版畫」の作があり、太平洋畫會會員であり二科會會員として亦重要な位置を占めてゐる。
現住所 東京府下池袋字大原一三七八

坂本石創

サカモトセキソウ(小)

本名は石藏、明治三十年一月十八日愛媛縣西宇和郡川之石町に生れ、八幡濱高業學校を卒業して大阪北濱の仲買店員となつたことがあり、其後上京して國民美學會に半年餘り勉學のち所々を流浪して今日に及んだ。「開かれぬ扉」「梅雨ばれ」等の著がある。
現住所 千葉縣東葛飾郡布佐町

治四十年東京帝國大學文科大學國文科を卒業して「能學私論」「能樂小話」等の著書を出した。雜誌「能樂」を發行經營してゐる。現住所東京市本郷區駒込林町二二八

阪本 蘋園

サカモトヒンエン (詩)

名は彭之助、字は利卿、一に百鍊と言つて愛知縣士族永井芝椿の三子であつて、安政四年六月二十四日尾張國牛毛荒井村に生れ、元老院議官阪本政均に養はれて其の家を襲いだ。幼時名古屋に在つて塚田穆齋、青木樹堂、森春濤に就いて漢籍及詩文を學び、弱冠上京して春濤の家塾に入り、旁ら鷲津毅堂、三島中洲に經史と屬文を巖谷一六に書道を學んだ。

明治十二年内務省に奉職して以來滋賀縣奈良縣岡山縣控訴院、貴族院内務省東京府等の參事官又は書記官に歴任し、三十五年福井縣知事となり、鹿兒島縣知事を経て名古屋市長となり、貴族院議員に勅選せられ、日本赤十字社副社長を命ぜられ

た。氏は壯年の頃主として「新文詩」「花月新誌」に、中年の頃「花香月影」に現時は大正詩文に寄稿してゐる。大正十年支那に游んで「西游詩草」一卷を著した。氏の曾祖父永井星渚は文化年中漢儒として名高く、經學に關する著述が多し。祖父士前は俳諧茶道に長じ、兄禾原は詩を善くして來青閣集の著がある。小説家永井荷風氏は實に氏の令甥である。

謁西郷元帥家廟

西郷元帥二十周忌辰、謁日黑家廟、廟

有橋本博士匾額、乃次其韻書感、

追懷舊德喜兼悲、忠孝傳家有此祠、

滿地清陰遺愛樹、恩風惠露長繁枝

星巖先生題詞

文耀森芒角、濃天降軼材、騷壇名自重、

峻節學相該、眼藐三槐貴、胸藏八斗才、

後賢興范陸、先路闢歐梅、鴨水安吟榻、

蠡湖倚釣臺、妖雲東海起、陰雨北門來、

老淚紛成血、雄心難化灰、空思咸有德、

其奈式微哀、身死不蒙辱、婦言能免災、
千秋詩卷在、餘響震春雷、
雅文會主宰の目下勾水氏は後詩を評して、「星巖を稱揚して殆んど極致に臻り、末段尤も神來の趣がある」と言うてゐる。

羅漢寺

石徑躋攀雨未收、白雲翕忽沒僧樓、

平生夢寐阿羅漢、相見不須佳句酬、

現住所東京市麻布區飯倉町三ノ二四

故坂本四方太

サカモトヨモタ (文)

明治六年鳥取縣因幡國岩井郡大谷村に生れ、同三十二年東京帝國大學文科大學を卒業し、東京帝國大學附屬圖書館に奉職したが大正元年辭任し同六年五月十六日四十五歳で病歿した。氏は日本派俳句をよくしました正岡子規の唱道した寫生文にも長じて自分にも書き他人のものも撰して大にこの宣傳に努力したものである。「寫生文集帆立貝」は高濱虛子との合著、「寫生文集」は正岡子規及夏目

漱石との三人合著、「寒玉集」は子規、虛子、河東碧梧桐、内藤鳴雪及松瀬青々との六人合著、の外氏一人で編した「續寫生文集」といふのがある。「續寫生文集」には附たりとして氏の寫生文話といふものを載せて、寫生文の何たるを知らぬ當時の人々に教育をしてゐる。中に「寫生文の意義」「寫生とは何ぞや」「寫生文と俳句」「文章の餘裕」「山の無い寫生文」「非人情」等の題目を設けて諄々説いてゐるが、今より見れば何れも珍らしいことのない説明であり主張である。しかし今日の人にこの題目この説明を珍らしがらぬやうにしたのは取りも直さずこの作者の宣傳が大に効果を示して寫生文が一般的になつたことを示すものである。文章の餘裕とか非人情といふ考が決して漱石のみがつてゐたものゝやうに言ふ人のあつたのは當時のこれらの書物を一讀して置く必要がある。尙氏の主張として「編者の持論として、寫生文は寫生文家と稱する専門家の私すべきもので無く、苟も文章に携はるほどの人は誰彼の區別なく

う。氏本名は「シハウダ」と言ひ、雅號としては「ヨモタ」と讀ませた。氏は又別に文泉子とも號した。

故佐久間鐵園

サクマテツニン(畫)

名は健壽。嘉永三年十一月仙臺に生れ、父について北宗畫を學んだ。日本美術協會會員となり、明治四十年、高島北海、望月金瓶、荒木十畝、山岡米華、小室翠雲、田中頼瞻、益頭峻南等と文展對抗の正派同志會を結んだが、第四回から第七回まで文展日本畫部審査員に擧げられた。作品は第四回に「四季山水」第五回に「辟邪迎福圖」第六回に「茂松清泉圖」第七回に「溪山捕魚、寒山歸樵」を出した。氏の家は代々仙臺藩の畫員であり斯道の大家である。大正十年四月二十五日病歿した。生前の住所 東京市神田區駿河臺紅梅河岸一

佐久間法師

サクマホウシ(俳)

本名は政雄。明治十一年五月三日福島縣田村郡澤

研究して自家の文章に應用する必要がある。また材料さへあれば誰にでも容易く出来るものである」と言つてゐる。又「今日では寫生文といふものが多少世人に認められて來たやうであるが、讀者の範圍はまだ至つて狭い。よつて一層廣く寫生文趣味を讀書社會に傳へたい云々」といふてゐるのを見ても、四十年代はまだこの文體の廣く行はれてゐなかつたことがよくわかる。氏は俳人としても露月、露月、紅綠、東洋城、漱石、蝶衣、繞石等と駢馳したものである。今その句を擧げれば次のやうなものがある。

鮫鱈の顔に喰ひ付く親爺かな

海苔龜朶は南に遠き汐干狩

泥ながら田螺入れたる小桶かな

梁上の君子の尻や明け易き

瓜畑に南瓜浮名を流しけり

等の如きはその作の代表的なものである。これを見てもまだ檀林調の臭氣がぬけきらないのと純ホト、ギス理想調の混同してゐるのに氣附くであら

石村大字青石といふ舊三春藩領に生れ、小學校卒業後國語漢文を研究し、二十一歳の時上京して薄記學を學び、脚氣病のため半途退學して福島新聞の記者となり、二年の後合資會社共同生糸荷造所の事務員となり、腦神經衰弱症を起して北海道に移住し、四十四年福島に歸り再び元の會社に入つて事務員となつたが、大正七年十月銀行員となつた。氏は新聞記者時代に於て矢田挿雲氏と相知つて根岸派の俳句に興味を有して其の指導を受け、爾來高濱虛子、内藤鳴雪、河東碧梧桐の諸家と相知り雜誌ホト、ギスの讀者句作者となつたが、俳句よりは室ろ寫生文に多くの興味を有してゐる。氏の句は「ホト、ギス」「日本及日本人」「福島民友新聞」「國民新聞」の外氏の選者となつてゐる福島新聞等に投稿し、句の多くは「新春夏秋冬」ホト、ギス雜詠集」等に載つてゐる。氏は餘技として催眠術を研究してよく多くの人の病氣を治癒するに巧みであるさうな。

埋火の鐵瓶に蠅眠りけり。

短夜の明くる木の間や水煙り。
もの讀んで焔に近き樁火かな。

一夜置く苗尻の蛭朝淋し。

藻にふれて身を翻す金魚かな。

現住所 福島縣伊達郡桑折町

佐久間政一

サクマセイイチ(評)

氏は「表現派の藝術」を著して、表現派の起源より今日までの推稿、表現派の制作方法や技巧の總てに亘る説明と論評との外、代表的作品數十種を掲げてゐる。

現住所

櫻井忠温

サクライチユウオン(文)

有名なる「肉弾」の著者であつて、陸軍名うての文章家と言はれてゐる。氏は乃木將軍の幕下に小隊長として征露の役に従ひ、大に奮戦して右腕の自由を失つたが、氏の戦功と文才と頭腦には得易くないものがあつて、今日でも陸軍部内の重要人

現住所 名古屋市熱田東町玉ノ井

笹川臨風

サ、ガワリンブウ(文)

物である。趣味甚だ廣く、文學、音樂、繪畫、彫刻、詩等にわたり、讀書を好み、坐談に長じ、左手なほ書をよくする。繪畫の巧なることは世に定評のあるほどである。長く經理學校の生徒隊長として多くの主計を養成し、其後京都、滿洲、小倉等の任地にあつたが、最近陸軍省に入つてその新聞班長を勤める筈になつた。「肉弾」に次いで「銃後」「雜囊」を書いて洛陽の紙價を高からしめたが、近くは滿洲での體験を本として「黒煉瓦」を小倉の「双樹閑房」で書いた。實兄鷗村も文章をよくするは人の知るところである。

櫻井天壇

サクライテンダン(文)

名は政隆、明治十二年十月新潟縣村松町に生れ、東京帝國大學文科大學獨文科を卒業し、第八高等學校の教授となつて現に其職にある。文藝上の紹介や評論を一時盛に出したがこの頃は教務と言ふ俗務に忙殺されてあまり出さぬ。嘗つて獨逸に留學して伯林の大學に學んだことがある。

名は種郎。明治三年八月東京神田明神下に生れ、二十九年東京帝國大學文科大學國史科を卒業した。壯時田岡嶺雲白河鯉洋等と共に「江湖文學」誌上に論陣を張り雄健奔放の筆をもつて稱せられた。宇都宮中學校長として令名あつたが後明治大學、法政大學、專修學校等に講師たる傍、史傳及び歴史小説にその健筆を揮つてゐる。「元祿時代粧」「時代と人物」「南朝五十七年史」「織田信長」「新田左中將」「支那文學史」「遊俠傳」「九郎判官」「八幡船」等の著がある。

大正十二年頃より成田の不動として有名な寺院の經營にかゝる學校の校長として教育の任に當るやうになつた。文學博士。

現住所 東京市本郷區西片町一〇にノ四四號

佐々木孝丸

ササキタカマル(譯)

佐々木信綱

ササキノブツナ(歌)

明治三十一年一月三十日北海道釧路國川上郡北田村に生れ、父祖の業たる僧侶たらんとしたが、或事情のため寺院を離れて、小學校を中途で退學せしまゝ郵便局員となり、大正八年四月これを辭職して十一年叢文閣に入社して今日に至つた。翻譯「赤と黒」前後篇其の他の著がある外、評論「戯曲の創造性と價值」「世界主義文學と世界語」「革命詩人マルセル・マルチネ」翻譯「復讐(アンリ・バルビュス)感想「アテイストの獨考」隨筆「妖僧ラスブチンとロマノフ家」及び童話等の諸作を「種蒔く人」「早稲田文學」「解放」「白鳩」其他の新聞雜誌等に發表してゐる。現に叢文閣出版部員として出版の方面にも力を盡してゐる。尙前記翻譯「赤と黒」は十九世紀佛國の作家スタンダールの傑作を譯したもので、原書はトルストイの大きに激賞したものである。或る僧侶が信仰と戀とに悩む兩面の姿を深刻に描いたものである。

現住所 東京市外代々木上原二二五

號は竹柏園(なぎのその)明治五年六月三重縣鈴鹿郡藥師村に生れ、幼より家學をうけ、父に従つて遊覽旅行の途に上つて歌道にいそしんだ。明治十七年東京帝國大學文科大學の古典科に入學して二十一年に卒業した。歌風は新に走らず舊になづまず中性的のものである。早く出した歌集に「おもひ草」「新月」等がある。又「日本歌學史」「歌學論義」「和歌史の研究」「萬葉集選釋」「和歌名所めぐり」等の外數多の著書がある。大正六年七月「和歌史の研究と日本歌學史」の研究に對して帝國學士院より恩賜賞及び賞牌を授けられた。東大文科大學講師、明治天皇御製編纂委員竹柏會主宰、機關雜誌「心の花」主幹氏の文學は決してうまひものではないが面白い味がある。氏の筆蹟は毛のなき筆で書いたやうな一種異つた體であるが頗る雅致がある。

さて氏の歌壇に於ける勢力は貴族の令嬢達にだけ

でも大したものであると言はれてはいるが、成るほど「心の花」の廣く出るものを見ても現歌壇に根強いものをもつて居さうに見ゆる。しかし氏は歌學の研究に多く力を入れて作家の方は第二の仕事としてゐるのである。氏が「思ひ草」や「新月」を出した頃は新人として大に喜ばれたものであるがそれは過去の時代となつた。

霧こめてかりがね寒し君とわが別れし夜半に似たる夜半かな

何ごとも知らぬ人すら家毎によろこぶ聲のきこゆなるかな(憲法發布)

藥賣る家の門べを叩く子が髪吹き亂すさ夜嵐かな

室の隅の鎌倉彫の大き卓久に來ざりし我待ちおけり(鎌倉にて)

行く秋の大和の國の藥師寺の塔の上なる一ひら

の雲

三の舶七の車にみちみたま今のむかしの旅づとをこそ(新村博士の渡歐を送りて)

國つ歴史黄金の文字によそひ書かむ大正の十とせ三月の三日(皇太子の御外遊を送り奉りて)

大御船香取鹿島の神靈立派ひいまさむ御前に御後に(同)

尙大震災火災の爲に井上通泰博士の南天莊文庫や安田家の松の家文庫其他が焼失したが佐々木博士の竹柏園文庫が幸に其の厄を免れたのは仕合であつた。それにしても氏が複製のため預つて大學圖書館に寄託した元晋萬葉原本及殆んど大成した複製金屬版及考證校合の料として共に寄託した各種の異本萬葉の全部を擧げて灰燼としたのは惜しい。殊に氏のライフ・ウォークの一なる萬葉完成が成るに垂んとして水泡に歸したのは遺憾である。

(略統)

本居宣長―同春庭―足代弘訓―佐々木弘綱―佐々木信綱

- ―石樽千亦
- ―川田 順
- ―岡田道一
- ―木下利玄
- ―福原俊丸
- ―新井 洸
- ―角 鷗東
- ―永田龍雄
- ―片山廣子
- ―橋 糸重

現住所 東京市本郷區西片町一〇いノ一六號

佐々木味津三

ササキミツゾウ(小)

本名は光三、明治二十九年三月十八日愛知縣北設樂郡下津貝村に生れ、明治大學政治經濟科を卒業して文學生活に入り「地主の長男」「釣鐘がなくなつた話」「お鷹匠の縊死」「行燈夫婦」「名刺」「父親の鼻」「三つの戀」「兄馬鹿」「二人の弟子」

「戀愛摸索」等の小説の外、隨筆「龍先生の仙術」愚かな復讐」等を「我等」「人間」「女性改造」「改造」等の諸雜誌及びいろくの新聞に發表してゐる。

現住所 東京市外中野町三三〇〇

佐々木茂索

ササキモサク(小)

明治二十七年十一月十一日京都市上京に生れ、翻譯「小公子」の著を公にした外に、小説「商賣」「麗日」「或日歩く」日記「三ヶ月」感想「涓滴餘筆」等の作がある。現に時事新報社文藝欄主任をしてゐる。

現住所 東京市込區天神町一四

故佐々醒雪

ササセイセツ(國)

名は政一、號は醒雪、明治五年京都に生れ大正五年歿した。文學博士、二十九年東京帝國大學文學科大學を卒業して同年第二高等學校、三十二年山口高等學校の教授となり、三十四年辭して東上し金港堂編輯部に入り、雜誌文藝界を創刊した。壯時「帝國文學」に評論の筆をとり大町桂月等と共に少壯論客の尤を以つて稱せられ、今又「文藝界」を主宰して文藝の一隅に雄飛したが、間もなく之を辭して東京帝國大學文科大學講師及東京高等師範學校教授となり、篤實の學者として世に重んぜられた。氏は記紀萬葉の古典に詳しく文典に通じ

六

てゐたが、氏の得意とする處は文學史であつた。殊に徳川時代の文學に通曉し、和歌史に精通し俗曲謡曲等にも造詣深かつた。氏は又父の感化によつて幼より句作を好んでゐたがゆえに、俳諧の方面では作者としても研究者としても屈指の人であつた。作文の新研究にも常に興味を有し自ら學校の作文を擔當して發明する處をどんどん發表し、東京高等師範學校訓導で綴方の研究者として有名な蘆田氏と力を合せて作文綴方の講義録を發行したこともある。

その著に「近世國文學史」「俗曲評釋」「日本情史」等の著がある。氏の文學者となつたのは全く父の感化であることは氏の書いたものによつて明かである。氏の大學卒業當時近松劇研究に力を入れて、「天の綱島評釋」を出したこともあるが、其の研究の正確と見識の孤高にして舊説に捉はれぬ等について已に敬服すべきものがあつた。氏の學究そのものに直接興味を持つて、他に娛樂

る。

生前の住所 東京市小石川區大塚窪町

佐治祐吉

サジユウキチ(小)

明治二十七年福島縣若松市に生れ、會津中學校、第一高等學校を経て東京帝國大學文科大學に入り卒業後大學院に在つて研學し、第一銀行調査係に勤務の傍創作に従つて小説「恐ろしき告白」「堰かれたる力」「涙」等の作を發表してゐる。現住所 東京市赤坂區高樹町一七

故佐瀨醉梅

サゼスイバイ(書)

書家、得三と稱し、有名なる能書家佐瀨得所の次男であつて初め新聞記者となり北海道に住したが後東京に歸り、明治三十一年報知新聞社に入つて編輯を擔當した。大正六年十月十日年五十五で歿した。

故佐瀨得所

サゼトクシヨ(書)

等の名吟少くない。歿後「佐々醒雪遺稿」が出たが氏が多方的な趣味と研究とを知ることが出来

をもたなかつたが強ひて擧げれば謡曲位のものである。尙この謡曲も趣味的なもの道樂としてのもので無く、矢張り氏にとつては一つの研究の對照物であつたのである。四十五年文學博士の學位を授けられ、大正六年十一月二十五日歿した。享年四十六。氏は古典について前記のごとく深い研究をしてゐたが、新文藝に接觸することを常に口癖の様に言つてゐた。氏は慥にその實行者であつた。又他の學説を自己のものとするやうな卑怯なことはなくて芳賀博士などの名を擧げつゝ自己の講義を進めるところは紳士的態度であつたと思ふ。氏の句に

峯越せば雨に散りけり春の雪

あわ雪の峠下るや梅の村

寺荒れて仁王にせまる若葉かな

腹ばうて西瓜に集ふ残暑かな

影法師一つになりし夜寒かな

其實子である。有名なる門人に林有所がある。
(傳統)

糟谷磐梯—星研堂—莊田膽齋

佐瀬得所—子佐瀬醉梅
門人林有所

故佐竹永海

サタケエイカイ(畫)

福島縣會津の人雪村の血統である爲に字を周村と號し、通稱は衛司、愛雪、梅九、天水、成堂等の別號もある。巨匠谷文晁の門に學び妙手となり、彦根侯の畫員となつたが、明治七年十二月年七十二歳で病歿した。嗣子に永湖があり、又其門に佐竹永郎等が出て何れも一家をなしてゐる。

故佐竹永湖

サタケエイコ(畫)

天保十六年十二月因幡國鳥取を生れ、初め畫を沖一峨に學び、又狩野、土佐、及び圓山の諸派を研究した。後佐竹永海の養子となり、専ら元明以下の畫法を習ひ、京阪及び諸國を歴遊して寫生をな

福島縣會津若松の出身で有名なる東京の書家。名は恒字は子象、得所は其號で別に松城とも號した。通稱は八太夫と言ひ幼少より書を嗜み諸家の手を習ひ、後長崎に赴き清客錢少虎、江元驥等と筆法を論じ遂に清國に航して遍く彼の地の諸大家に接して教を受け、研鑽二年の後歸朝して東京に寓し、其名日に顯れ門に入る者甚だ多い。其書修齋廉節の四大字を書して天覽の光榮を有し、描金梅花筆一、畫金龍墨雨筍を賜はつた。これよりその居所を梅龍書屋と稱し、宴を隅田河畔の一樓に張つて大に賓客を會し、御賜を拜觀し、席上驚龍の二字を作つた。其字の大さ方一丈有餘潑墨淋漓觀者大に感嘆した。龍の大字に點する時身を躍らして筆を投じ見事に一點を作して滿座の喝采を得たと言はれてゐる。氏は書に於て學ばぬところ無いが中にも歐陽率趙松雪を悦んだ。門下數千縑素摺帖室に滿ち、其間に在つて朝夕筆を停めず腕遂に痺れるに至つたと言はれてゐる。明治十一年一月二日病んで歿した。年五十七。書家佐瀬醉梅は

し、明治八年、下總松戸御嶽神社に奉額し、十二年及び十四年、獨逸皇孫及び布哇皇帝の來遊の時濱離宮に召されて大作をなした。その得意とする處は文晁派の山水人物であつて定評あるものである。四十二年七月年七十五歳で病歿した。養嗣子に佐竹永陵があり、門下に田村豪湖、岡田蘇水等がある。

佐竹永陵

サタケエイリョウ(畫)

名は銀十郎、黒田家に生れ佐竹家を襲いで其の姓を冒した。明治五年五月五日東京江戸町淺草區、夙に養父永湖に就いて南北合派を究め其の傳統を受けた。第六回文部省美術展觀會に夏秋山水を第九回に水墨山水の圖を出品して共に三等賞を得、其他明治二十一年以降諸種の展覽會及び博覽會に出品して銀銅牌、褒状等を得たることに實に枚擧に遑ない。又御前揮毫の恩命を受けたことも前後數回に及んだ。帝國繪畫の會員で、日本美術協會日本畫會、其他各種の幹事及び審査員である。氏

はまた漢詩に長じて、吟詠少く無い。

次天台先生自壽韻

忠誠溢、面氣逾新、 說義明、仁六十春、

子弟三千皆足用、 維持名教在斯人、

詠史

夜深風雨暗、行營、 十字詩題一樹櫻、

春色依然千載下、 此花此土共芳名、

落花風雨暗、行營、 人是忠臣樹是櫻、

此樹遭題詩十字、 與人千載有芳名、

現住所 東京市日本橋區矢ノ倉町四

故五月庵斗麥

サツキアントバク(俳)

斗麥は岡山市東中島町伊勢庄兵衛の子、寛政十年に生れた。俳句を花月堂雪貞に學び遂に一家を成した。又俳畫に長じた。平生赤貧洗ふがやうでも意に介しない。擔荷を肩にして至る處得意の妙句を吐いた。五月幟に繪畫を揮寫した謝禮として麥一斗を贈られたのに因つて斗麥と號したのも面白い。後年家を女婿に托して俳身軽く東海に嘯き

南海を渡り京都に山陰に優遊すること多年、明治十六年十一月十三日八十六歳の高齡を以て家に歿した。

佐藤 清

サトウキヨシ(詩)

明治十八年一月仙台市樋町に生れ、仙台第二中學校及第二高等學校を経て東京帝國大學文科大學を卒業し、大正六年より八年まで英國に留學して英文學の研究に従つた。その英文學といふ中でも特に氏の力を入れたのは愛蘭文學である。愛蘭文學は語にわかりにくいのがあるだけでも、その研究は容易でないとはいはれてゐて松村みね子女史の「いたづらもの」などについては特にその點から賞讃を得たものである。歸朝に氏は神戸に居つて

大正十二年東京女子高等師範學校教授となつた。氏の著書としては研究の結果を發表したものに「愛蘭文學研究」があり、翻譯に「ジャンソン傳」「モリスの藝術論」、詩集に「西灘より」「愛と音

樂」等がある。この外「表現」や「詩聖」等に詩及び詩に關する評論等を發表して居つて、一面に於ては詩人評論家であると同時に、他面に於てはまた熱心なそして深い愛蘭文學の研究紹介者である。「現代詩集」に出てゐる「血と光の水平線」などは全篇四百より成る長篇であつて、祭司長が神殿の盜まれた「葡萄鳳凰結婚の像ある鏡」を見出す爲め遠く漂洋の旅に出ることを述べたもので長い叙事詩である。

血と光の水平線

(前略)

海は生きものとなり、なめらかな
うろこの上を舟すべる。
海の吐息に我が足はふるひ、
溜息にからだ跳ねかへり、
から咳にけし飛ばされて
進むにつれ、海蒸しあつく、
靄立ちこめ、晴れ、日は照り、
のたうちまはる狂氣の刹那、

つかみかかる紫の失神、
一撃に官能の世界を破り、
緋色の睡眠より濃く、
深紅の死より淡き世界を現出す。――
過ぎ行く者はとどまり、とどまる者は
しぶきを彩どる虹のごとく
消え去り、色彩はあやなく
無象の音は凝りてそばたち、
雲かかりて、曇りなき世界現出す。

(後略)

現住所 東京市外大久保百人町二七三

故佐藤 硯湖

サトウケンコ(書)

有名な篆刻家であつて、名は誠字は思誠、別に尙句齋、彫蟲居等の號がある。通稱は實吉、越前福井の人である。氏は幼より學を好み、漢學を高野眞齋に學び、和歌を福井の名歌人橋曙覽に學び後詩を大沼枕山・廣瀬青村に、歌を井上文雄に習つた。また篆彫を羽倉可亭に學び、尤も其技に長じ

た。初め藩に仕へて祿筆となり、後江戸に出て明治元年行政官書記となり、翌年太政官主記に任じ七年大主記に進み、十年二等屬となり、十二年宮内省出仕に補せられ二十年非職となつた。氏は常に人に向つて「書道を研修するには金石に如かない。支那には已に金石家があつて著書も亦種々ある。我國古代の書蹟は只好書家の榻本として所藏してゐるのみであるが之を廣く蒐集して版行したらば支那と比べて日本書風の發達も思ひ知られる」と言つてこれから材料を蒐集し、年六十で病歿した。著書に「日本金石集」「聖賢幽譜」「金石拓本雜」「彫蟲居手稿」「金石年表」等がある。

佐藤 紅綠

サトウコウロク(小)

名は治六、明治七年七月六日青森縣弘前市親方町に生れた。弘前中學校を四年で退學し、後法學院に學び爾來獨學自習今日の地位を克ち獲た。曾て萬朝報記者となつた事があるが、後劇介界に全力を注いでメロドラマ(華樂劇)の作家として知られ

後に新日本座といふ一劇團を組織して巡業したこともある。他の小説であつて氏の脚色によつて上演されたものも随分多い。「不如歸」などもその一つであるさうな。又子規門下の俳人として名をあげ、自然主義勃興當時藝術的創作に筆を染め、「鳩の家」「虎公」等の通俗小説を書いたが可なりの人氣を呼んだ作である。著書には右の外「俳句小使」「紅緑子」「三聖句選」「何處まで」「大盜傳」「春の海」等の外に脚本及び小説の作が澤山ある。

あり佗ぶる役なきものや煤拂ひ

病は氣から鯁などたと召さるべし

現住所 東京市外西巢鴨堀ノ内一三三

佐藤紫煙

サトウジエン(畫)

氏は巖手縣一關町の人、明治七年十一月十六日に生れた。幼時より繪畫を好み、夙に南畫の泰斗瀧和亭に就いて花鳥を學び、又大家衣笠豪に山水畫の描法を受け、青年にして既に大家の列に入つ

た。明治二十九年十一月明治天皇の日本美術協會へ行幸の際御前揮毫を仰せ付けられたるを初として大正八年今上陛下に献上の揮毫を仰付けられ賜調の上酒肴料を頂戴したる時まで凡二十回の御前揮毫といふ光榮を荷ひ、「牡丹雙鶴圖」、「水墨竹鶴圖」、「牡丹蝶圖」、「孔雀圖」、「清風高節圖」、「櫻花圖」、「手鞠花雙鶏圖」、「牡丹圖」、「四君子圖」、「芙蓉圖」、「蘭圖」、「群雁圖」、「竹亭幽居圖」、「雉子圖」、「松陰高士圖」、「觀瀑圖」、「梧竹高隱圖」、「雙鶏圖」、「軍鶏圖」等の名畫は夫々宮内省、農商務省獨逸伯林博物館、皇后宮職御用品、東宮職御用品英國コンノート殿下御用品等になつた。また米國聖路易市萬國大博覽會其他内地の大博覽會展覽會共進會等に出品して褒賞を得たることに實に枚舉に遑が無い。中でも三十一年美術研究會に出品の「兩中圖」は優等賞、三十年京都府全國繪畫共進會に出品の「秋蘭圖」及大正二年大正紀念產業博覽會に出品の「黃蜀圖」は一等賞、三十七年米國セントルイス市萬國大博覽會に「孔雀圖」四十一

年東海繪畫共進會に「櫻花圖」大正二年北陸全國繪畫展覽會に「菲及蘭」同五年日本美術協會に「孔雀圖」同十年同會に「孔雀長春圖」を出品して各銀牌を得、大正二年大正紀念產業博覽會に出品の「雙鶏圖」は名譽の金牌を得た。この外銅賞等を挙げれば數知れぬ程に達する。また氏は美術團體委員等に推薦せられたことが多く日本畫會委員、東京南畫會委員、日本美術協會委員同審査委員同鑑査委員明治繪畫展覽會審査委員、日本畫會展覽會審査委員、日本美術協會理事等を囑せられ、松林桂月、小室翠雲等と共に現今我が南畫界に於ける重鎮である。殊に瀧和亭の衣鉢を傳へしものとして氏は措いて人無き今日、氏は和亭鑑定者としても重んぜられてゐる。

現住所 東京下谷區中清水町一五

佐藤惣之助

サトウソウノスケ(詩)

明治二十三年十二月三日神奈川縣川崎町砂子一七五に生れ、郷里の小學校を卒業して寺院に入り、

三年の間小僧生活をやつた。尚多くの學校を出入して學生生活を七年間やつたが、一校に於て落付いて纏つた修學をしなかつた。佐藤紅緑について俳句や劇作の指導をうけ、俳名を大魚と言つて盛に句作三昧をやつた。著作には詩集「正義の兜」「狂へる歌」「滿月の川」「深紅の人」「荒野の娘」「華やかな散歩」「季節の馬車」「琉球諸島風物詩集」創作集「市井鬼」詩集「嵐」等を出してゐる。「季節の馬車」は自在奔放字に飛躍する獨特の作篇を收めてゐるし、散文詩「市井鬼」は、ある田舎町の最下層の物語を傍題し尙ほ之に非小説的なる短篇少々と註まで加へた詩人同氏の散文集であつて、市井鬼外十五篇を收めてゐる。詩人らしい柔らかい物の見方が懐かしい。しかし何と言つても琉球雜詠は異彩のあるもので、氏がいよ／＼多彩的で豊富な感覺詩として詩壇の中心的產物とされたほどである。「琉球諸島風物詩集」は氏が南島吟遊の一大收穫であつて、琉球島瞰圖、那覇調、白鳥處女説話、雲への賦、八重山情詞等

の外九十章あるが、萬葉調の琉球歌と印度波斯聖歌の面影ある八重山神歌の新譜調をとり入れて、舊琉球王國の都に、海港に、三十六の島々に、民謡と傳説の古い女王と乙女等との中に新らしい東洋色を發見し、女護ヶ島、骸骨島の昔噺を眼のあたりに見て航海した新麗無比の感情詩である。日本詩壇はこの書によつて滔々たる西洋藝術感情模倣時代を去つて、新らしい東洋古代藝術復古の韻律的な豪華と絢爛との眞髓に觸れなければやまぬ一つの問題詩集である。紀行の情趣以外方言や琉球歌の豊かに織り交ぜてあるなど民謡研究の好い参考書となり得る。

華胥圖

南風大篷や庭にはためき

こがね日の燈屋上の赤虎を射りぬ

今日や又幽室を掃ききよめ

口より赤き魂の花吐きていざ眠りを愛さん

美なる冊封船にのりて魂よ唐土に遊ば

眠りは夾竹桃と瑠璃鳥のすめる

すとし神仙のみどり木陰なれば
より靜まれる詩韻への航海なれば
ちるよ月橋の空氣なす香を焚き
我身や縷々たる香の煙柱にのりて
眞夏白雲と煙りはひ
眞畫羅星圖とはいならび
赤き佛桑花に咲き射られ
塵の如くに眠らんかな
現住所 神奈川縣川崎町砂子一七五

佐藤朝山

サトウチヨウザン(彫)

名は清次。明治二十年福島縣に生れ、彫刻家山崎朝雲に就いて木彫を學び、再興したる美術院の第一回展覽會に「野人」「呪咀」の傑作を出して直ちに同人に推され、第二回に「シヤクンタラ姫」「アグニ」「タシヤムダ王」等を出して好評を博した。美術院同人中未來ある彫刻家である。嘗て十和田湖附近に滞在して大作をした事もある。現住所 東京府下荏原郡馬込村字根古谷

佐藤俊子

(田村俊子) サトウトシコ(小)

明治十七年四月東京淺草に生れ、第一高等女學校を卒業して後女子大學校に入つたが病氣で半途退學した。その後幸田露伴の門に入つて創作の研究をなし、露英の號を與へられた、三十六年處女作「露分衣」を「文藝俱樂部」に出して好評を博した、三十九年頃より藝術に對する疑問を懷き、斷然筆を斷擲つて女優に志し、岡本綺堂、岡鬼太郎杉實阿彌一派の文士劇に加つて市川華紅と號した。四十一年又劇壇を退いた。この年米國より歸朝の田村松魚氏と結婚し再び新文壇に現はれた。四十二年「大阪朝日新聞」の懸賞に應じた「あきらめ」の一篇が一等に當選して懸賞金一千圓を得た。それより短篇集「誓言」「戀むすめ」「木乃伊の口紅」「小さん金五郎」「お七吉三」「山吹の花」「彼女の生活」等の作を公にしてその官能的な描寫と豐艶の文章鋭敏な觀察とを以て閨秀作家中第一人者の評を得、文壇の花形として大に活躍し

た。大正七年故あつて合議の上夫松魚氏に離縁し十月十一日メキシコ丸に搭乘して渡米の途に就き新生涯に這入る事になつた。岡田八千代女史との論争が讀賣紙上に表はれたのによつて想像するのに渡米前の俊子女史は生活の壓迫に苦しんでゐたらしい。
現住所 在外

故佐藤梅園

サトウバイエン(書)

氏は中村春堂氏と同じく小野鷲堂の書風を研究して一家をなしたる和様の書家であつて、東京に門戸を張つて子弟を導いたが、毎年行はれる大會を見ても随分多數の門人があつた。中でも婦人が大部分をしめてゐた。氏の盡力により、美術館期成同盟會成り、委員長正木氏により田口米舫、佐藤梅園、諸井春畦、近藤雪竹、柳田泰麓諸氏を委員に擧げ全國書道大會を開き文展請願の聲援をなさうとしたのに大正十一年病歿したのは惜しいことである。「男子三體書翰」其の他の著書もあり

常に新聞にその意見や注意等を發表して世を益するところが多かつた。或人氏を評して十年一日新聞を利用したとあるのは少し皮肉であらう。

草花

秋ふかくしげれる庭の草見ればおこたりに咲く草もありけり

歳暮雪

老の身のかしらにのみおもひしにとしのはてに
もつもるゆきかな

佐藤春夫

サトウハルオ(小)

明治二十五年四月和歌山縣新宮町に生れ、慶應義塾大學文科大學に學んで半途退學した。小説詩歌戯曲翻譯行くとして可ならざるなき天才を有してゐる。大正七年春頃から新進小説家として認められ其方面に於ても大に活し、又後期印象派の畫家として二科會に作品を發表したこともある。著書長篇小説「田園の憂鬱」短篇集「病める薔薇」「お絹とその兄弟」「佐藤春夫選集」「幻燈」詩集

「殉情詩集」隨筆感想「藝術家の喜び」「南方紀行等を出した。尙最近の作には「卓の上にあつたもの」「都會の憂鬱」「續その日暮しをする人」「空しく嘆く」「後の日に」「日光異聞」「魔もの」「紫陽花」「剪られた花」「春をくれる娘」「墓端の家」「百花村物語」「没落の曲」等の小説を矢つぎばやに出して、氏の藝術の泉の滾々として盡きないのを示してゐる。「田園の憂鬱」はかつて雑誌「中外」に於て評論界創作界の驍將たる生田長江氏が之を徳川時代の傑作鴨長明の「方丈記」に比較して論評し、夥しい讚辭を惜しまなかつたもので、氏をして文壇に抜くべからざるものを作つた。幽靈のやうにうらさびしい主人公の心に沁み入り、それが讀者の心にも喰ひ込んで見逃すことの出来ぬ枯淡な情味を捉へ、綾羅の夢を織り込んだ手際は氏の特色を十分見ることが出来る。最新刊の「佗しすぎる」は「佗しすぎる」を中心として之に二三の小篇を採録したもので、本書は氏が戀愛に對する全的情操を遺憾なく語るものであるし。

暮春挿話は近作を集めたものである。又「玉簪花」は「何故に女を殺したか」「百花村物語」「花と風」「緑衣の少女」「碧色の菊」「没落の曲」「友情」「仙道」「孟沂の話」「戀するものゝ道」等支那の物語十篇を「今古奇觀」「聊齋志異」等より譯出したもので、其の材そのこと頗る荒唐無稽ではあるが藝術的香の甚だ高いものである。天下の放浪者を以て任じてゐる氏は、殆んど任所を定めず雲水のやうな浪々生活をなしてゐるのが常であるが、今は暫く宿所に落ちついて創作に従つてゐるさうである。

現住所 東京市四谷區西信濃町二佐藤秋雄方

故佐藤牧山

サトウボクザン(漢)

名は楚材、字は晋用、又一に晋明とも言ひ、雪齋と號し有名な儒者である。尾張中島郡山崎村の人昌平鬢に入つて二十五歳の時こゝを卒業し、寺門靜軒の經營してゐた江戸駒込の漢學塾を繼いで教授した。後尾張侯に召されて儒官に列し、物頭格

に進み、藩の弘道館及明倫堂に教授した。維新の後東京に出で、斯文學會の講師となり頗る聲名あつたが、明治二十四年二月二十四日九十一歳の高齡を以て病歿した。著書に「清朝史略」「中庸講義」「牧山樓文集」「牧山樓詩集」「日本政記註」「周易叢說」「二十二史鈔」等がある。

唐人早朝圖

御柳煙迷紫禁春、

幾行劍履趁清晨、

佩環聲遞花間響、

中有能詩賈舍人、

送田宮繼武

妙技弓刀修得歸、

一枝鞭影疾如飛、

桃花紅雨梨花雪、

二月春寒上客衣、

秋步述所見

衣上殘陽影未收、

近人絡緯響啾啾、

胡枝花紫蘆花白、

織出人間小錦秋、

佐藤綠葉

サトウリョクヨウ(小)

名は利吉、明治十九年七月群馬縣吾妻郡東村に生れ、早稻田大學英文科を卒業して萬朝報記者とな

り、傍ら創作に従事してゐる。短篇集「塑像」長篇「黎明」翻譯「生ける屍」「人間屠殺所」等の著譯を出してゐる。

現住所 東京市牛込區原町三ノ二五

佐藤六石

サトウロクセキ(詩)

氏は越後の人、名は寛、現代に於ける一流の詩人である。大正六年土居香國氏の後を承けて隨鷗吟社の牛耳を取り、其作は「隨鷗集」「大正詩文」「風雅報」等に發表してゐる。故高野竹隱嘗つて六石の詩を非難し措かなかつた時、六石之を反駁して遂に竹隱をして再び起つ能はざるに至らしめたので竹隱は憤死したとさへ傳へられた。

康成九月二十九日奉讀合邦大詔恭

賦七律六首(節四)

瓊矛餘滴碧涵天、一葦能航不借船、
來去蜻洲連鰈域、交通馬島接熊川、
經營苦記出雲史、吟詠高推牽國篇、
瞻仰東方宗主國、日星炳耀億斯年、

日自西昇水逆流、背盟幾擬害皇猷、
海潮沒陸神功代、草木皆兵文祿秋、
師在膺懲偏鎮遠、政因仁愛只懷柔、
即今併合恩威遍、八道將同大八洲、
大詔明々神昭、李王感激奉皇朝、
青邱曾設統監府、丹闕新開宗秩寮、
功定山河何說禹、恩霑艸木豈云堯、
須知無姓眞天子、一系終成萬世標、
扶掖王家鎮國都、十三道上始無虞、
囚人感泣除刑罰、窮巷謳歌免賦租、
班自東西擢華族、論從老少出鴻儒、
天恩將及前賢墓、五百年來萬骨蘇、
賦得海邊松、
盤根白沙上、偃蓋綠波中、掩映芙蓉雪、
縈廻浦淑風、高枝擎大旭、孤鶴唳長空、
葉密防樵斧、陰深護釣篷、秦嬴封已避、
丁固夢曾通、子結三千載、孫生十八公、
貞心終不改、勁節永相同、晨浴東瀛水、
蒼髯一老翁、

里見 淳

サトミトン(小)

本名は山内英夫、有嶋武郎有嶋生馬の弟。明治二十一年七月十四日横濱市月岡町に生れた。學習院高等科を経て東大英文科に這入つたが半途で退學した。白樺の同人であるが寫實的客觀的の傾向に一異彩を放ち殊に内面描寫の緻密を以て稱せられてゐる。「善心悪心」「三人の弟子」「恐ろしき結婚」「不幸な偶然」「我」「慾」「幸福な人」「桐畑」「潮風」「彼と小娘」「勝負」「銀二郎の片腕」「赤き机によりて」等の外「甘酒」「おせつかい」「紙刀」「直輔の夢」「文藝管見」「白醉亭漫記」等の作がある心理描寫の特技を有してゐる點では作家中の白眉と推されてゐる。隨筆「白醉亭漫記」や「春めいた日の出来ごと」「瑠璃子の鞭」などのやうな短いものにしても、何ものかを讀者の胸につきつけたいでは置かぬ。「おせつかい」などにしててもかれこれ非難してゐる手合もあつたが、矢張りうまさは水際立つてゐる。極めて切りつめた語

彙で、どうしても他に變へやうのない適確な表現をする點では氏は確かに極め付きになつて居る。改造所載の「文藝の職業化について」も考へさせられる文であつた。

現住所 神奈川縣鎌倉大町藏屋敷七〇三

眞田久吉

サナダヒサキチ(畫)

明治十七年十一月東京本郷に生れ、初め白馬會溜池研究所に入つて學び、後東京美術學校に入學して、四十二年西洋畫科を卒業した。大正元年齋藤與里高村光太郎とフューザン會を起し、第一回に「ダリヤの花」外四點第二回に又數點を出し、大正五年、台灣を巡遊し歸つて、又木亨三と共に個人展覽會を開き、同年、齋藤與里、萬鐵五郎等と日本美術家協會を起して爾後毎回異色ある作を出品してゐる。

現住所 東京府下下落合村三百六十三

佐野袈裟美

サノケサミ(評)

明治十九年二月二十日長野縣松代町東荒町に生れ同四十五年早稲田大學英文科を卒業し、「新生活の創始」「社會改造の諸問題」「猛火」「夏の夜」等の著がある。

現住所 東京市小石川區宮下町六九

寒川鼠骨

サムカワソコツ(俳)

本名は陽光、明治九年十一月伊豫松山市に生れ、大阪朝日新聞、日本新聞、電報新聞の記者を経て「日本及日本人」の記者となつて今日に及んでゐる。其の句は嘗て「日本」に投稿され「新俳句」「明治大正句集」等の俳書中に多く蒐録されてゐる外、氏の著書は三十餘種の多數に上つてゐる。

花吹雪護摩壇に亂れけり。

鮮桶に小魚より來る流かな。

鶯や貧乏寺の朝の鉦。

孤子の魂祭るとて花を刈る

石垣や露の蓋ふく安土城。

朝寒の空に風ある銀杏かな。

現住所 東京市下谷區上根岸八二

澤木 梢

サワキコズエ(評)

本名四方吉、明治十九年十二月秋田縣船川町に生れ明治四十二年慶應義塾文學科を卒業し、同年同大學の教授となり大正元年より歐洲に留學し獨逸及其他の諸國に學んで大正五年歸朝した。現に慶應義塾大學教授の外東京帝國大學文科大學講師をし傍論評の筆を執つてゐる。「エニユス・ド・ミロの謎」「美術の都」等の著がある。

現住所 東京芝區三田慶應大學氣付

澤村胡夷

サワムラコイ(詩)

名は專太郎、近江國に生れ、常に好んで湖の美を歌つたが今は京大助教となつて美術の研究に没頭してゐる。京大に這入る前は國華社にあつてアヂヤンタ石窟寺に行つたあともある。京大文科出身。

現住所 京都市北白川久保田町五三

澤

ゆ き さ サワユキ(詩)

明治二十七年八月、茨城縣稻敷郡葦崎村牛久沼村に生れ「失意の生活に泣きながら、悲しく暗く無邪氣に生きてゐる經歷はそれだけである」と自ら言うて居るやうに、學歴としては別段取り立てゝ言ふほどのものは無いが、日本詩人等に發表せる「こぎくだる春の沼」其他の作を見るに女史は確かに閨秀作家中稀に見る詩的天分の持ち主ではあるまいかと思はれる。米澤順子、高安やす子、中原綾子等と相並んで現代女流詩人として聞えてゐる。

夜ざり

若々しい囚女連が

そよかぜのやうに手を投げて

私をとりかこむ。

その牢獄のなかにみる如き

なよびやかな影法師は

現住所 東京市

澤村胡夷

サワムラコイ(詩)

おかされた心の悲愁と戦慄を
強い處にまでも……

私は眼力を失つた悲しみに疲れはてて
つらい瞑目の中をふみわける――
眞蒼なキツスを待つ姿を
いたましい星と星とが見守る時に。

思へばくふびんな彼女ら嘶は
私をだかへやうとする第一の聲であつた。
醜惡な雑言のどよめきは
いやが上にもさへなければならぬ心の衰音
をばしぼる。

あんまり心もとない慰めにさへかねた心で
またしくく泣くことを避けやうとすれば
吾から埋つたふか穴に渦巻く光のゆらめきに
肉もよるべなくおどんでゆく。

現住所 東京市

現住所 東京市

山宮 允

サンクウマコト(詩)

明治二十三年四月山形縣山形市新築に生れ、鶴岡中學及び第一高等學校を経て、東京帝國大學文科大學に入つて英文科を卒業し、文部省囑托となつてあつたが今は岡山の第六高等學校教授となつてゐる。イエーツの「善惡の觀念」の翻譯、「現代英詩鈔」「ブレイク選集」等の著の外、評論「愛蘭の諸詩人」感想「詞苑雜話」詩數篇の作を「早稻田文學」「鈴蘭」「詩と音樂」等に發表してゐる。

我が國に於て英詩は古くから讀まれて來たが現代の詩はあまり知られてゐない。氏は多年苦心蒐集して「現代英詩選集」を編纂して斯界に便を與へた。氏はこの書に於て六十三詩人を「ブリッジス其他の英國詩人」「イエーツ其他の愛蘭詩人」「米國詩人」「イマジスト」「東洋詩人」「キユーピスト及後期印象派詩人」の七篇に分つて、郷土的なるものは地方別に又詩派的色彩の濃厚なるものは

夫々其の詩派に屬せしめ、各原著者の略傳をもつて鑑賞に便ならしめてゐる。

泉

薫はしい森のなかなら
滾々と湧き出る泉、
若さに輝き、力に充ち、
今花やかな曙を
沸騰り溢れるその美しさ。

その泉、爽かな響を

淡紅色の朝の空に顛はせつつ
歡喜に不安の岩を征服へ

愛に流通の道を拓き
踏み、流れる光に、勝利に。

踏み進め若さの泉、力の泉、

ただため汝が生命を、歡喜を、愛を——
愛と歡喜は勝利と光に導く。
おお、薫はしい森のなかなら

今滾々と湧き出づる泉。

現住所 岡山市内山下石山一〇

故三條西季知

サンジヨウニシスエトモ(歌)

正親町三條實繼の子、幼より國學を好み和歌を能くして其才學は友人の推服するところであつた。夙に皇室の衰頹を憂へて幕府の專横を憤つた。幕府の末に天下事多く物論喧しかつた。氏は三條實美等と共に尊王攘夷の論を樹て、畫策するところがあつた。これがために幕府の忌むところとなつて參朝を停止せられた。そこで實美等七卿と難を避けて西に走り、太宰府に居ること五年の久しきに涉つた。慶應の末京師に還り歌道を以て天皇に侍し寵遇を辱うした。後麿香問祇候となり正二位勳二等に叙せられ明治二十三年八月二十四日薨じた。

梓弓矢よりもはやくゆくものは湯氣を力のくるまなりけり
曇りなきみ代のしるしは多かれど先づ仰がるゝ

シの部

椎塚蕉華

シヅカシヨウカ(畫)

名は春子。明治十七年二月東京に生れ、歌川派の浮世繪師、水野年方、及び村田丹陵に學び、屢々展覽會で受賞した。文展へは第一回に「卯の花頃」第二回に「待つ宵」第三回に「星まつり」を出した。夫なる洋畫家椎塚修房の歿後舊師の未亡人水野秀方と共に浮世を餘所なる詩的生活を送つてゐるさうである。

現住所 東京市下谷區谷中天王寺町三六

志賀重昂

シガジユウコウ(文)

氏は三州の人、矢作川の名にとつて矧川と號す。

舊岡崎藩士志賀倅堂翁の男であつて、文久三年十一月額田郡岡崎町に生れた。性偶儻不羈大志を有し、曾て札幌農學校を卒業して農學士の稱號を得、爾來長らくの間地方に教鞭を執つた。後上京して「日本」「日本人」等に執筆して國粹保存を鼓吹し、矧川の名江湖に籍甚した。氏は又著述を事とし、餘暇日本中學校に講師となり、次いで進歩黨の一部將として憲政黨組織に盡力するところが尠くなかつた。三十一年六月憲政黨内閣成るに方つて擢んでられて農商務省山林局長となり正五位に叙せられ、幾もなく之を辭して憲政本黨の常議員に擧げられ、又中國民報主筆に聘せられ、三十三年本黨を脱して立憲政友會に加入した。著書に「南洋時事」「英文歴史及論文」「日本風景論」「地理學議義」「川及湖」「歐米山川圖說」等がある。中でも「日本風景論」は、滅多に他人の文章を譽めぬ高山樗牛博士をして激賞せしめたほどのものである。乾燥無味の説明的叙述的地理書のみあつた當時、あの本は確に趣味的の良著であつたに相違な

い。この書物が多く讀まれたので伊藤銀月は「續日本風景論」といふのを書いた。「世界山水圖說」は眞面目に歐米の事情を調べようとするものにとつて誠によい手引となる。これは幣原文學博士の歐米小觀及び黑板文學博士の「歐米文明記」と併せ見れば大變參考となる。尙氏は文の人であると同時に舌の人である。頭の人である。何萬圓かの金を大研究をするためにこの著をなすといふやうなことが書いてある。世の人が氏を目して地理的政治家と言ふのもこの點からであらう。井上圓了博士と同じやうに席暖なるに暇なきほど年中旅行してゐる氏の行く處必ず詩あり歌ありで、氏の旅行視察はいつも趣味と實益とを併せ得てゐる。

題三 五串瀧崖樹

一水從西來、衝巖爲飛瀑、撞石爲壘湍、或橫迴或直瀉、時作渦時作輪、而巖皆怪詭皆奇峭、極自然之變幻、倚巖旁石臨望飛沫、白道衣袂悉濡、乃就溪上高榭、亭長進所採出、當歸土香撲鼻、仍酌麥酒大碗、

連飲快不可謂

高崎山占領次韵

滿眼風塵尙未收、按圖土窟爛双眸、

知君得意應非遠、鼓角聲沈旅順秋、

現住所東京市外代々木四七六

志賀直哉

シガナホヤ(小)

明治十六年二月二十日宮城縣白石に生れ、學習院卒業後東京帝國大學文科大學に入つたが思ふところあつて中途で退學し、爾來創作に従事しクープリンと同じく動物狂で知られてゐる。氏は病的神經描寫をもつて、無類の技を稱せられ、白樺派中でも最も俊秀の作家として注目されてゐる。久しく筆を絶つて居たが「和解」「佐々木の場合」「暗夜行路」等を公にして益々天才の鮮やかさを現してゐる。

氏は多く短篇に筆を染めて、右の外「留女」「夜の光」「荒絹」「あはれな男」「斷片」「大津順吉」「壽々」「或る朝」等を出してゐたが「暗夜行路」

於て始めて長篇に筆を染めるに至つた。これには祖父と母との不倫な關係に生れた主人公謙作の暗い運命と惱ましい人生とを描出してゐる。その描寫技巧の繊細に感心せぬものは少いやうである。或る批評家はこの溫藉明快で相當含蓄のあるこの文章を激賞して百代の龜鑑とするに足ると言うてゐる。この作は實に誰かの言うたやうに、一個の若い人間の魂のよくならうとして苦闘する姿である。こしらへものでない。血の通つてゐる人間の生活である。ある體驗ある雰圍氣を傳へるために事件や會話や情景を自由に選んで、そしてしかも全體を通じては自分の體驗を率直に語る以外に何のヤマもなく、またムダも無い緊縮しきつた表現形式を用ゐてゐるところに學ばねばならぬところが少く無い。この表現形式は藝術の創作の方面に啓示を齎らしてくれたことは否むべくも無い。日本流の自然主義にも、新技巧主義にもロマンチックな情緒主義にもしたしみを持てない人々に、あんな新らしい轉機を暗示してゐる。

現住所 京都府宇治郡山科村竹鼻字立原二六

鹿間松濤樓

シカマシヨウトウロウ(俳)

名は千代治、明治十三年十二月九日香川縣丸龜市土居に生れ、氏は少時より俳句と共に碁に熱中したので俳境を妨げしことは一通りで無かつた。碁に於ては四十五年初段、大正二年二段、同六年三段に進んだ。赤木格堂氏の洋行に際して中國民報俳句選者となつたが、圍碁の入段によつて上京することになり、「愛媛新報」、「讃岐日々」の諸新聞と共にその選者を辭した。大正三年讃岐日々新聞主筆となり且つ其の社主ともなつたが、間もなくこれを辭して圍碁骨董等に遊んでゐる。氏は初め月並の俳句を作り、尾花と號して、寐覺庵露城宗匠に師事し、後子規言行録に感激して日本派に入り、丸龜市に漣吟社を起し、次に枰傍吟社を設けた。中國民報投句家中より海紅派の中塚一碧樓が出てゐる。氏は「日本新聞」「國民新聞」「ホトトギス」「懸葵」「俳星」「寶船」「糸瓜」等に投

三九八

句したが、「續春夏秋冬」「新春夏秋冬」「日本俳句抄」「一萬集」等に掲載されてゐる。餘技としては最も畫をよくする。

凧の撞木にすがる小僧かな。

綿帽子御室の雪をうしろにす。

山茶花の散るや利久が沓の上。

現住所 東京市小石川區原町一六

故重野安繹

シゲノヤスツグ(漢)

字は子徳、成齋と號し、通稱は厚之丞と言つて薩摩の藩士太兵衛の子である。文政十年十月に生れて幼いとき造士館に學んだが儕輩に抜きんで居た。後江戸に遊學して昌平黌に入り頗る才名あつて詩文掛となり、又拔擢されてその舎長となつた。當時昌平黌は各藩より選抜の俊才が集つてゐたが、氏は此間に在つて嶄然頭角を現はした。初め程朱學を修めたが此の黌に入つてからは古學を主とし力を考證に入れた。文章も亦秀でて當時の大家と應酬し名聲天下に籍甚たるものがあつた。

此の時氏は校中に於て學問、詩、文、書、碁、鼓風采に於て七絶の稱があつた。歸藩の後藩主島津齊彬の選擢に因て造士館教授となつたが同儕の猜みによつて大島に流されたが、後赦されて文久三年歸藩した。是年六月英國軍艦七隻鹿兒島灣に入つて事件について強硬なる交渉をなしたが要領を得ないで開戦した。後安繹は此談判委員を命ぜられて折衝其の宜しきを得て無事に其局を結ぶ事が出来た。其の後職を造士館に奉じ又藩命に因て修史の事を掌つたが其の名を慕つて入門する者甚だ多い此際西郷、大久保、諸卿から諮問を受けて國事に奔走した。明治維新の後文部省に入り、後太政官中議生に轉じ、八年修史局副長となり、十年一等編修官に任ぜられ、修史の職に當つてから専ら大日本編年史の編纂に従事し、古文書採訪の事を建議して採用せられたので各編修官と各地に分行して材料を蒐集し、史卷九十五冊を成した。然し意見の不一致のために二十六年四月修史の職を辭した。氏の意見では其考據の現存しないものは

數百年傳來の史跡でも之を採らない。それで兒島高德や楠正成父子袂別の傳説の如きは排斥して顧みないので世人の非難をうけた。それで遂に氏抹殺博士號するに至つた。又僧日蓮の龍の口遭難を議して法華僧の激怒を招き、決闘状を送られたことさへある。後元老院議員となつて文科大學教授を兼ね、國史科を大學に置き、史學會を設けて史學の研究を發表したものである其會長となつた。又野史亭の邸内に置いて同志と編纂に従事し國史綜覽十冊を上梓した。此は神代の部で大日本史の缺を補つたものである。二十一年文學博士を授けられ、二十三年貴族院議員となつた。四十年塙國維也納に於て萬國學士院聯合總會のあつたとき八十一歳の老軀を以て參會した。四十二年秋病に罹り翌年十二月六日薨じた。その薨するに先だつて従三位勳二等に叙せられた。享年八十四氏は人と爲り頗る溫和で辭令に習ひ、人に接するとき毫も城府を設けない。又た時務に處するの才もあつて少しも腐儒の態が無い。

三九九

静間 密 シズマミツ(詩)

氏は岩國藩士で仁田源吾氏の三男である。安政二年二月十一日に生れ、後出で、静間家を繼いだ。氏名は密、五龍と號し、武奇陽、花癖等の別號がある。夙に英數漢學を修め、明治九年奈良師範學校卒業後奈良大阪地方に教鞭を執り自らも大に研究工夫するところがあつた。氏はまた狂句狂詩が巧で「團々珍聞」「驥尾園子」「我樂多珍報」「惚珍誌」「自惚双紙」其他の諸雜誌に寄稿し、狂歌家をもつて關西に鳴つた。又薔薇、牽牛花、菊花の三花を愛し、三花園主人と號した。著すところ「用器畫法」「四則捷徑」「皇國度量法解義」「萬國暗射圖」「日本暗射圖」「武奇陽集」其他數種ある。

現住所 周防國岩國町一九八

篠田 雲峯 シノダウンボウ(歌)

氏は舊幕士であつて、名は謙治、字は士貞、雲峰

は其號、別に小竹園の號がある。元治元年一月十五日江戸に生れた。幼い時より芳野金陵、阪谷朗廬について漢學を學び、又和學を修め、其他法律經濟の二科を講究して頗る造詣するところがあつた。歳十八の時既に大藏省に出仕し編輯に従事し幾くもなく職を辭した。氏は尤も詠歌に長じ曾て鈴木重嶺翁の眷顧を受け、自得するところ甚多い。

篠原 温亭 シノハラオンテイ(俳)

名は英喜、明治五年十一月十日熊本縣宇土町に生れ、俳句に志してホト、ギス同人となつた。氏の俳論ホトドキ誌に載せられた俳談會記事によつて知ることが出来る。二十五年より國民新聞に關係して其句を同新聞、曲水、ホト、ギス等に出してゐる。最近の作に

水に落ちて蛙暫く浮きしまゝ
一としきり花散り止みし静かな
投げ出して蛙の足や水にあり

大空へ吹かれ廣がる落花かな

就中遠く飛びたる縞蛙

夏川に馬引き入れて洗ひけり

蠅取器に吸はれつゝ蠅入りて行く

最近の著書「その後」は氏の感想録であり氏の人生記録であつて「雪國」のごときは特に佳品である。徳富蘇峯氏は「余は俳人の俳句よりその散文を愛す、就中高濱虚子君と温亭君とを推す」と。評してゐるのを見ても氏は俳人として文章家として當代稀に見る作家であることがわかる。

現住所 東京市外大井町金子六二四八

篠原 春雨 シノハラシユンウ(川柳)

氏は本名春次と言ひ、明治十三年五月二十七日山梨縣甲府市柳町に生れ、三十六年東京久良岐社同人となり、専ら川柳の研究をなし、同三十八年五月五日久良岐社甲府支部を設立し、雜誌「五月鯉」の編輯同人となり、二十九年二月十一日立机披露式句會を催し、次で「川柳日月會」を興して會報

を發行した。大正三年五月五日甲府百石町山梨日

々新聞社に入つて記者となつた。大正五年腦充血の爲爾來全く聾するに至つて龍耳庵の號を用ゐるやうになつた。大正六年二月門下は句碑を建て、紀念誌「春雨傘」を發行した。同六年三月十三日山梨川柳會を設立して、雜誌「新寶晋」を發行し十年八月甲府川柳團の顧問となつた。氏は雜誌「現代」其他全國各地發行の川柳選者となり、又講談及び落語等の作もあり、諸雜誌に寄稿してゐるが、追て「古川柳評釋」「春兩落語集」等發行の豫定である。氏の祖父は杵屋長翁といつて先代杵屋六左工門の門人である。氏の川柳に

木口酔ひで歸れば一人針仕事
あつゝ湯が好きな親父でボクリ死に
内職の錢は連れ子の帯になり
三味線も賣つて聞えぬ耳へかけ
現住所 甲府市櫻町三ノ八

故信 夫 怒軒 シノブシヨケン(漢)

名は榮字は文則、別に天倪と號し、因州鳥取藩士江戸の藩邸に生れた。二歳の時父を亡ひ、幼より學を好み海保漁村、芳野金陵、大槻磐溪に就いて經史を講究し兼ねて文章をよくした。流離困頓して衣食の資に缺乏を告げ饑寒交々至るといふ有様でも少しも元氣が撓はない。艱難汝を玉にすと口吟しつゝ勉學して遂に學業大に進歩した。明治の初帷を東京本所に下して子弟を教授し名聲赫々たるものがあつたので大學の教諭に擧げられた。氏は博覽強聞であつて易、經、左傳、史記に精通し一度講壇に立つて得意の説明を始めるや、その雄辯快辭聽く者をして長時尙ほ倦まざらしめ、又その詩を論するや風俗人情に雜ゆるに俚言諧謔をまじひて滿座の人をして皆傾靡せしめる。そして才氣横溢筆を下せば千言萬語立るに成るといふ有様で、一寸福地櫻痴居士を連想するやうな人である。櫻痴居士は酒を飲まずに通人才子であつたが恕軒は酒を飲んで操行治まらないでやゝもすると常規を逸するやうな行があつた。これは櫻痴と反

對な點である。氏は平生赤穂義士の學を最も喜び高輪泉岳寺に於て其の復讐始末を説いたが、其快辯熱意人を動かし涙を落さぬ者が無く、聞くものに堵の如くであつた。爾來大學、三重中學校の教官を経て和歌山縣人の聘に應じ更に東京に歸つて明治四十三年十二月十一日病歿した。年七十六。著書に恕軒文鈔、恕軒詩鈔、恕軒漫筆、赤穂誠忠錄等がある。

墨水觀花

景光有限樂無窮

片々花飛雨裡風

不省三春看欲盡

無心鷗浴碧波中

外交官信夫淳平氏は實に翁の令息である。

四宮憲章

シノミヤノリツキ(漢)

氏は阿州藩儒四宮哲夫の三男、松永久秀の末裔で慶應三年正月阿波郡尾開村に生れた。鳴洲と號し幼より四書五經を誦し、十二歳已に左國史澤を獨修するに至つた。後中學に入り又讚岐琴平に遊び明道館に學び、十七歳の時既に小學試験係となつ

て美馬郡中を巡回し、二十歳東上して三島中洲翁の門に學び、後高等師範學校を卒業して教育事業に従事した。時に偶々都下學風の紊亂を慨し、寄宿舎を興して之が矯風に當らうとし、三十一年岡本韋庵翁と謀り、中正義塾を創立した。實に我邦分業教育の主唱者であつて寄宿學校の嚆矢である。これより先き中國に遊歴し帷を岡山に垂れて後進に教授した。後東京に上つて明治文學會を創立し、雜誌「明治文學」の主筆となつた。著書に「明治詩文大成」「作詩法講義」「作文法講義」「悲歌慷慨詩撰」「遠征將軍歡迎集」「甲午振兵雅頌」「新解日本文法書」等がある。

現住所 東京市麴町區三番町七八

柴田勝衛

シバタカツエ(評)

明治二十一年六月宮城縣仙臺市に生れ、宮城縣立第一中學校、秋田縣立大館中學校を経て、四十一年青山學院高等科を卒業したる後直ちに外人經營の書肆、教文館に勤務、傍ら上山草人、伊庭孝、

故松村敏夫の三君と近代劇協會を起し、新劇運動に資する所があつた。大正三年初めて新聞記者となり「時事新報」の文藝部記者になつた。評論「ヘツタ、ガアブルの研究」翻譯小説「女學生」「ストリンベルヒ」等の外數多の論説がある。最近には諾威作家ヨハン・ボイヤアの傑作長篇小説飢渴を翻譯して好評を博した。大正九年讀賣新聞に入つて文藝欄を擔當し今日に至つてゐる。千葉龜雄氏と協力して評論「文藝異邦巡禮」を二年越しに亘つて「早稻田文學」に連載したのも有益な文であつた。

現住所 東京市外中澁谷一七

故柴田是眞

シバタゼシン(畫)

幼名龜太郎、後、順藏と改めた。文化四年江戸兩國橋町に生れ父は市五郎と云つて、宮大工であつた。十一歳の時坂内寛哉の弟子となつて蒔繪を學び、令哉と稱し、後鈴木南嶺に就いて四條派の畫を學び、更に京に上つて同派の大家岡本豊彦の門

に入り、又文豪頼山陽の家に客となつた。かくて周遊多年の後江戸に歸つて淺草石切川岸に卜居し對抑居と稱し、盛んに作品を出して名聲をあげた。其畫は頗る豪放で洒脱であり、蒔繪に於ても青海髹を考出して人に稱せられた。蒔繪に於ては其號を古滿と云つた。繪畫の作品には、明治五年命を奉じて濱離宮延遠館に描いた壁畫があり、十九年、皇居の御杉戸を畫いた。蒔畫も屢々内外の博覽會に出品して幾多の優賞を得た。又王子稻荷の「鬼女」の額面は弘化年間の作で彼が畫名を轟かした出世作と稱されてゐる。氏は所謂是真派の創始者であつて、其子眞瀨眞哉もよく其の教を奉じた。明治二十四年七月年八十五で病歿した。

故柴東海散士

シバトウカイサンシ(文)

嘉永五年十二月二日福島縣會津藩士柴佐多藏の四男として若松に生れた。夙に漢學を學び兼ねて幼より英佛の學を修めた。後米國に航して桑港商業學校を卒業し、又ヒアデルヒヤ大學に入つて經濟

故鹽井雨江

シオイウコウ(國)

名は正男、有名な國文學者明治二年一月三日俱馬

國豊岡に生れ、東京英語學校、第一高等中學校等を経て、帝國大學文科大學國文科に入り、明治二十八年卒業した。日本女子大學の教師となり後明治四十三年七月奈良女子高等師範學校教授となつたが病氣のため大正二年二月一日歿した。享年四十五。學生の頃より文學を愛好し、大町桂月、武島羽衣の二氏とは特に交り厚く、「花紅葉」を合著したほどである。氏の令妹は文豪桂月の夫人であるのを見ても、彼等がいかに相ゆるして居たかゝるのわかる。歿後桂月等によつて雨江全集が編せられて、珠玉のやうな氏の文は之を收められてある。中に美文、漫筆、和歌、婦人傳、小説、新體詩、湖上の美人及附録につけられてある。

磯の笛竹

あらいそ岩の松かげに
今宵も笛のきこゆなり
めかりしほやくからき世の
心やりかや海士の子が
月にも闇にも隔てなく

夜毎たづねて松かげに
ふくや笛竹音をきけば
さすが忍ぶのふしもある
月のみ舟もすみ渡る
秋の磯べにうかれ出で、
國の御守の宮人が
一夜うたけのありにたる
あしたよりこそ松蔭に
きこえ初めしか海士が笛
つなぐや花の屋形船
この岩がねの松風に
しらべあはせて玉の琴
守の女君もあそばれし
酒宴ありてし朝より
きこえ初めけり海士が笛

(後略)

故鹽川文麟

シオカワブンリン(畫)

京都の人、字は子温、木佛道人と號し、畫を四條

派の大家岡本豊彦に學んで明治初年京都畫壇の雄鎮となつた。嘗て孝明帝の勅を奉じて描畫の光榮を有した。氏最も酒を好んで醉中の作は頗る妙を極めてゐる。明治十年五月年七十で病歿した。東京博物館藏の「嵐山春景圖」はその代表作である。門下からは幸野樸嶺、野村文學、内海吉堂等の名手が出てゐる。

鹽谷青山

シオノヤセイザン(漢)

名は時敏、靜岡縣土族箕公鹽谷誠之の長男で安政二年正月二十七日生れた。名は時敏、字は修卿、青山はその號、宥陰一姪。幼より家學を受け造詣深く、尤も文章をもつて著れてゐる。明治十八年太政官に出仕し同二十一年帝國大學書記官に轉じ二十三年第一高等學校教授になつて現にその職に在る。長男温は文學博士東京帝國大學文學部教授で支那時文の大家である。

德川公爵襲祐五十年賀筵卒賦三一律
以呈

其一

明治新元更革期、
正當王室中興日、
五十年來任劇務、
誰知照祖貽謀在、

其二

禮樂衣冠門望深、
汪汪雅量包湖海、
映闥松標後凋色、
濟生更有救貧業、

八達嶺

禮樂衣冠門望深、
江城舊事不須尋、
落落雄才作霖霖、
當階葵識向陽心、
陋巷爭迎鑿枲音、

鹽谷節山

シオノヤセツザン(漢)

名は温、青山鹽谷時敏の子。夙に家學を受け、また東京帝國大學文科大學に入つて漢學を研究し、支那文學史支那小説稗史の權威となり、遂に東京

帝國大學教授となり、文學部に於て得意の漢文を講じてゐる。文學博士。

恭陪靜岳源公承祀五十年賀筵卒賦
一律以呈

尊爵崇勳世所欽、
要知松幹朝天勢、
經國宏謨兼宇宙、
自慙累葉傳儒學、

贈賴生

績學種文追祖翁、
將門出將君須記、
現住所 東京市小石川區第六天町四八

鹽谷鵜平

シホヤウヘイ(俳)

名は宇平、明治十年五月二十八日岐阜市外江崎に生れ、早稻田大學校の前身なる專門學校に入つて政治科を卒業し、正岡子規河東碧梧桐の兩氏を敬慕し俳人となつた。今は癖三醉と親交を續け、俳句雜誌「土」を千五百の俳友に配付してゐる。氏

の句は「日本」「ホト、ギス」「日本及日本人」「海紅」等に投稿され、碧梧桐著「日本俳句鈔」等に抜かれてゐる。氏は雜誌「鵜川」「季集」を發行した外、格別の著書も無いが、その代り毎月發行の「土」は言はずその著書に當つてゐる。

長良川夕飛びの鮎うひうめきて
園主のよな分蜂法も風光る
奇想あり筆端時に初雷す
禮帳に表紙ありと誰も見て
現住所 岐阜縣稲葉郡江崎村

澁川玄耳

シブカワゲンジ(文)

名は柳次郎、長野縣の人、朝日新聞記者として有名なものであつたが今は著述に従つてゐる。氏が嘗つて渡歐した時の印象を書いて「世界見物」として出した。漢籍藏書家として知られてゐる。氏は亦餘技として俳句を作つてゐる。満洲陳中馬と乃公と面を並べて清水かな
町中に城の銀杏の落葉かな

現住所 東京市外代々木南山谷一三三

故澁谷牀山

シブヤシヨウザン(漢)

名は啓、字は子發、通稱は啓藏と言つて近江の人である。幼い時藩儒田中芹坡について經書並に詩文の教授をうけたが頭腦明敏よく論理に通ずるので神童の稱があつた。慶應元年江戸に遊び、經書を若山勿堂に受け文を中村敬宇に學んだ。三年の後藩學の教授に推されたが明治五年家を弟良藏に譲つて東京に遊んだ。いかに學問に忠實であつたかがわかる。正院中主記、賞勳局録事、内廷編修學習院教授等を経て明治二十二年高等師範學校教授となり専ら經史を講じた。三十九年從五位勳五等となり、四十一年八月病歿した。享年六十二。氏は寡言沈重、溫恭にして聰慧よく數理に精しく天文曆法通ぜぬところが無い。高等師範學校に於て考工記を講じ、宮室車服を説明するに幾何學を應用してその廣狹長短悉さゝざるなしといふので聽く者嘆服しないものがなかつた。幾何新詠十數

首今に傳つてゐる。

澁谷せゝらぎ

シブヤセトラギ(小)

名は俊、明治二十一年六月二十日、父忠徳官遊中千葉縣香取郡佐原町に生れ、獨學して檢定試験に合格し教鞭つたことあるが、四十一年四月山梨民報記者となり、翌四十二年一月山梨日々新聞に入り、爾來今日に及び其の編輯長となつた。又「山梨縣初等教育者」「妖怪研究」「峽中文人録」等の著がある。中村星湖に師事して短篇小説「死に面して」「マニラの弟へ」等を博文館發行の「文章世界」に、同短篇小説數篇を「東京青年公論」に發表し、長篇創作「火宅」は東京に於て出版することになり、別に長篇「惡に隣りして」に執筆中である。餘技としては謡曲、登山、を好み山梨山岳會、山梨博物學會の各理事、詩歌雜誌「明眸」を編輯してゐる。

現住所 甲府市深町

島木赤彦

シマガキカヒコ(歌)

本名は久保田俊彦、以前に久しく柿の村人と言ひ其前には久保田山百合とも稱した。明治九年十二月長崎縣上諏訪町に生れ、長野縣師範學校卒業の後、故伊藤左千夫の門に入つた。アラ、ギ派の錚々たる歌人であつて「アラ、ギ」の編輯に當つてゐる。歌集「馬齡薯の花」も固より佳い歌集であるが其後公にした「切火」は氏を最も有名にした。切火が出た時人々は自然に對する氏の主觀の灼熱と其表現の技巧の確かさと作に對する氏の敬虔嚴肅な態度とを異口同様に讚歎した。氏の歌は格律蒼古にして趣向平明態度眞摯にして技巧には慘憺の苦心がある。感傷的な咏歎や手先の器用な歌は一首もない。歌風は根岸流の本流を傳へて居ると言ふことが出来る。尙ほ前記の外に歌集「氷魚」「赤彦童謡集」「太虛集」等の著書があり、外に多くの評論がある。また萬葉研究叢書の刊行に力を盡し續々出版してゐる。

硝子戸に雨流るれば庭の青のおぼろにすきて眞晝なりけり

子どもはみな悲しきうなる面わしてあが眼つぶれば來て並ぶかな

今別れんとする心の静けさくわんさうの夕日の朱は死にて動かす

水たまりじめく／＼と草の枯れねたる重みにあが眼はたへかねるかな

二日居りし疊の上に煙草火の燃えあとのこし我去らんとす

益荒男は一たびよしと思ふこと口にまうして言避けをせず

曇りつゝ夕日あたれり裾野原雪解のあとの草みな伏して

現住所 東京市麴町區下六番町二七佐々木氏方

島崎藤村

シマガキトウソン(小)

明治五年二月十七日長野縣筑摩郡の僻邑神坂村に生れた。幼年の頃より東京に出で泰明小學校、三

名は春樹

田英學校を経て明治學院に學んで同二十六年卒業した。同年二十二歳で當時の文藝雜誌「文學界」の創刊に與りその同人となつた。また二十五歳で最初の詩集「若菜集」「夏草」「落梅集」等を出して日本新詩壇の先驅をなした。明治女學校、小諸義塾等に教鞭を執り暫らく子弟の教育事業に携つて居たが、自然主義勃興當時、氏が三十歳の頃初めて小説に筆を染め、苦心の長篇「破戒」を公にして其の創作的天才を認められ、一躍して文壇最高の列に入つた。日露戰爭當時田山花袋國木田獨歩島村抱月正宗白鳥等と共に自然派文學の覇を唱へ、四十一年「春」續いて「家」を出して名聲益々あがつた。大正二年の末フランスに渡り、偶々世大戰爭に際會し、時には巴里の客舎に潛み、或はポルドーの僻陬に難を避けて頗る苦楚を嘗め戰亂尙ほ止まざる大正五年の秋歸朝した。「佛蘭西便り」「巴里便り」「エトランゼ」等は皆この時の作であつて「故郷」「幼き者に」等は同じく同洋行より歸つた後、當時幼少年者の讀物流行

の機會を以て出したものであつて、氏の作にあつては詩といひ小説といひ一作出づる毎に多大の注意を拂はれ、多くの讀者を得たものである。氏の態度は常に瞑想的であり心情は常にロマンチックでありながら、其の創作に於ける描寫と表現とは全然自然主義的の寫實である。氏をして渡歐を決行せしめる動機となつた一大秘事を明みに出して問題を引起した自叙傳小説「新生」上下二卷の如きは、毀譽褒貶交々であつて、所謂道學者流の非難は随分手嚴しいものがあつたけれど、多くの青年思想家や青年文藝壇の人よりは、人もこの位悔い改められ、ば罪の罪とすべきものが無いというてその過去を攻めず、其の悔悟の心情のよくにじみ出て居る文章の美を限りなく讚嘆するものもあつた。氏は「破戒」を出した時二葉亭四迷氏に認められて以來、世に多くの創作家も出たが、未だ一度も其の時代の新進作家より蹴落されるといふやうなはじめを見たことは無い。この一事を以て見ても、氏は確に我が國の出したる一大文豪で

あると言ふことが出来ると思ふ。尙ほ「文學界」についての知識が無い人は、氏の詩人より文人に移つたことについて異様な感を持つものもあるやうであるが、二十三四歳の頃頻りに書いて居つたものを「文學界」について見ると、當時既に立派な小説家であり紀行文家であり詩人であると同時に戯曲家でもあつたことがわかるであらう。著書に前記の外「綠葉集」「藤村集」「食後」「犠牲」「藤村詩集」「千曲川のスケッチ」「新片町より」「平和の巴里」「戰爭の巴里」「櫻の實の熟する頃」「海へ」「水彩畫家」「愛の歌」等の外數多の作がある。大正十年氏が誕生五十周年に當つて、新體詩人中の詩話會同人はその祝意を表するために詩集を出し、又舊知門人等の盡力によつて藤村全集が刊行されることになつた。「水彩畫家は「國活」の手で全六卷のものゝ活動寫眞にとられる筈であり尙ほその主役には井上正夫が扮装することになつてあつた。又松竹キネマでは「破戒」を活動寫眞にとつて舞臺上に載せようといふ計畫もあ

つた。氏は尙ほ婦人雜誌「處女地」を編輯してあつたが大正十二年の頃から廢刊したのは惜しかつた。氏は芭蕉研究會を起してその同人と翁の詩境句境を味到してゐる。又氏は作家中の遅筆家として有名であり、趣味として煙草を多く煙らすことも非常に名高い。歸朝後講演をも試みたが、これだけは氏の畑では無いらしい。

春の曲

うてや鼓の春の音、
雪にうもるる冬の日の
かなしき夢はとざされて、
世は春の日とかはりけり。

ひけばこそめの春霞、
かすみの暮をひきとぢて、
花と花とをぬふ絲は、
けさもえいでしあをやなぎ
霞のまくをひきあけて、

春をうかがふことなかれ。
はなさきにほふ蔭をこそ、
春の臺といふべけれ。

小蝶よ花にたはぶれて、
優しき夢をみては舞ひ、
酔うて羽袖もひらひらと
はるの姿をまひねかし。

緑のはねのうぐひすよ、
梅の花笠ぬひそへて、
ゆめ静かなるはるの日の
しらべを高く歌へかし。

現住所 東京市麻布區飯倉片町三三

島崎柳塙

シマザキリユウウ (畫)

名は友輔、儒者醉山の息であつて、明治元年五月四日東京市牛込區に生れた。字は子文、柳塙はその號で別に黒水漁史及び柳々亭と號し、日本畫の

名家である。氏は櫻井久、竹本石亭、松本楓湖、川端玉章等の諸大家に師事して人物花鳥山水等の畫を修業し、風俗畫には一新機軸を出した。明治二十一年以來「東京府工藝共進會」「日本青年繪畫會」「日本美術協會」「内國勸業博覽會」等で屢々受賞し、三十二年福井江亭、結城素明、平福百穂等の諸氏と无聲會を起し、又日本美術協會、日本畫會等の委員となり、四十三年より川端畫學校の教授となつて今日に及んだ。文展には第一回「に西鶴のおなつ」第二回に「おなひどし」第三回に「花もみぢ」第四回に「姿の關守」第五回に「閑庭」第八回に「紅蘭女史」第九回に「簞食壺 兼迎玉師」第十回に「月と花」等を出し、また其他の諸會に出品して褒狀、銅牌、銀牌等を受けたこと數十回の多きに及んでゐる。また宮内省御用品となつたことも前後數回に及んでゐる。帝國繪畫協會々員、日本畫會、巽畫會、明治美術會の評議員、日本畫會の審査員である。日本美術協會でもその日本畫部の幹部格であつて同會では餘程重

現住所 大阪市南區清水町綿屋町角

故島

雪舸

シマセツカ (彫)

きを置かれてゐる。所謂協會派十人組のうちの一
人であつて、今井爽邦、高取稚成、佐藤紫烟等の
諸大家と共に、大震災後伯爵芳川寛治氏後援のも
とに、多くの作品を出して世に問ふ筈である。餘
技として詩作の見るべきもの少くない。

調眞野陵

老樹 秋寒眞野天、

西風滿地動蒼煙、

可無寶劍留龍氣、

鬱々皇陵七百年、

現住所 東京府下日暮里一一二四

島成園

シマセイエン (畫)

名は成榮。明治二十六年大阪に生れ、初め師を求
めないうで獨立獨行寫生を研究し、後北野恒富に學
び、美人畫を得意とし、大正美術會大阪美術會等
の會員となり、又大正七年一月北野恒富、水田竹
圃等と茶話會を起した。文展へは第六回に「宗衛
門町の夕」第七回に「祭のよそほひ」第九回に
「稽古のひま」第十一回に「唄なかば」を出した。
兄鳥御風も亦日本畫家として世に知られてゐる。

幼名三多吉、越前の彫刻の名工島雪齋の子であ
る。十六の時父を喪ひ、東京に出て兄雪洞につい
て彫刻を學びその技大に進歩し、別に一家を立て
た。嘗て東宮の御幼時玩具木馬を製して献上し大
に名聲を博した。のち大阪に移つて大阪美術協會
名譽職員となつた。爾來博覽會共進會等に出品し
て皆賞與を得た。米國シカゴ博覽會の開かれた時
氏は殆んど二年の間刻苦精勵の上故井伊直弼の肖
像を作り上げて出陳し大好評を博し賞牌及褒狀を
受けた。氏は温厚人に接するまた城壁を設けな
つたので交際も圓満にまた門に集まる生徒も益々
多かつたが偶々病氣に罹つて明治二十六年九月二
十一日大阪に歿した。享年僅かに三十一。

(略統)

志摩 乘時 子 島雪齋 島雪舸

長崎の石齋 彫刻師

故島 雪齋 シマセツサイ(彫)

名は只直、字は士節、越前三國の人、幼い時貧困のため食衣に窮し彫刻師志摩乗時の徒弟となつた。刻苦精勵して技大に熟した。成業の後開鋪したが偶々師志摩乗時死亡した。その頃長崎の彫刻師石齋といふ人三國に來遊した。氏は禮を厚うしてこの人に就いて學んだので其の技また大に進んだ。遂に藩主松平春嶽の知るところとなり藩の彫工となつた。のち藩主の許可を得て京都に上り公卿の間に出入して需囑を受けた。春嶽これを江戸の藩邸に召して將軍手箒笥彫製を命じた。將軍甚だこれを喜んだので春嶽京都に入つて紫檀書棚を禁中に献じようとした時雪齋は之を製することゝなつた。雪齋はこゝに於て法橋の官を拜し齋戒沐浴數日にしてこれを製作して献上したさうである。のち野馬の置物を澳國の博覽會に出品して一等賞を得た。爾來益々聲價益高かつたが明治十二年十二月年六十で歿した。氏は眞の藝術氣質の人

であつて世事に疎く買物などに行つても往々支拂の金格を誤つて損害をしたので、家族の人は必ず金格を調べた上これを氏の財布に入れて渡したといふ逸話がある。子の雪舸も名人であつた。

島田五工 シマダゴコウ(俳)

本名は豊三郎、明治八年四月一日秋田縣山本郡能代港島町に生れ、少時加藤田先生に就いて漢籍を學び、一時政黨に入つて二三の名譽職に就いたこともある。十七年末「北羽新報」を發行して獨力經營今日に及んだ。氏は三十年頃佐々木北涯によつて日本派俳句に指を染め爾來石井露月の影響を多大に受けてゐる。三十三年上京して子規氏の提撕を受け、三十三年雜誌「俳星」を發刊したが百十號を以て廢刊の止むなきに至つた。氏の句は「日本」「ホト、ギス」「俳星」等の新聞雜誌に多く投稿されたが、「春夏秋冬」其他の俳書に蒐録されてゐる。氏はまた弓術、圍碁、川柳聯珠に興味を有し、相撲の養成にも力を盡してゐるが、錦

島や能代瀉等は氏の力によつて出世したものださうである。

古曆兒の食初めも年の内

北窓やかけて寒けし簑と笠

口切や鴛鴦か破りし薄氷

露涼しおくれ茄子の花二つ

脊の子の面影涼し夏の川

山越の松明かざすいづみかな

現住所 秋田縣能代港町

故島田清次郎 シマダセイジロウ(小)

明治三十二年二月二十六日金澤市に生れ、金澤中學校及び東京明治學院に及び、長篇小説「地上」四卷、創作集「大望」戯曲「帝王者」感想集「早春」等の著がある。氏は所謂青年天才作家として世の驚異となつたが地上第一部「地に潜むもの」の出版は二十二歳の時であつた。生田長江氏か誰か之を紹介したのであるが非常な評判になつて其の賣行きに於て一切の文藝書類を凌駕し「地に

叛くもの」「静かなる暴風」の第二部第三部を通じて貳拾萬部を超ゆるに至つた。其の後第四部「燃ゆる大地」を出してまとめてゐるが、これらは現代社會組織に對する痛切なる反抗と熱烈奔放極めて大膽な戀愛と性的行爲の露骨な描寫、從來の小説の型を破れる清新自由の表現であつて何人をも魅し盡さねばやまぬ傑作である。また創作集「大望」は脚本「若き城主」と短篇六種とを収めてゐる。「若き城主」は先代萩の鶴千代の若い心持ちを書いたもの、「あるゴロツキの嘆き」「ある男の話」等は力強く若々しい心持ちがよく表はれて居る。大正十一年渡歐して各地の諸大家に接し殊にウェルスと接したことは一時世評にも上つてあつた。十一年十二月歸朝後舟木氏令嬢との問題が起り大に世人を騒がしたことがある。かゝる問題の發生以來氏の作に對する人氣も衰へたやうであるが、元氣鬱勃の氏は何れ將來何ものかを出すことであらう。著書には右の外に戯曲「革命前後」を改造社より出してゐる。十三年八月三十日長野

縣明治温泉に治療中同地笹原山中にて縊死した。

島田青峯

シマダセイホウ(文)

本名は賢平、明治十五年三月八日三重縣志摩郡的矢村に生れ、明治三十六年早稻田大學文科を卒業して約四年の間中等教育に従事し、明治四十一年國民新聞の文藝欄に入つて今日に至つた。翻譯「セヴァストオポリ」「ゴリキイ」小説「感謝狀」劇評「忠臣藏見物」「新富座を見て」感想「鷗外先生」等の作を出してゐる。嘗て「ホト、ギス」の記者をしたこともあるが、今はこの誌に俳句や文章を寄せてゐる。

現住所 東京市牛込區若松町八一

島林一平

シマバヤシツペイ(俳)

氏は加州金澤の俳人で天保十三年三月生れた。橋甫次郎の次男で暮柳舍甫立と號し、作句に精進した。後島林源兵衛に養はれて其妹婿となつた。實父甫次郎俳諧に遊び成田蒼虬の門に入り觀月庵太

甫と號した。老年に及んで盲となり筆を執ることが出来なかつた。氏は父の句が出来れば傍に侍して之を筆録したものである。かういふ境遇にあつた氏は自然句作に手をつけるやうになつた。幼時「鶯や野風が吹いてチャツ／＼と」と口吟したら父大に喜んで俳諧に精進することを奨励した。後氏の叔父暮柳舍立介の家が絶えたのを興し、暮柳舍七世を繼ぎ、文久二年春二條宮殿下御門下御會の連業に加へられた。明治六年以降公吏に就いて餘暇は俳道を楽しんでゐる。近來はその消息を詳にしない。

以前住所 石川縣金澤市下堤町二五

島文次郎

シマブンジロウ(文)

長崎縣士族野口常吉の二男で明治四年十月六日生れた。先代惟精の養子となり同十九年七月家督を相續し二十九年東京帝國大學文科大學を卒業して大學院に這入つた。三十二年十一月京都帝國大學法科大學助教授となり後同文科大學助教授同大學

司書官第三高等學校教授を経て再び京都帝國大學に奉職して文學部教授となつた。有名なる漢詩人故野口寧齋は氏の實兄である。先年歐洲を巡遊して歸來各種の新聞雜誌に得意の文學談を發表してゐる。文學博士。

現住所 京都市上京區淨土寺町山下

島道素石

シマミチソセキ(俳)

本名は勘四郎。明治六年十一月十七日大阪東區島町二丁目日本家に生れ、私立商業學校卒業後家庭に在つて家業に従事し、のち藥種商となつて今日に至つた。二十歳の頃義兄の父にあたる人に俳句を勧誘せられ。後に日本新聞社主陸羯南氏の紹介を得て正岡子規居士の門に入つて其の教導を受け、一方水落露石に誘はれて斯道に精進した。餘技として謡曲を好み、句成れば「日本新聞」「ホト、ギス」等に投句して來た。

竹垣に物干してや柿の花
葉櫻へ割込む松の枝強し

時の移りに靜さあるや葉の櫻

日に三度鐘が唸るや燕の子

松の上の崖に花もつ島麗ら

現住所 大阪市東區道修町二一

島村民藏

シマムラタミゾウ(劇)

明治二十一年七月二十二日東京市神田區岩本町に生れ、文學研究殊に劇作の方面に志して早稻田大學に入り、四十二年その英文科を卒業し、更に東京帝國大學文科大學獨逸文科に學んでその選科を卒業し、大正六年早稻田大學講師となり、また戯曲の創作及び翻譯の筆を執り且つ大日本文學會を經營した。大正十年演劇學會を早稻田大學校内に起し幹旋の任に當つてゐる。戯曲「夜叉丸」「清十郎」「演劇學會戯曲集」演劇評論集「近代演劇の理論と實際」等の外、近代文學に現れたる兩性問題の研究等を發表してゐる。「性的理想主義」の著は文學を通じて見た兩性關係の諸問題を中心として、子供の價値と意義、種族改善の方法、其

他繁殖、戀愛、結婚等に關する諸問題を論述して居る。嘗て「子供の國」と題して婦人公論に連載したものを増補したものであり、「近代兩性問題の背景」の一篇をも添へてゐる。現に早稻田大學文學部教師を勤めてゐる。
現住所 東京市牛込區早稻田町五五

島村 菱三 シママラトウゾウ(小)

本名は盛助、明治十七年八月埼玉縣南埼玉郡百間村に生れ、東京帝國大學文科大學に學びその英文科を卒業した。小説「貝殻」の作がある。中學校の教師を勤めてゐる傍ら文學の著譯ものに從つてゐる。

現住所 埼玉縣南埼玉町百間村

故島村 抱月 シママラホウゲツ(評)

明治四年一月十日島根縣那賀郡久佐村に生れた。佐々山一平氏の長子であるが、島根裁判所に雇員となつてゐる時、神奈川縣の都筑郡田村出身の判

やうである。氏は前に早大の教授となり屢々文學博士を以つて擬せられたが遂に其事のなかつたのは遺憾である。著書には「新美辭學」「滯歐文談」「亂雲集」「近代文藝の研究」「懷疑と沈黙の傍より」等の外イブセンの「人形の家」「海の夫人」メーテルリンクの「モンナ、ワンナ」の翻譯や數篇の戯曲がある。藝術座は氏の入棺式前座員一同評議の結果、松井須磨子を座主とし中村吉藏氏を脚本部主任として、氏の事業を繼續する事になつた。葬式には高田坪内兩博士、早大總代金子馬治文藝界總代田山花袋、早稻田文學代表者本間久雄藝術座代表、脚本家、演劇總代伊厚青々園門生總代相馬御風氏等の弔辭があつた。行年四十八。

志水 直 シミズナオ(詩)

氏は名古屋の人、嘉永二年四月生れた。香夢居士又は院花軒主と號し、明治四年始めて陸軍に出仕し、七年佐賀の役、十年鹿兒島の役等に從軍して功績があり、爾來概ね陸軍省に勤務し、課長、秘

事島村文耕に見込まれて、同二十四年氏が早稻田專門學校在學中その養子となつた。養父は時に東京地方裁判所判事を奉職して居つた。廿七年の卒業論文は逍遙博士や大西博士を驚かして首席で專門學校を出た。三十六年早大の留學生となつて英獨に遊學し専ら演劇や美學を研究して歸つた。のち、四五年も中絶してゐた早稻田文學を再興して自然主義文學の鼓吹をなして時代の文運を指導した。そのすぐれたる觀賞批評と優麗暢達の筆は誠に得易くない。坪内博士と合はないで文藝協會瓦解の後は藝術座を起してその經營と興行には辛酸を嘗めつくした。大正七年松竹會社との約束が出来て、文章にも親しむ餘裕のあるやうになつたが、流行の悪性感冒に罹つて十一月五日午前二時溘として他界の人となつた。氏の文は品のよい柔かみのある精嚴にしてしかも芳醇といつたやうな文章である。氏の文を読むと、あの一寸首を傾けるやうにして右の手の指を頭髮の處へ軽く觸れぢつと眼を伏せながら靜かに語る澄んだ聲を聞く

書官、副官、參事官等に歴官し、累進して從五位勳三等陸軍歩兵大佐に至つた。嘗て支那に官遊すること三年、又大山陸軍卿に隨行して歐米各國を巡視し、廿五年豫備役の籍に入り廿七八年の役復出で、從軍し、廿九年臺灣總督府事務官に任ぜられ、三十年名古屋市長に選出されて地方自治の實際について研究と努力とを続け、尙居常好んで佛典を読み又詩作を楽しんでゐた。近來その消息を聞かぬ。

以前住所 東京市牛込區市ヶ谷仲ノ町五八

〔愛知縣名古屋市伏見町二〕

清水 彌太郎 シミズヤタロウ(文)

明治二十六年二月一日愛知縣寶飯郡長澤村に生れ大正五年早稻田大學美文科を卒業して、同じく六年より讀賣新聞社に入つて文藝部を擔當して今日に至つてゐる。

現住所 東京市四谷區舟町一一

清水良雄

シミズヨシオ(畫)

明治二十四年八月東京本郷に生れ、東京美術學校に入學して大正五年洋畫科を卒業し、更に研究科に入つて大に討究するところがあつた。文展へは「第七回」に「調べの糸」第八回に「いちぢく」第九回に「無花果の秋」第十回に「ひがん花」「ひとり」第十一回に「まごの花」等を出し、「西片町の家」を出すに及んで遂に名譽の特選となり、十三年の帝展に「秋苑」「兄妹」を出して好評あつた。現住所 東京市本郷區西片町一〇はノ一八

故清水蓮成

シミズハスナリ(歌)

美濃大垣の歌人であつて、一に自樂坊と稱し坦蕩齋と號する。京都に出でて山岡氏を嗣いで五三郎と稱した。慶應元年家を出て本隆寺の日要に従つて僧となつた。性頗る和歌を好んで渡忠秋、香川景恒に學び、名聲あつた。又書も一家を成し、女官園祥子、中山慶子、千種任子、等多く其門に入

つて學んだ。明治三十五年三月十九日年七十三で病歿した。「やゝ今年はだかんほうと成りにけり七十三とせ罪つくりきて」の辭世を残してゐる。

故清水樂山

シミズラクザン(漢)

名は純崎、字は君侔、幼より龜田綾瀬及び寺本海若に學んで神童の稱があつた。後幕府に仕へたが尤も吏務に長じ、剛直を以て聞えた。維新の際出仕したが後辭職して其の別墅臺北三河島に隱遁し芳野金陵の筆になつた。臥龍窟の扁額を書室に掲げ其の庭を活園と名づけた。蓋し風景の活畫圖に似たるがためである。常に斯道を維持するを以て己の任と爲した。村中に天主教を奉ずる者があつたので氏は甚だこれを歎き辯難攻撃した。又淺田宗伯・佐田介石と莫逆の交を爲し時勢を痛論した。又力を氏事に竭して皆成績をあげた。氏は常に神を敬すること頗る厚く嘗て村民と謀つて石垣を千住素盞雄神社に献じ、また文を撰んで碑を建てた。書法もまた巧であつて宋の歐陽詢に酷似し

其の學極めて博く、尤も經說に深い。明治二十一年九月二十三日年六十八で歿した。

清水鱸江

シミズロコウ(俳)

名は昌三郎、明治六年八月出雲國松江市に生れ、松江中學を半途退學して國學院の聽講生となり、新潟縣知事の學僕となつて同地中學五年まで修學し、東京京都を放浪して京都取引所在勤二十三年の後辭職し、株券賣買業に従つてゐる。氏は高濱虛子選の「日本」へ投句し、その添削を乞ひ、東洋城の京都大學に在る頃樂堂一樹句之都衣川等の諸俳家と共に盛に句作をなした。また先に中川四明翁の下に満月會幹事として又懸葵記者として盡すところ尠くなかつた。四明翁歿後「日出」の俳壇を引受けたが多忙のため辭任した。氏の句は「日出新聞」「俳星」「ほとゝぎす」「懸葵」等に投稿されたが大塚甲山氏の編した「俳句集」「明治百家句集其他に蒐録されてゐる。寶藏に風を入れけり百日紅

持明院基哲

シミヨウインモトサト (歌)

正三位石野基佑の第二子で子爵石野基道の實兄である。慶應元年二月十二日に生れ十四年四月出でて先代持明院基和の養子となり同十七年子爵を授けられた。曩に貴族院議員に擧げられ現に殿掌を勤め勅題の御前披講式に於ては毎年その發聲を仰付つてゐる。書は藤原行成流の家として恥ぢぬほどの名人である。歌は舊派ではあるが達吟である。

田家早梅

春風もまたふきそめぬ小山田のさとの垣根ににほふ梅かな。

曉山雲

動き無き山の高嶺にたなひきてまだしづかなる曉の雲。

寄鶏祝

君が代をなが鳴き鳥の聲聞けば天の岩戸のむかしをぞ思ふ。

朝海

わたつみの波間を出づる朝日かげ見れば心もはれわたりけり

〇六

現住所 京都上京區室町通今出川上ル築山南半三

下田歌子

シモダウタコ

(歌)

女史は有名な先哲叢談の著者東條琴臺翁の孫であつて、舊美濃國岩村藩の督學平尾録藏氏の女である。初名を「せき」と云つて、幼より家庭の教育を受け、七歳の時既に詩歌を能くした。琴臺翁は深くこの文學趣味について之を戒め婦道必須の業を修めしめようとした。女史は快々として樂しまないため遂に病氣になつた。父母大に憂慮のあまり之を祖翁に謀つたので、琴臺は驚いて女史を引いて自ら教授した。後八田知紀翁に就き歌道を修

めたが翁が上京することになつたので女史も來て研鑽怠りないので大層進歩し蘊奥を究めた。十五歳の時召されて宮内省の出仕となり、上は皇后陛下御詠の御相手を奉じ、下は女官の教授を命じられ、寵遇殊に厚く、畏くも皇后陛下より歌子の名を賜はつた。明治十二年許嫁下田猛雄と結婚のため出仕を辭し、爾來麴町區一番町に桃天家塾を開いて和歌習字を授け、十七年夫猛夫病歿後再び除服出仕を命ぜられ、累進して權命婦となつた。女史初め宮内省の出仕をするにあつて、元田永孚高崎正風、福羽美靜等の諸老に學び、更に英佛の語學を研究した。後華族女學校の創立に與り、教授兼學監となり、明治十九年二月更に其規範を擴張し、二十六年女子教育取調として英國に赴き二十八年歸朝した。後華族女學校教授兼學監となり同校の學習院に合併せられた後は學習院女學部長となつた。又常宮、周宮兩殿下御用掛を奉じ、實踐女學校々長としての劇職の餘暇をもつて著作に従ひいろ／＼有益な書物を出してゐる。著書に

「國文小學讀本」「家政學」「家庭文庫」「三體女子消息文」の外滯英中の觀察談を書いたもの等がある。

こゝも亦同じ旅ねをいかなれば船はつる日の嬉しがるらん
稻妻の目にもとまらぬはや艇のゆくてに響くいかづちの音
世をおほふはゝその陰も教草つむ園よりぞおひいでぬべき

現住所 東京市赤坂區青山北町六ノ五三

霜田史光

シモダシコウ(詩)

本名は平治、明治二十九年六月埼玉縣北足立郡美谷村松本に生れ、日本工業學校建築課を卒業し、天折詩人北村初雄氏と共に象徴派詩人三木露風氏の指導をうけ詩雜誌「未來」「リズム」「詩王」等を編輯した。詩集に「流れの秋」がある。三木露風氏は大正七年四月、北村初雄、二宮典美、喜志麥雨の三氏と共に霜田史光氏を文章世界誌上に推

薦して、先づ三氏の特徴を述べたる後に霜田氏についてはいつてゐる。「最後に霜田氏は眞實に富む詩人である。日本的な思想と感情とを抱いてゐる。「月光讚歌」は渠の氣持ちを最もよく代表してゐる作である。云々」と

月光讚歌

わが世界隈なく照らす月光よ
御身、わが心の主となれ
御身、わが手足の身振となれ
御身、わが言葉のりすむとなれ。

そは常に布く
永遠の眞理なり
天空より雨とふりきて萬象に
一つ一つの愛を與ふ。

われはおだやかに愛するなり
われは眞に生きんが爲めに
月光を求む。

思想は白日の階段をのぼれ
されど心は月光の海に
波と限とにちり交へよ
われにあれ男性の力！
われにあれ女性の力！

月光に消えし母を探ねて
われは王宮に向ふべし
われ身を碎き、靈を碎き
月光菩薩が鈴の音の片ともなりぬべし。

おゝ、月光の國
あらゆるものゝ懽悅
わが身わが軀死化するも
眞のわれは更に流れゆかむ
月光の流れに和しつゝ。

おゝ、わがこの世に來らざる時の月光

おゝ、わがこの世を去りてゆくべき期の月光
われは手をとられぬ
微笑まれぬ
かの日とその日とに。

月光よ！主よ！
わが唇もて觸れしめよ！
わが身もて一致せしめよ！
わが血を、轟くわが血を
御身のうちに磨がしめよ！

現住所 埼玉縣北足立郡美谷本村松本

下村爲山

シモムライザン(畫)

慶應元年五月伊豫國松山に生れ、初め西洋畫家小
山正太郎の不同舎に入つて洋畫を修めたが後、轉
じて俳畫風の日本畫を學び、頗る風韻の高いもの
を描いてゐる。大正七年二月、丸山晚霞、茨木猪
之吉等と新日本畫協會を起した。
わか竹や雀の宿の朝烟

春寒を籠る一廬や竹の中
麥秋や橋の寄進に我もつく

現住所 東京市小石川區白山御殿町二一七

下村觀山

シモムラカンザン(畫)

名は晴三郎。明治六年四月和歌山に生れ、幼時東
京に出て初め狩野派の畫家狩野芳崖の門に入り、
更に同派の橋本雅邦に就き、次で東京美術學校に
入り、二十七年卒業し、直に同校助教となつた
が、三十一年、岡倉覺三に従つて辭し、日本美術
院の創立に與り、三十六年、再び美術學校に入り
文部省留學生として歐洲に遊び、歸つて間もなく
教職を辭した。大正三年、横山大觀等と共に日本
美術院を再興した。文展には第一回より第八回ま
で審査員に任命されたが作品は第一回文展に「木
間の松」第四回に「魔障圖」を出した。院展へは
第一回に「白狐」第二回に「弱法師」第三回に
「春雨」を出した。又再興前の美術院には、三十
二年「日蓮上人」を出し、次いで「大原の露」を

出した。其外「太閤秀吉」「大原御幸繪卷」等は
特に其の傑作と稱せられた。大正六年六月帝室技
藝員に任命された。彫刻家下村清時は氏の兄であ
る。日本美術院同人でその評議員であつて横山大
觀と共に同院の重鎮である。
現住所 横濱市本牧和田山

下村千秋

シモムラチアキ(小)

明治二十六年九月茨城縣稻敷郡朝日村に生れ、土
浦中學を卒業して文學の研究に志し、早稻田大學
文科に入つて大正八年卒業した。同年讀賣新聞記
者となつたことがあるが、脚本「十字路」「夜明
を待つ」小説「ねぐら」「四日間」「埋立地の二
年」「開かぬ眼」「ブレイクの顔型」等の作を「太
陽」「早稻田文學」「白磁」「國本」等に發表して
ゐる、
現住所 東京市小石川區茗荷谷町二五

故雀

庵

シヤクアン(俳)

有名なる俳人、姓は藤原名は長房、後に昶と改めた。通稱は彌四郎、升斤、さゝのや、篠舎、千聲、今津村老、かりのや、墨水白鷗、堤隣翁等の別がある。江戸三輪の名主田中某の次男であるが後の妻の里方の絶家するのを憂ひて加藤氏（或は曰く齋藤氏）を稱した。併しまた談州樓焉馬に従つて堤隣樓菊馬と云つて後今戸に住んだ。頗る薄學で考證に委し「さへづり草」二百三十七巻を著した。これは天保年間から、文久三年歳六十六に至るまでの隨筆である。明治八年十二月十日年七十九で歿した。辭世は「花七日人も七夜の」と流といふのである。玉嬰、雀庵のあとを繼いで宗匠となり、著書「さへづり草」の外に「高尾追々考」を著した。

十二谷義三郎

シユウイチガヤヨシザブロウ(小)

明治三十年十月神戸に生れ、東京帝國大學文學部に入つて英文學科を卒業した。「泥濘」「緑」「靜物」等の著書の外、小説「靜物」「獨り見た夢」

評論「創作月評」隨筆「論理屋の驢馬」等の作がある。現に某協會の主事をしてゐる。

現住所 東京市本郷區彌生町三番地トノ四十七森方

首藤石眠

シユトウセキミン(詩)

仙臺藩士知信の長子で藩儒佐久間晴岳翁の姪、文久二年十二月二十七日生れ、夙に翁の家塾に學び詩文をよくし石眠と號した。年十七の時東遊し後七十七銀行及其他の銀行に就職したが座右常に詩書を携帶して詩作に耽つた。幾もなくして商業視察のため米國に赴き歸朝後第一銀行の四日市支店長八卷道成に就いて實業に従事し、轉じて久次米銀行に入り、三十一年夏宛町に店舗を設けて株式仲買業を開き久次米銀行支配人を兼ねて其業に従事し、閑餘を以て雅懷を養ひ、詩文を以て唯一の慰樂としてゐる。

現住所 東京市日本橋區兜町三

庄司瓦全

シヨウジガゼン(俳)

明治七年十一月十五日東京市淺草區花川戸町に生れ、二十九年鐵道に従事し臺灣總督府鐵道部に轉任して、諸役を経て助役、驛長となり、驛務巡視員、運轉係、常務係等に歴任し、四十四年病氣の爲退職した。大正元年三月東京に歸り、都新聞社營業部に勤務、編輯部に轉じ、現に校正部主任を勤めてゐる。氏の父は蟹友と號して俳句をよくし別に墨西居、江東窟、無腸老人等の號を有し、美濃派の古老時雨庵古笠宗匠の門人である。氏も亦俳句をよくして「ホト、ギス」「曲水」「雲蹤」等に寄稿し、都新聞の俳句欄を擔當してゐる。著書には「武藏地名句集」一部あり、餘技として四條派の畫を學び、易占を習ひ、觀世流の謡曲をよくする。

牡丹の札や藁駄がにぢり書き
目覺めけり牡丹崩ると妻が聲
雨風に堪へし牡丹や今は散る

客も無く庵の牡丹や日頃經る

去年呉れし牡丹見に行くや友の家

現住所 東京市麻布區筈町五二

庄田鶴友

シヨウダカクユウ(畫)

名は常喜。明治十二年九月奈良縣柳生村に生れ、初め山元春學に學び、三十一年京都美術工藝學校繪畫科を卒業し、京都繪畫專門學校助教諭、京都美術協會特別會員となつた。文展へは第一回に「海邊」第二回に「秋溪」第四回に「暮雪」第五回に「耶馬溪の朝」第六回に「幽澗起雲圖」第七回に「宇治川上流のしゝとび」第八回に「暮れゆく秋」第九回に「閑汀園」第十回に「瀨峽の雨」第十一回に「月四題」を出して幾度も褒狀を得た。

現住所 京都市柳馬場竹屋町南

白井雨山

シライウザン(畫)

名は保次郎。元治元年三月伊豫國宇和島町に生れ

佛人アンシャルベールに就て彫刻を學び、後東京美術學校に入つて明治二十六年彫刻科を卒業し、三十四年九月歐洲に留學し三十七年三月歸朝して東京美術學校教授となつた。文展では第一回以來彫刻部審査員である。作品は三十八年東京彫工會で金賞、四十年東京勸業博覽會で一等賞を得、又文展へは第二回に「箭調べ」第三回に「瞑想」第五回に「千仞の壑」第六回に「便なき身」第七回に「面」第八回に「香川氏の肖像」「すゞし」等の傑作を出した。又餘技として漢詩を善くして誦すべきものが少くない。

月瀬看梅
幾曲梅溪十里長、尋春士女入仙鄉、
千山雪霽月無影、一路雨過雲有香、
冷艷幽姿爭窈窕、冰肌玉骨鬪堅剛、
此花放燁東方國、不許西湖獨擅場、
田園閒居漫吟
吾老謝簪笏、守拙隱田園、田園地不僻、
而無外物牽、虛室自生白、意境共蕭然、

學世界」編輯主任になつてゐる。
現住所 東京市外佐々木初臺五三四

故白河次郎

シラカワジロウ(評)

福岡縣士族白河太郎の弟で明治七年三月二日生れた。同三十年帝國大學文科大學漢學科を卒業して後神戸新聞九州日報大阪關西日報の各主筆となり又清國南京江南高等學堂總教習及早稻田大學講師に聘せられ號を鯉洋と稱し關西日報の客員となつた。大正六年大阪市より推されて衆議員議員に當選し立憲國民黨に屬して得意の政論を議政壇上に發表してあつたが、數年前年病死した。

故素木しづ

シラキシヅ(小)

本名は上野山しづ、明治二十八年三月北海道札幌に生れた。札幌高女校卒業後片足を失つた。森田草平氏の門に入つて「悲しみの日より」「美しき牢獄」等の短篇を出して新進女流作家の白眉と稱せられたが不幸病氣の爲大正七年二月歿した。夫

頼有寒厨裡、濁酒兼薄饌、日夕用自適、
聊得形神全、
現住所 東京市本郷區千駄木町一八五

白石實三

シライシツゾウ(小)

明治十九年十一月群馬縣安中町に生れ、早稻田大學英文科並に東京外國語學校露語專修科を卒業したるのち、田山花袋に師事して作の研究をしつゝ、學校教師を奉職したが、今はこれを辭して専心操觚に従事してゐる。長篇小説「返らぬ過去」「死なざる戀」短篇集「曠野」「悲しき微笑」紀行文集「武藏野巡禮」等の著の外小説「曙の歌」「志願兵の戀」「婦人科醫」「槍澤の小屋」「病兒をめぐりて」等の作がある。「武藏野巡禮」は巡禮探勝實に七年、具さに武藏野の自然を見、人を見、兼ねてそこに生起する土地、河川、都市、田園を觀察せる美玉のやうな新抒情文であつて、獨歩の武藏野と相對して一讀すべき名著である。もと雜誌「學生」の主筆をしてゐたが今は博文館の「中

上野山清貢氏は悲觀のあまり自殺をはかつたが遂げなかつた。女史創作の材料は大抵自己の境遇を客觀的に取扱つたものが多かつた。

白瀧幾之助

シラタキイケノスケ(畫)

明治六年三月兵庫縣生野町に生れ、初め岐阜縣出身の洋畫家山本芳翠、及び東京出身の華族洋畫家黒田清輝に學び、後東京美術學校に入學して三十二年優等の成績をもつて卒業した。後、米、英、佛に數年遊學し、巴里ではラファエル・コランに就いた。文展へは第五回に「裁縫」第六回に「肖像」第七回に「羽衣」第八回に「野村氏の像」第九回に「某氏の像」「收穫」「撫子」等を出品して高評を得た。「野村氏の像」は特に優秀のもので二等賞となつたものである。大正七年文展推薦に入選し大正八年三月支那に遊び再び歐米に渡つて研究するところあつたが折悪しく日本關東の大地震に際して匆匆歸國した。この行に於て氏はイタリヤではラファエロの壁畫の摸寫をやつて見、ボン

ペイの壁畫の寫眞をとつて色づけをし、各地のスケッチを多くやつてきた。同十四年帝展審査員となつた。

現住所 東京府下大森山王二八一〇

白鳥省吾

シラトリシヨウゴ(詩)

明治二十三年二月二十七日宮城縣筑館町に生れた。築館中學を経て早稻田大學英文科を卒業して長詩人となつた。詩集「世界の一人」「大地の愛」「幻の日に」「樂園の途上」「憧憬の丘」「共生の旗」「若き郷愁」の外「祭」「明治神宮參拜」「時代の映射」「世紀の囁き」等の詩作があり、評論集に「民主的文藝の先驅」「詩に徹する道」の外に「農民の生活の悲しみ」水門と農村の話等の評論文感想文があり譯詩集「ホイットマン詩集」等の著がある。氏は福田正夫氏等と共にあくまで民衆的庶民的立脚地に立つて、自由に近代の社會思想社會觀念を取入れ、自由に奔逸に表現する諸作は時に散文と異らないといふやうな北原白秋氏の揶揄的詰問を受けるのである。西條八十氏のあくま

四三〇

で高貴で氣品のある象徴的のものとは反對の色を鮮やかに示してゐる。「樂園の途上」は一九一九年以後滿二箇年間の詩八十一篇を輯め、内容によつて五分類し、詩によつて實生活の印象を自由に平明に表現しようとしたものである。

町の鐘

ごーん、ごーん、ごーんと鐘が鳴る。

南の丘の杉藥師の鐘が鳴る、

時ならぬこの鐘に

いままでの習慣から

町の人々は囁き交す、

「誰が大病でがすべね、誰だんべ。」

隣から隣へ聞き合はして

誰さんが大病だと判かる、

町のみんなは一錢銅貨を手にして

やつこらさと鐘の鳴る方へ

杉藥師の御堂の方へ急ぐ。

町の人が御堂に一杯になつて

蠟燭は花のやうに明々と點つてゐる、

一錢銅貨は一人分の蠟燭代なのだ、

みんなは大きい『自然』の前にぬかづいて

どうぞ病人が助かるやうにと祈る。

どん、どん、どん、と太鼓が鳴る、

花のやうな蠟燭はみんなの心のやうに揺れる、

みんなは心一つにして病人の爲めに

家に歸るを忘れて祈る。

現住所 東京市外雜司ヶ谷龜原五九

白濱

徴

シラハマチヨウ(畫)

長崎縣士族白濱久太夫の長男で慶應元年十二月八日生れた。明治二十七年東京美術學校を卒業して直に高等師範學校助教授に任じ同三十四年十一月東京美術學校教授に轉じて今日に及んだ。曩に圖畫研究として米獨佛各國に留學を命ぜられ、歸朝

後圖畫教科書を編纂して普通教育上に於ける圖畫

教授の改新に力を盡した。

現住所 東京市小石川區丸山五

白柳秀湖

シラヤナギシユウコ(文)

本名は武司、明治十七年一月靜岡縣氣賀町に生れ早稻田大學に入學してその文學部哲學科を卒業して雜誌「實生活」の主筆となつた。數多き著作の中で「親分子分」三部篇「大日本閨門史」「二千年六百年史」等はその主なるものである。

現住所 東京市芝區伊皿子町四二

故眞

海

シンカイ(俳)

通稱は長尾憲證といつて讃岐高松一成院に生れた。大川郡白鳥村眞言宗千光寺の住持となり、宗匠芹舎の門に入り、後還俗して専ら俳道に遊んで南無庵六世を繼いだ。大正元年七月十五日年五十三で病歿した。

新海竹太郎

シンカイタケタロウ(彫)

新海宗慶氏の息、明治元年二月五日山形市に生れ皆夢と號し、夙に漢字漢畫を學び二十五年彫刻を始めた。翌年小松宮兩殿下の肖像を彫刻し尋いで主馬頭の依頼を受けて名馬八聲及閑院宮殿下愛馬クログラス號を彫刻し二十七八年戦役に從つて戦功を立て三十二年北白河宮殿下の御銅像の元型を彫刻した。獨逸に留學して彫塑を學び、第一回以來文展彫刻部審査員となり、又、大正六年帝室技藝員に任命された。文展へは第一回に「あゆみ」露營」第二回に「ふたり」旅行」羅漢」第三回に「原人」第四回「黙」斥候」きんの棒」第五回に「鐵槌」一休和尚」一致」第六回に「戦捷紀念日」左丘明」姝女の熟睡」第七回に「價千金」嗚呼老矣」満足」第八回に「全力」勤勉」第九回に「釋迦八相」新兵」長袖善舞」第十回に「甲種合格」龍樹」第十一回に「圓滿」を出し、他に「北白川宮騎馬銅像」「南部伯騎馬銅

四三三

像」「團十郎銅像」「大山公銅像」等の作が何れも名作である。門下中原梯次郎、小野田寅之助等があり、大正八年帝國美術院會員となつた。現住所 東京市本郷區彌生町三

故春秋庵幹雄

シユンジュウアンミキオ(俳)

文政十二年奥州石川形見村に生れ、三森兼吉の長男で幼名を兼治と曰つた。夙に俳諧を好み仙臺の老臣寺島梅成、鈴木左竹等と交り、靜波と號し、斯道を修業し安政元年に江戸に出で惺庵西馬の門に入り幹雄の號を授けられた。其後益々研究努力益々斯界の先達となり、俳諧雜誌を發刊し、又俳諧の選者となり、遂に舊派俳諧の大斗と仰がれるやうになつた。二十六年天皇皇后銀婚式の盛事に際して墨畫群龜圖を献上して天覽に供するの光榮を得、四十三年十月十七日東京深川の自庵に逝いた。享年八十二、舊派の俳壇に於ては、其の勢や其角堂機一の師老鼠堂永機には及ばなかつたが一方の宗匠として多くの子弟を指導した。幹雄の

歿後は其の子準一庵號を繼いだ。

先づ神に仕へそめけり日のはじめ

一とせの罪消ゆるそやはつ鳥

月の出て見れば地を這ふ霞かな

八重山や聲か笈か時鳥

蚊喰鳥蚊も居ぬ空へそれにけり

旅人の先走りする千鳥かな

舊派といつてもこの邊の宗匠は明治三十年頃より以後は紅葉、松宇、知十、酒竹、小波、嗚雪等と相並んで俳聲其他の誌上で作句や俳論を出してゐたので、餘程新派に近づいて來たのである。

序に準一のをも數句載せて置く

二三分は白きさかりや梅の花

若草や千代の古みち年々に

旅人の安々行くや八重かすみ

開くにもちるにもけし一重かな

さみだれや米用意する山の庵

夜は旅も昔にかへる砧かな

風待つて居たやうに散る木の葉かな

新城和一

シンジョウウイチ(評)

明治二十四年五月十五日福島縣若松市に生れ、會津中學校及び第一高等學校を経て東京帝國大學文科大學に入り佛蘭西文學部を卒業し、爾來教職に在り傍ら創作評論等に筆を染めてゐる。創作には「暴風の心」「苦しみの中に歩め」翻譯ロマシローランの「信仰の悲劇」評傳「ドストイェフスキイの一生と藝術」其他の著があり近くの作に評論「世界主義の二方向」「文壇の二様の遊戯化」「唯一の女流作家」感想「モリエール」等がある。嘗て法政大學教授をしてゐたが現在は陸軍士官學校教授である。

現住所 東京市外千駄ヶ谷七八五

故進藤香塙

シンドウコウウ(詩)

近江の詩人、名は眞孝、別に蘆花、又淺水漁者と號した。文化五年に生れ幼より寺院に入つて得度し、天臺の僧侶となつて大津の鳴通寺に住職とな

四三三

つた。氏は天資疎曠であつて細行を顧みない。日々風流を楽しんで世事を忘れた。夙に梅辻春樵について詩を學び、當時の詩聖梁川星巖、服部慥齋、長岡懷山等と交つた。其詩平淡清夷白樂天の風があつた。多年「白鷗吟社」を設けて子弟に教授した。晩年瘦鶴樓に隠れ詩書に耽つてゐたが明治九年六月二十七日病歿した。享年六十九。著所に「香塢隱士詩鈔」「江南有別春詩」等がある。

進藤 進

シンドウスム(小)

明治三十一年五月二日愛知縣名古屋市に生れ、五歳の時上京して郁文館中學校に學び、のち「ボケツト少年」「中央新聞」「秀才文壇」其他の記者を勤め、大正九年八月「新公論」に處女作「泥濘」を發表後「友を捨てるまで」「就職前後」「改札の少年」「動搖時代」「夜風に吹かれて」「灯を慕ふ」「頤」等の短篇を發表した。目下文藝雜誌「文學世界」の編輯をしてゐる。
現住所 東京府下荏原郡駒澤村野澤二五六

神中糸子

シンナカイトコ(畫)

女史は舊和歌山藩士神中義次の四女で、文久三年十月生れた。明治十年の頃より西洋油繪に志し、陸軍畫學校教官野村内藏助に就いて研究し、此年工部美術學校に入學し、後小山正太郎氏について研究し、二十年十月私立明治女學校畫學教授を囑托され、二十九年之を辭し、爾來専ら西洋畫を以て業とした。十一會の會員となり、文展へは第一回に靜物を出品した。
現住所 神戸市兵庫湊町三丁目

ス の 部

吹田順助

スイタジュンスケ(評)

明治十六年十二月東京市牛込區に生れ、第一高等學校を経て東京帝國大學文科大學獨逸文學科を卒業して第七高等學校教授となり、大正十年頃文部

省海外留學生として歐米に渡航した。氏は教職の餘暇をもつてかの有名なる大著ブランドスの「十九世紀文學の主潮」へツベル作「マリア・マグダレナ」及び「ユーディット」「ミケロアンジェロ」の翻譯並にへツベル評傳等の著がある。嘗て蘆風と號して、有島武郎氏生前の親友であつた。山形高等學校教授。
現住所 山形市新築仲通

故末松謙證

スエマツケンチョウ(詩)

福岡藩士末松臥雲の四男で安政二年八月二十日生れた。幼時村上佛山の門に入り詩文を修學し、明治四年上京して近藤塾に入り學業大に進んだ。同八年大政官御用掛となり十二年英國に航し技藝士及法學士の稱號を得て歸朝した。後内務省文部省に歴任し二十一年文學博士の學位を受けた。二十三年福岡縣より選ばれて數回代議士となつた。二十六年以來法制局長官内閣恩給局長に歴任し日清戰役後韓國の財政を整理して功績があつて男爵を

授けられ二十九年貴族院に當選した。三十一年遞信大臣に親任せられたが幾くもなく宮内省御用掛となり韓國皇太子殿下の御教養係樞密顧問官に歴任し帝國學士院會員日本赤十字社常議員になつた。四十年功績によつて特に子爵に陞された。詩文に長じて號を青萍と稱し名聲をあけた。著書に「日本文章論」「英譯源氏物語」「支那古文學界史」等の外翻譯にも筆を染めて「谷間の百合」等の名篇を残してゐる。行文流麗大に世に行はれたものである。大正九年十月五日急性肋膜炎にかゝつて永眠した。享年六十六。

以扶桑木印贈玉池、隣以長句、

玉池先生心如玉、玉池幽樓倚修竹、
刀圭餘暇事翰墨、欲與仙客相徵逐、
三山縹緲不可覓、更將篆刻招清福、
數顆印材待良工、其色純黑與漆同、
云是扶桑木所化、此說傳於亡是翁、
物雖至微請休笑、得之藤公遺澤中、
以供先生清夜樂、鐵筆響知和竹風、

故菅原白龍

スガハラハクリユウ(畫)

名は元道、東京日本橋に居つたので白龍の外日本隱士の別號がある。羽前國米澤在、時庭村に生れ初め業を熊坂適山に受けたが殆んど獨力苦學一家をなした。明治二年上京して奥原晴湖と知り二年にして歸郷し、數年の後再び上京して日本橋に住した。美術雜誌「繪畫叢誌」に關係し、鈴木百年富岡鐵齋、平福穂庵、石川鴻齋、依田學海等と親交した。畫は寫生を主とした一種の印象派風のもので、一生を通じて山水に唐人物を添景人物として描かなかつた。人或は和臭があると言つたのもこれがためであらう。氏は寧ろ其の偏狹を罵つて傲岸たるものがあつた。明治三十一年五月駿河臺の居に於て年六十六で病歿した。

故須川信行

スガワノブユキ(歌)

有名なる歌人、近江の安曇川西萬木村の醫師清水貞吾の二男である。京都に出て須川檢校に養はれ

君不見刻字事業亦千古、韓蘇當年歌石鼓、終歲離齷齪奔利名、何若心與真人伍、先生應是列仙傳、中人手中龍蛇捲、起瀟勃之雲雨、森槐南はこの詩を見て、青萍氏の平生韓退之蘇東坡に私淑してゐることの尤も深きを稱揚してゐる。

最後の住所 東京市芝區西久保城山町四

菅 楯彦

スガタテヒコ(畫)

明治十一年二月鳥取縣に生れ、幼時より父菅直方に就いて土佐派の畫風を學んだ。後大阪に住して大正美術會、大阪美術會等の會員となり、大阪高島屋、三越、其他大阪で開かれた種々の展覽會に屢々出品してゐる。夫人は浪花の名妓として一世の嬌名を馳せた富田屋の八千代女史であり、八千代夫人も亦畫筆に親しんでゐたが十三年二月病歿した。

現住所 大阪府北區太融寺町

て醫を業とし、和歌を渡忠秋、小出榮等の諸大家に學んで盛名あつた。後御歌所長高崎正風男に知られ、明治二十五年京都華族向陽會の教師となり三十九年御歌所參候となり、四十三年寄人に陞任し、從七位に叙し、後明治天皇御製集編纂部を御歌所に置くに及んで其の委員に擧られたが、その業未だ成らないうちに大正六年十一月十三日歿した。年七十九。家集に常葉園歌集がある。

古にてらして今を仰ぐにもあまるは國の光なりけり(寄國祝)

ほとちかききれ戸も見えずふる雨に雲立ち續く天の橋立

故杉浦梅潭

スギウラバイタン(詩)

名は誠、徳川幕府の士であつて、壯年の頃武を勵んだが、また大橋訥庵に従つて文學を修めた。詩は横山湖山、大沼枕山に學んで大に進境を示した。幕府開成所頭取より目付、箱館奉行、静岡藩公議人、開拓判官等に歴任し、明治十年職を辭し

杉浦非水

スギウラヒスイ(畫)

氏は有名なる圖案及飾裝畫家で名は朝武。明治九

杉浦非水

スギウラヒスイ(畫)

十二年稻津南洋、石川櫻所、中澤機堂、佐々木支陰等と晚翠吟社を創始し、三十三年五月病歿した。年七十五。その詩晩年には頗る高華適逸、遺稿を梅潭詩鈔と言ふ、上下二冊ある。

賴政

善射一宵奇譽加、風流當日憶王家、妙詞卅字金刀似、漫向宮園剪紫花、

曉起折梅

曉風殘月影橫斜、何許春光到別家、一笑白頭情不淺、苦辛掃雪折梅花、

枕上聞子規

身似故山歸去客、綠陰四月吾心適、水晶花上雨晴晨、杜宇一聲殘夢白、

畫龍

在田戰野是耶非、潛伏超騰應有機、何者點睛通變化、一啼奮翼九霄類、

杉浦非水

スギウラヒスイ(畫)

氏は有名なる圖案及飾裝畫家で名は朝武。明治九

年五月松山市松前町に生れ、初め圓山派の川端玉章、洋畫家の黒田清輝に學び、後、東京美術學校日本畫選科に入り、三十四年卒業した。三越呉服店圖案部主任となり、四十五年、中澤弘光、山本森之助、三宅克巳等と光風會を起した。「非水圖案集」等の作がある。夫人翠子は有名なる閨秀歌人である。

現住所 東京府下下澁谷伊達跡一八五五

故杉 質阿彌

スギガンアミ(劇評)

有名な劇評及脚本家、通稱は諦一郎、岡山縣の人であつて、東京に出て郵便報知新聞記者となり、後東京毎日新聞に入り、移つて東京毎夕新聞に這入つた。その劇評頗る正鵠を得て居るといふので名聲があつた。明治三十九年岡鬼太郎、岡本綺堂、栗島狭衣等と文士劇を興し自ら熊谷、盛綱、實盛等に扮したが頗る好評を博した。又新舊俳優の革新を計り、脚本を著し、古名優の型を引いて俳優の技を評すること甚だ周到綿密であつた。歌舞

妓の名優でも其の試演は必ず先づ質阿彌を招いて其の批評を請ふやうになつた。大正六年五月十三日腦溢血を疾んで歿した。年四十八劇界の一大恨事とした。

杉 溪六橋

スギタニロツキヨウ(畫)

氏は山科言繩の三男、氏は三歳の時南都興福寺に入つて同寺中妙徳院の住職となつた。明治元年勅令によつて復飾し、二年三月堂上の列を賜はり、家號を杉溪と稱した。明治八年三月華族に列し、十七年七月男爵を授けられた。氏はこれより先き宮内省に出仕し、京都宮殿勤番、殿掌等になつたが、同じく二十三年七月貴族院議員となつた。又夙に畫を重春塘に、書を遠山慮山及小林卓齋に學び造詣甚深い。爾來宋、元、明、清、大家の遺墨を研究して、専ら南宗の正派を傳へて斯界に重んぜられてゐる。南畫にはもとより新舊あつて、松林桂月、小室翠雲、佐藤紫烟のやうなのは幾分新味があるが、六橋氏のごときは、故兒玉果亭、田

能村直入のやうに先づ和臭のない南畫、即ち舊い南畫とも言ふべきものであつて、従つて帝展には不向のものであつても、美術協會派の方のみを喜ぶ人には、この人のやうな作は大變嬉しがられる。

送田邊碧堂之支那

秋穀將游古鎬京、長風吹月度滄瀛、

李白王維今在否、詩人可少和晁卿、

雞冠花

臨春閣下種紅霞、玉樹當年拜寵嘉、

寫入畫圖秋更艷、雞冠花是後庭花、

壬戌歲朝

日出蓬萊紫氣高、賀正鳳闕簇仙曹、

春宮太子攝新政、爛似晨光照海濤、

題芙蓉圖

焜煜銀燈花繞廊、漢家天子對瓊觴、

此時醒得玉人醉、明月一天初夜霜、

氏は夙に六法に精しく、且つ有聲の畫又斯の如く妙である。氏の詩は字を惟はずして字に來歴あり

意を練り格を練り居然唐調を帯びてゐる。蓋し藝苑の翹楚である。

現住所 東京市麻布區新龍土町二二

故杉 聽雨

スギチヨウウ(詩)

舊山口藩士植木五郎右工門の次子、天保六年正月生れた。後杉彦之進の嗣子となつた。姓は平氏、名は孫七郎、幼名忠三郎、小輔九郎、又徳輔と稱し。後今の孫七郎に改めた。夙に詩賦筆蹟をよくし聽雨の名遠近に鳴つた。維新後山口藩權大參事に任ぜられ、廢藩置縣に際し、召されて宮内大丞となり、明治六年秋田縣令に轉じ、幾もなく宮内大丞に再任し、爾來諸官を経て皇后宮大夫兼内藏頭となり、二十年勳功によつて特に子爵を授け華族に列せられ、樞密顧問官兼東宮御所御造營局長等を経て遂に皇后宮大夫となつた。大正九年五月三日八十六歳で歿し東京立山墓地に葬られ、更に東山泉涌寺御陵下に塚を立てられた。詩は岡本黄石の教を受けることが多かつた。

奈良客中

鹿鳴何處夜山深、秋氣凄清動客吟、
一片誰憐三笠月、依然影在古池心、
嚴島作

華表彫廊潮自通、儼舟來拜古神宮、
月明疑雨潺々水、霜冷欺花樹々楓、
千疊閣開臨赤岸、五層塔湧挿蒼空、
低回憶起江公事、義戰曾留絕代功、
掃高杉東行墓二首

聞鷄起舞制機先、掃得陰雲天日鮮、
來弔孤墳空灑淚、落花啼鳥四十年、
嗚呼君是再生桐、倡義學兵韜略譜、
重掃苔墳共誰弔、香煙一縷女僧庵、
寸功も無く華族に列せられしやく(子爵)な
やつと人は言ふらん

自畫讚

天が下のゼントルマンは我なりと誇れる鼻に煤
の垂る見ゆ

生前住所 東京市麴町區平河町五ノ二二

杉村楚人冠

スギムラソジンカン(文)

名は廣太郎縦横又は楚人冠と號す。明治五年和歌
山市に生れ芝のユニテリアンの學校及國民英學會
を出た。後米國公使館に譯官となつてゐたが、三
十六年よりは東京朝日新聞記者として大に活動し
夙に文名をはせた。文は極めて暢達して少しもこ
だはらない。四十年社用を帯びて英國に行き、大
英遊記の著がある。氏は性質頗る情に厚く後進の
爲には出来る丈の盡力をしてやる人だ。變態心理
の研究文學士中村古峽は氏に餘程の恩を受けた
と云ふてゐる。「へちまの皮」「戦に使して」「最
近新聞紙學」「七花八裂」「厲人厲語」「弱者の爲
に」等の著書の外に數十篇の論説がある。楚人冠
氏の文は一種の筆致があるので青年の間に大層喜
ばれる。

前出「へちまの皮」の如きは東京の書肆至誠堂よ
り發行する大正名著文庫の第三編として出したも
ので、氏が學生、教師、官吏、新聞記者、歐米漫

遊等二十年間の實生活を描寫せるもので、機智と
警句とに富んだ隨筆である。

現住所 東京府下下荏原郡入新井宿

杉森南山

スギモリナサン(評)

名は孝次郎曾て南山と號した。明治十四年四月靜
岡縣小笠原郡南山村に生れた。金子筑水博士門下
の少壯學者として桂井當之助と並んで將來を囑目
されてゐた。桂井氏がベルグソンの主意論に没頭
してゐたが有爲の材夭折したのは惜しかつた。此
間南山は獨逸哲學に心酔し認識論の造詣を深くし
た。藤井健治郎博士の京大に拔擢された其の代償
の意味で文部省は氏を海外研究員に選んだ。獨逸
に留學した氏は大戦勃發のため命ながら英國に
逃げ延びカーライルやエマーソンやマヂニを讀み
耽つた。そして英文「道德帝の原理」を出したが
タイムズ紙は著者たる氏を「東方から來た偉大な
哲人」と推稱した。當時故ベンジャミン・キャッ
ド博士の「力の科學」が出て素晴らしい賣行であ

つたが氏の著書は之に劣らなかつた。智慧と暗示
とに富む氏の名著は光が東方より來ることを裏書
したとまで好評を以て迎へられた。歸朝後「人類
の再生」「新社會の原則」「社會人の誕生」を出し
て世に問ひ更に最近に於て社會國家への主張とし
て「國家の明日と新政治原則」を出した。この新
刊は五篇三十六章を貫聯して、智力に於て最も獨
創的であり、動機に於て最も奉公的である新精神
が現代を環境として組織的計統的に作用し發現し
てゐる。氏の所謂純全人格主義的、文化主義的、
社會的國家が全民衆の確實なる要求となり享有と
なるまではこの書の使命は特に重い。氏は尙各種
の新聞雜誌に時論を發表してゐるが内容の充實と
表現形式の新鮮とによつて我が國文明批評壇上儼
然たる大樹として仰がれ「日本のカーライル」の
推賞を受けてゐる。

現住所 東京市外代々木新町一

杉山一轉

スギヤマイツテン(俳)

名は一二、明治十年五月十五日泉州堺に生れ、關西大學を出て、辯護士公證人の書生となり、官吏を経て會社員となつた。初め正岡子規、内藤鳴雪、高濱虛子、河東碧梧桐等の諸家に就いて俳句を學び、後「ホトトギス」發行所の富士見町時代となつてからは、専ら虚子氏を師として句作三昧に入つた。氏の句は「日本新聞」「アラレ」「ホトトギス」等に投稿したが「新春夏秋冬」「明治百俳家」其他に掲載されてゐる。

竹の奥灯一つ見ゆる雪夜かな
乞食の子を産み落す枯野かな
つい立の大きいなるかな冬座敷
盗人の釣手切りたる蚊帳かな
現住所 堺市市之町西一丁十一

鈴木悦 スズキエツ (小)

明治十九年十月愛知縣渥美郡老津村に生れ、早稻田大學英文學科を卒業し、長篇小説「芽生」「誕生」翻譯「戦争と平和」の外、短篇小説の作が十

數篇ある。東京朝日新聞記者。
住所、震災前の住所 東京市京橋區瀧山町東京朝日新聞社内

鈴木燕郎 スズキエンロウ (俳)

名は留次郎、明治二十一年九月二十日東京市本所區横川町に生れ、高等小學校修學の後病氣の爲廢學し、三十八年鎌倉に療養中増田龍雨氏について俳句の添削を受け、盛に俳書を読み特に寶船、ホト、ギスに耽る。四十年最後俳諧草紙發行の當時渡邊水巴氏と往復し其の感化を受けたこと少くない。其の後「藻の花」同人となり今日に及んでゐる。氏の句は「俳諧草紙」「藻の花」「俳諧雜誌」「寶船」「ホト、ギス」等に投稿したが「藻花集」には其の句を多く見ることが出来る。
現住所 東京市本所區横川町二〇

鈴木花蓑 スズキハナミノ (俳)

明治十四年十二月一日愛知縣知多郡半田町に生れ

殆んど獨學を以て研鑽し諸國を浪々して俳句を作つてゐる。所謂ホト、ギス派に屬して未だ世評が高くなつて居らぬれども句作三昧に入れば大に熱中して眠食を忘れるほどの熱心家でもあるし着想表現ともに未來ある俳人と言はれてゐる。今ホトトギス誌に發表されたものゝ中から次に二三句擧げて見よう。

月の出や動き渡れる臙空
蓮の風立ちて炎天醒めて來し
天の川枝川出來て更けにけり
コスモスの影ばかり見え月明し
しかし氏がホト、ギス派にのみ立籠るをもつて満足しないのは次の句を見てもわかる。井泉水等の傾向に漸次接近するでは無いかと豫想される。
枯木鳥吹き離されて飛びにけり
現住所

故鈴木華邨 スズキカソン (畫)

名は惣太郎。萬延元年二月江戸下谷に生れ容齋派

の大家中島亨齋に學び、諸所の展覽會で屢々受賞し、日本美術協會、國畫玉成會、美術研精會、巽畫會等の會員となり、文展へは第一回に「平和」を出して直に三等賞を得、次いで「秋風」「群鴨圖」等を出し翌年日英博覽會に雨中渡船の圖を出品して金牌を授けられ、又宮内省御用品となつたことも頗る多い。大正八年一月三日年六十で歿した。

鈴木松塘 スズキシヨウトウ (詩)

名は元邦、字は彦之、自ら鱸松塘と云ひ、東洋と號し、房州の人であるが東京に出でて淺草に住し向柳原町に七曲吟社を開いて詩壇に貢獻するところ少くなかつた。明治三十一年十二月二十四日郷里那古に歿す。年七十六。房山樓詩はその詩集である。

扇頭小景
嶺雲斑駁乍陰晴、
昨夜山中盈尺雪、
繞砌幽泉凍不聲、
半空削玉一峰明、

春日雜興

透_レ簾微_レ月曉_レ猶明、
 悄_レ立欄干_レ傾_レ耳久、
 東臺看_レ花
 忽聽_レ梅梢轉_レ早鶯、
 此聲_レ宛似_レ去年聲、
 臺殿_レ參差_レ曉色分、
 萬花_レ隱約_レ如_レ無_レ路、
 芳山懷古
 滿林_レ香露壓_レ埃氛、
 中有_レ金仙躡_レ絳雲、
 青山_レ滿目_レ恨難_レ銷、
 猶有_レ殘僧守_レ蘭茗、
 陵樹_レ花飛_レ春寂寥、
 御容掛_レ壁說_レ南朝、

故鈴木松年

スズキシヨウネン (畫)

名は世賢、初は百遷と號した。

土御門家の流派に屬せる儒者であつて且つ繪畫に巧であつた鈴木百年の長男である。嘉永三年京都東洞院に生れ、幼より繪畫を父百年氏に學び、弱冠の頃洋畫を自修し、後京都畫學院に教鞭を執つたことがある。内國勸業博覽會及各展覽會等に審査員となつたことが屢々であつて名聲大に揚つた。晩年白川畔に大畫室を建て、鶴壽軒と名づけ

心院にある。

鈴木西湖

スズキセイコ (評)

本名は徳太郎、明治十二年一月靜岡縣伊東町に生れ、早稻田大學校の前身なる東京專門學校に入つてその政治科を卒業し、博文館に入つて「太陽」の文藝部主任となつたことがある。時事問題に關する多くの評論がある。

現住所 東京市外代々木山谷一六六

故鈴木泉三郎

スズキセンサブロウ (劇)

明治二十六年五月十日東京市青山に生れて文學を愛好したが、學歴としてあけるほどの學校は無い。十七歳の時文章家水野葉舟の門下となり詩歌文學についての指導を受けた。二十一歳の時戯曲家岡村柿紅氏について劇作を學び今日に至つた。其の作には「高橋お傳」「通夜する人」「債家の貢」「二人の未亡人」其他の作がある。大正十三年十月六日病死した。

其の門扉は筆墨と硯とを以て作つた。猶翁は終生の事業として我が國の畫聖を祭るために洛東永觀堂の邊りに建神堂を建設する計畫を立てたが、其の志望を果すに至らなかつたのは遺憾である。氏は日本畫界に於ける老大家であつて美術協會特別會員であつたが大正六年の暮胸部に疼痛を覺えたが漸次容態が悪くなつて遂に東洞院の自邸より洛東三條白川の畔なる畫室に移り加療したが七年一月二十九日腦溢血にて溘焉逝去した。享年六十九歳。或は七十歳。嗣子松遷家を襲ぎ門下には齋藤松洲、小西福羊、梶野玄山等の知名の人があつた。天龍寺の龍を描いて逸話を殘した。黒谷の光明寺には襖に大畫を殘してゐる。その規模の宏大と筆力の勁健とは後年必ず問題とされる傑作と思ふ。

墓は京都東山の一心院にある。

弟鈴木萬年名は世欣といつて夙く有名であつたが惜しいことには明治二十六年六月三十日年齢僅かに二十六歳で歿した。墓は松年と同じく東山の一

生前の住所 東京市外中野町西町三ノ七六八

鈴木善太郎

スズキゼンタロウ (小)

明治十七年一月福島縣安積郡郡山町に生れ、同地の中學校二年の時同級生及上級生と文藝雜誌を出し、十七歳で上京し早稻田大學に三年在學した、同級に小川未明、吉江孤雁の諸氏があつた。氏はまた東京音楽學校選科に二年間在學した。同級に本居長世、澤田柳吉の諸氏があつた。その後巖谷小波の紹介で横須賀の官廳に勤め、松居松葉氏の推薦で明治座の作者部屋に入つたこともある。廣津柳浪の紹介で近事畫報社に入り國木田獨歩氏と知り、二十二歳の時田川大吉郎氏に知られ都新聞社に入つて初めて新聞生活には入つた。かくして十数年の間都新聞、國民新聞、東京朝日新聞等に入つて新聞記者生活を續けたが、今は新聞社とは全然關係を絶つて創作に従事してゐる。小説集「幻想」「暗示」長篇小説「山莊の人々」童話集「迷ひ子の家鴨」「たんぼの家」等の著作の外、

感想「劇場協會の印象」「モナコを過ぎて」「ローマの裏町から」評論「光線の幕其他」等を發表してゐる。近年貿易商セール・フレザー株式會社に勤め、舞臺藝術視察のため歐米各國に遊んだ。現に鈴木合名會社社員である。

氏はあまり知られて居ないやうであるが、國民新聞時代に帝劇の脚本懸賞募集に應じて一等に當選し、又松竹合名會社の脚本懸賞募集にも應じてこれも亦一等當選の榮譽を荷つた。これによつて見ても氏が筆の人として相當に恵まれてゐることは明である。尙ほ氏は紳士的の風格があつて放縱自恣の文士と自ら選を異にし、實に規律ある生活を營んでゐるので、その多作能力もすばらしいものである。

現住所 東京府下北品川一本木三四五

薄田泣菫

ス、キダキユウキン(莖)

名は淳介、明治十年五月十九日岡山縣淺口郡連島町に生れ、殆んど獨學自習によつて新詩人新文士

となつた。詩集「暮笛集」「ゆく春」「二十五弦」「落葉」「白羊宮」「子守唄」等の外近來は「茶話」といふものを書き、尙續いて「新茶話」を出したがいづれもユーモアに富んで面白い作のみである。一體輕快なユーモアの作品に缺けてゐる日本の今日このやうに上品でしかもこのやうに輕快な諷刺諧謔にとんだ作品のあるは確かに日本の純藝術界にとつて嬉しいことである。

氏の詩については、明治文藝史の作者は氏を稱して「全く古典派の舊思想に固まつてゐるから頭腦は改まらないながら、歌ひ方に於ては渠も最近の潮流にふれるものを見つけようとしてゐる。」と言つてゐるも、生田春月氏は「技巧に囚はれて天真を失つたのが泣菫氏の詩風の大缺點です。耳遠い古語を復興したなどは感心しません。が、藤村氏の作より新しい感情を巧妙なる措辭に托したところは學ぶべきものがあります。」と批評してゐる。

公孫樹下にたちて

あゝ日は彼方、伊太利の

七つの丘の古跡や、

圓き柱に照りはえて

石床しろき回廊の

きざはし狭に居ぐらせる、

青地襪の乞食らが、

月を経て來ん降誕祭

市の施物を夢みつゝ、

ほくそゑみする顔や射ん。

あゝ月は彼方、北海の

波の穂がしら爪じろに

ぬすみに獵る蟹が子の

氷雨もよひの日こそ來れ。

幸は足りぬ、と直むきに、

南へかへる船よそひ、

破れの帆脚や照らすらむ。

こゝには久米の皿山の

嶺ごしにさす影を、

肩にまとへる銀杏の樹

向脛ふとく高らかに、

青きみ空にそよりたる、

見れば鎧へる神の子の

陣に立てるに似たりけり。

(後略)

現住所 兵庫縣武庫郡西宮町字川尻

故鈴木忠孝

スズキタダタカ(國)

有名なる國學者であつて松園と號し、文久二年十月一日鳥取市吉方町中土手に生れた。鈴木忠貫の長男で幼名は鐵彌と言ひ出雲松江の人香西藤右衛門、號を松聲園といふ人に就いて國學を修めた又鳥取變則中學校に於て英語を學び、明治十八年國語教員檢定試験を受けて合格し、後鳥根縣松江中學校の國語教師となり、次に鳥取中學校に轉じ、廿六歳の時名古屋の愛知縣尋常中學校に轉任し、在勤十年の後鳥取中學校に歸り、僅かに一年程で東京に出で爾來成城學校、國語傳習所、正則英語學校豫備校、東洋商業學校、跡見女學校等に教鞭を

取り旁ら大八洲雜誌に筆を執つた。氏は性質剛直深く萬業集を敬し、景樹等の歌風を排し「難桂園一枝」の著を公にした。大正七年六月廿日根岸の寓居に於て年五十七で歿し、市外上高田光徳院に葬つた。

故鈴木長吉

スズキチヤウキチ(鑄)

有名な鑄金家で帝室技藝員、叔父岡野東龍齋の高弟で壯年時代起立工商會社鑄金部長となり明治廿九年帝室技藝員に擧られ、其作品は世界の賞翫する所となり英、佛博物館等にも陳列せられて居るが、殊に我帝室博物館にある山水圖大花瓶の如きは實にその大作である。大正八年一月年七十二歳で病歿した。畏しくも其筋よりは祭奏料として金幣を賜はるの光榮に浴した。

鈴木東山

スズキトウザン(詩)

名は丈之助、奥州會津藩の人、幼少より學を好み藩學日新館に入つて學び、維新の戦に従ひ、後藩

の移封と共に一時斗南藩に行き再び會津に歸り大に勉學して判官となつた。現に七十歳の老齡をもつて尙矍鑠として辯護士の事業に従ひ傍盛に漢詩文の創作應酬に熱中してゐる。「靜齋記」「後江口子原書」「乃木大將論」「獎士策」「不關焉堂記」「記宮島茂市及高田金藏事」「昨夢集序」「謝枋傳」「題髮婦獨嘯圖」「書節宇龜山先生手翰集後」「介壽倡玉集」「撒餅者言」等の外其作甚だ多い。現住所 神戸市中山手通

故鈴木百年

スズキヒヤクネン(畫)

京都の人。名は世壽、字は子孝、俗稱は圖書、大椿翁と稱した。初め父に學び、後小田百谷の畫風を慕ひ、又古畫に就いて獨學し、諸方を歴遊して一家をなし、山水をよくして一方に覇を稱し、京都府立畫學校の教員となつたことがある。明治二十四年十二月東京に於て年六十八で逝いた。其子に松年があり、又門下に今尾景年、久保田米僊等がある。氏の父は圖書と言つて元播州赤穂在の人

であるが中頃京都に出て土御門家に仕へ、餘技として南畫をも描いたのである。

明治二十四年十二月二十六日年六十七で病歿した

鈴木豹軒

スズキヒョウケン(詩)

名は虎雄氏は新潟縣の人、儒者鈴木桐軒の裔である。東京帝國大學文科卒業後暫く臺灣に渡り後東京高等師範學校教授となつて漢文典を説き支那文學史を講じた。後京都帝國大學文科助教授となり終に教授に進み文學博士の學位を授られた。謹嚴篤實な學者で古詩體の漢詩をよくしました根岸派の歌人である。夫人は日本新聞主筆で有名な論說家陸羯南の女である。現に京大に於て支那語學支那文學第二講座擔任として聲名がある。

蓬萊島

君不見蓬萊島、萬古見扶桑、上拂青天陰地、樓宿雙鳳皇、碧海彩雲滅、紅日上朝岡、宮殿玲瓏樓閣出、白玉欄干金爲廊、樓中仙人睡未覺、枝上棲鳳夢尙樂、陰風自西來、飄

々金銀臺、有鬼面濕緒、猩紅染裂腮、雄劍揮若電、欲屠風皇胎、彩頸望在眼、已攀若木枝、天鷄一唱鬼膽沮、仙吏縛之投囹圄、縛之斬之鬼亦多、嗟々奈汝惡鬼何、大正丙辰三月奉命游學支那臨

發述志

崦嵫龍戰日、礮馭風鳴時、衝命踰春浪、學文尋絳帷、風雲連絕域、雨露拜丹墀、跋涉勞何厭、江山助或隨、揚休俟雅頌、敷澤屬咎夔、須體管公訓、且攜晁臨辭

將辭燕京南行

客裡又爲客裏遊、蕭然行李發并州、江南他日扁舟夢、應繞薊門煙樹秋、現住所 京都市上御靈前

鈴木三重吉

スズキミエキチ(小)

明治十五年九月二十九日廣島市猿樂町に生れ、廣島中學、第三高等學校を経て東京帝國大學文科に入つてその英文科を卒業した。ホト、ギス派の寫

生文より出た作風とロマンチックな空想、病的な情緒等を混じたやうな一種美しい作が多い。文章は律動的で、色彩が濃く屈撓性の多い、氏獨得のものである。「三重吉全集」としての短篇「瓦」「赤い鳥」「黒血」「小猫」「女」「千鳥」「霧の雨」「金魚」「櫛」「八の馬鹿」等十三種長篇「桑の實」「小鳥の巢」の外ゴロキイ作「懺悔」の翻譯及び「世界童話集」の「黄金鳥」以下「馬鹿の小猿」に至る十五篇及び「古事記物語」「救護隊」等の著がある。漱石の門下生として創作界に雄飛りてあつたが今は童幼の爲にお伽やうのものばかりを書いてゐる。嘗つて中央大學の講師をしたことがある。童話雑誌「赤い鳥」主幹。

現住所 東京府下高田町三五七二赤い鳥社内

須藤 鍾一

ストウシヨウイチ(小)

本名は莊一、鍾一は其の號であり、又搖曳とも號する。明治十九年二月一日島根縣能義郡比田村に生れ、米子中學を経て、早稻田大學英文科に入り

明治四十三年に卒業した。爾來報知新聞社に入つて記者となつたが僅かに一ヶ年ばかりにしてこゝを辭し、大正二年博文館に入り婦人雜誌「淑女畫報」の編輯に従事し今日に至つた。創作集「傷める花片」「愛憎」「勝敗」長編小説三部作「人間哀史」等の著書を發行したる外、小説「提灯」「死顔の傷」「鬼肉」「穴守の宿」「秘密の園」戯曲「休憩時間」「山怒る」等の諸作を「文章俱樂部」「早稲田文學」「都會人」「鈴の音」「文學世界」其他の新聞雜誌に發表してゐる。「死顔の傷」の如きものを見ても、奇怪至極な非現實的な話でありながら、それが可成りに立派に描き出されてゐて丁度ポオの作品に見るやうな幻想の勝れてゐるもので將來文章の技巧と相俟つて異常なる優秀の作品を示すことと思はれる。

現住所 東京市外大井町四四八四

故須藤 南翠

ストウナンスイ(小)

氏は舊宇和島藩士須藤但馬の三男、安政五年十一

月生れた。通稱は光暉、南翠は其號である。夙に

東京に出て流離多年、明治十一年有臺世新聞發行に際し、これには入つて記者となり始めて文壇に立つた。十五年同新聞發行を禁止せられ、更に開國新聞を興す。氏は紙面の主管となり傍ら小説を著し、後改進黨新聞と改め、また文章變革の機運を迎へて「綠翠談」を著した。新聞紙上此種の小説を掲げたのは蓋しこれが嚆矢である。二十二年の頃同好會を組織し、雜誌新小説を發刊し、二十四年故あつて改進黨新聞を退いた。しかし尙ほ小説の寄稿はしてゐたが、二十六年に至つて大阪朝日新聞社の聘に應じて再び操觚に従つて専ら同社の文藝記事を擔當した。樗牛嘗て氏を評して「南翠はリットン卿の小なるものか。其の時と共に推移して文藝思想を改易したるの點に於て、其の歴史小説罪惡小説、世話小説、冒險小説の作者なることに於て、其脚本作者となりたることあるの點に於て又其の俗間に多數の愛讀者を有したるの點に於て酷だリットンに似たるものあればなりと言つたこ

とがある。

後大阪朝日新聞社會部長となり、辭職して四教祖傳を著し又土居通夫傳紀纂中大正九年二月四日年六十三歳にて大阪で歿した。

セの部

關口 文象

セキグチブンゾウ(川)

氏は明治三年九月三日東京小石川區戸塚町に生れ小學卒業後哲學館に修學し、日清戰爭中從軍したることがあり、東京府立第三中學校其他に奉職して、多くは俸給生活の餘暇をもつて川柳を嗜み、明治三十七年九月金子金比古、宮崎春亭等と共に川柳研究會を起して月並會を開催したが目下は中止の状態である。高木角戀坊、阪井久良岐、金子金比古の諸柳家や木版の名匠伊上凡骨等と往復して斯道を楽しんでゐる。

藁で手を拭き／＼詫びる油賣

徐ろに首を仕上げる藝者町
ホト、ギス啼きやあ米でも下るかい
問題を解けばエコールパンとなり
現住所 東京市小石川區戸崎町四五

關澤霞庵

セキサワカアン(詩)

名は清修、有名なる東京の詩人であつて、隨鷗吟社の補助擔當客員として詩壇に盡すところ少くない。その作詩は隨鷗集や太陽其他の雜誌に發表されてゐる。

哭 槐南先生 (余以先生病逝前二日復病眼疾困濛不便閱韻書閉目又手追懷往事僅寫心象句未暇爲推敲語亦無倫次哀感之情見于詞)
終使吾人斷盡腸、 玉樓待記大文章、
誰生才復奪才矣、 欲以無情訴彼蒼、
青山咫尺黯雲遮、 靈柩蕭々素纛斜、
一笛有聲絕交路、 春風併落梅花、
宮府歷官勳績深、 名聲不啻動詞林、

病床嘯救大醫訪、 更見皇恩賜賻金、
戊午元旦
六十今朝加五年、 詩書依舊結清緣、
春風不啻梅花上、 吹到明窓淨几邊、
現住所 東京府下千駄ヶ谷原宿一七〇ノ一六

關根正直

セキネマサナオ(國)

東京の人關根七兵衛の長男で萬延元年三月三日生れた。明治十九年東京帝國大學古典講習科圖書課を卒業し古典學者として其の名を馳せ華族女學校教授學習院教授等に歴任して東京女子高等師範學校教授となつた。四十二年文學博士の學位を授けられ有職故實についての權威である。大正十三年六月東京女高師教授を退いた。
現住所 東京市本郷區森川町一

故關根默庵

セキネモクアン(劇)

本名は金四郎、文久三年江戸に生れた。父は有名なる劇道の大通人として知られてゐた關根只誠翁

であつたから、少年時代一時實業に就いたが好める道とて遂に身を劇界に投じ數年の間大阪に在住したこともある。歸京後盛に文筆を弄して森田思軒、幸堂得知、櫻庭篁村の諸家と共に所謂根岸派の文士として知られた。川上晋次郎が新派劇を興した時は大に斡旋したが、後に故田村成義氏に親近して其の參謀となつた。同氏の歿後市村座を引退したが尙斯界は勿論活動寫眞界にも關係を有してゐたが大正十二年大震災に老軀で露營數日に及び、心身過勞の結果遂に永眠した。享年六十一。氏は考證該博であつて、「演劇大全」「明治劇壇五十年史」「藝苑講談」等數種の著作がある。「講談落語今昔譚」は震災の前日完成したが上梓されぬ。東京女子高等師範學校教授文學博士關根正直氏は默庵の實兄であつて、これまた故實有識の造詣に於て我が國有數の學者である。

故雪中庵雀志

セツチユウアンジャクシ(俳)

氏は春秋庵幹雄と同時代に、老鼠堂永機に次ぎ春秋庵幹雄と略ぼ五角の勢を有した俳人で、通稱は齋藤銀藏と言ひ、先代梅年の後を承けて庵號を繼いだ。大層多くの門弟を有してゐたが、明治四十一年病歿した。杉浦宇貫は其の後を承けて十世雪中庵となつた。雀志の句に
鶯や初音のあとも司鳥
鏡着ぬ御世目出たけれ謡初
輪柳のとけてめでたくかしく哉
獅子の兒の眠こそくる胡蝶かな
夏瘦せや玉磨かねど美しき

瀬戸義直

セトヨシナオ(譯)

四五三

名月や芒は無くて船の中
 生きた遣うた果や花紙衣
 戀といふ曲もの去りて雪寒し
 といふのがある。永機、幹雄等の句に似て尙ほ一
 層舊派といふ味を覚えさせる句が多い。尤も中に
 は

蟬時雨比叡にも風の無き日かな
 などになると小波山人紅葉山人などの句より新し
 味がある。こんなものも多少はあつた。雪中庵十
 世杉浦宇貫の句

橙や轉けぬ丸みのおのづから
 春風や笠いたゞくは誰が嫁子
 滞る節々もなし春の水
 おもしろや雪舞ふ中に梅の花
 五月雨の天補はん石もがな
 月も實の入りし丸みや月の秋
 など、月並調のものが多い。

(俳統)

雪中庵一世 二世 三世 四世
 服部嵐雪―櫻井吏登―大島蓼太―大島完來―

五世 六世 七世 八世
 大島對山―山口権陰―村井鳳洲―服部梅年―
 九世 十世
 齋藤雀志―杉浦宇貫

千家元麿 センゲモトマロ(詩)

明治二十一年六月八日東京市麴町區元園町に生れ
 慶應義塾幼稚園、東京府立第四中學校を経て慶應
 義塾大學に學び、白樺一派の中に加はつてよい作
 を發表してゐる。氏は本當の意味で天才詩人と
 ふべきで、殆んど比すべきものが無いやうに武者
 小路實篤氏も言うてゐたが、實に至言であつて氏
 位實力のある詩人が少からう。詩集「自分は見た」
 「虹」「麥」「野天の光」「炎天」「夜の河」戯曲短
 篇集「青い枝」「新生の悦び」「冬晴れ」等の作が
 ある。「炎天」は詩人叢書第七篇で「夜の河」は約
 百五十篇を輯めたもの、普通人の見出し難い處に
 も、新たな崇高な詩美を見出して詠んでゐるのは
 確に氏の技術である。「夕暮」「電車の中で」「私に
 も」などにはそれがいかるもはつきりあらはれて

ゐる。氏は詩の雑誌「詩」を發行する計畫を立て
 た時白樺同人の武者小路實篤、長與善郎、岸田劉
 生、小泉鉄の四氏は發起人となつて該誌の發行を
 補助する金を募集した。これで見ても千家氏同人
 間に於て詩的天分を認められてゐるかがわかるで
 あらう。

勇ましい朝

朝が來た朝が來た
 歡ばしく勇ましい朝が來た
 家々は競つて戸を開いて
 美しい光を迎へて居る。
 戸外では寒い風が吹いてゐるが
 喜び勇んだ人々は
 清い空氣の中に飛出して
 一人一人自分の道を正々堂々と學んでゆき
 緑の空は喜ばしく開け
 太陽は光を強めながら
 高く／＼登つてゆき
 暖くなつた地上からは

威勢のいゝ喜びの聲が
 太陽の光と共に
 だん／＼強まり高まつてゆく。
 冷い風はいつか消えてゆき
 明るい歡びは天地に漲り
 道ゆく人は夥しい群となり
 人々の顔は輝き

その眼は美しいものを見て居るやうに
 麗しく大きく清らかに見開いて
 深き慈悲溢れ
 希望の方へ勇んでゆく。
 オ、勇ましく美しい朝よ
 太陽はひとしく人々を照らし
 光を喜ばぬ人は無く
 天地は歡喜に燃えてゐる。
 現住所 埼玉縣飯能町中山赤澤方

ソの部

相馬御風

ソウマギヨフウ(評)

明治十六年七月十日新潟縣西頸城郡糸魚川町に生れ、同三十九年早稲田の文科を卒業した。在學中既に岩野泡鳴前田林外等と共に詩歌雜誌「百合」を發刊し詩人として名を知られた。三十九年第一歌集「睡蓮」を發行しついで「御風詩集」を公にして柔婉清麗の調を稱せられたが、後自然主義の影響を受け口語詩を唱導して詩壇に革命を惹起した。三十九年より島村抱月氏を助けて「早稲田文學」の記者となり敏感能文の論客として認められた。抱月氏文壇を退くやその後をうけて中村星湖と共に早稲田文學を主宰し早稲田派の中心として所論いつも文壇を動かした。或は「生の躍進」を説き或は「表的生活」の主張をなし、文藝を論じ思想を指導して一代青年の心をあつめたが、大正

四五六

五年の春一篇の告白「還元録」を残して郷里糸魚川に退耕し、眞生活の追求者として眞摯の努力を續けてゐる。文藝の方面では良寛の研究を發表して斯界に益を與へた。著書には「自我生活と文學」「黎明期の文學」「凡人淨土」「毒藥の壺」「第一步」翻譯トルストイの「アンナカレニナ」「我が懺悔」「人生論」「性慾論」「ハジムラト」ツルゲネフの「その前夜」「父と子」「貴族の家」等の外近く公にした「良寛和尚詩歌集」「良寛和尚遺墨集」「凡人淨土」「田園春秋」「砂上漫畫」等數多くある。尙最近發表した作には評論に「愚庵和尚の一生」「生の寂味」隨筆に「爐邊雜記」「綠蔭漫語」「對山雜記」の外「其の後の歌」の題下に多くの歌を發表して氏の胸に湛へてゐる盡きざる詩の泉を示してゐる。氏は亦俗曲の方にも筆を染めて今日流行せる蓄音器のレコードに這入つてゐるものも少くない。書も良寛を學んで短冊などに書く文字はこの頃すつかり良寛和尚となつてゐる。秋はわれ神にかあらん朝夕にひろきあめつち人

にくみせず

淺草やおされおさるゝ人ごみの中にて聞きしほ

ほつきの音

山國の初秋寒や乗合ひのいとむつかしき渡し舟

かな

現住所 新潟縣西頸城郡糸魚川町

相馬泰三

ソウマタイゾウ(小)

明治十八年十二月二十九日新潟縣中蒲原郡庄瀬村に生れた。東京開成中學を出て早稲田大學英文科に入り半途で退學した。夙に新進作家として知られ、その文章の靈活とその情緒の新鮮とを以て稱せられたが、暫く筆を絶つて休養し、大正五年後半期頃より筆硯を新にして起ち、短篇「夢と六月」「隣人」「鹿子木夫人」「野の哄笑」長篇小説「荆棘の路」「愛慾の垢」童話集「陽炎の空」等の著があり最近の作に小説「耳火事」「蜘蛛」「誰がかひなに」「或る一族のこと」「とんぼの子」「獨りぼつち」「アメリカへ發つ前」「SとT」「旅館で」

タの部

大藤治郎

ダイトウジロウ(詩)

明治二十八年二月東京市本所區徳右衛門町四十番地に生れ、京華中學卒業後、貿易商店員として實業界に入り、大正六年渡歐しドイツ、ベルギー、フランス、イギリス、インド、及び南亞弗利加に出張したが、獨逸に行つた時は滿一年の間留置された。しかしかゝる憂き目に遭つたといふことが詩人としての氏の想情を豊富ならしめるに好都合であつたことは言ふまでも無い。大正九年歸朝の

四五七

後雑誌「東方時論」を發行して、東亞の時事を論じ、又詩の雑誌「詩聖」を編輯して諸家の作詩や詩論を掲載して詩壇の發展をはかり、又他の新聞雑誌に詩論や創作を頻りに出して大なる奮闘振りを示して居る。著書には詩集「忘れた顔」があり近頃發表の作物には評論に「ある日の詩論」「最近の詩集から」「最近の詩に向つて」「シエリーの遺詩稿」「シエリーの懊惱」「シエリー死後百年」等がある。

銀座

米松とペンキの間を春が、もうもうと流れる

「銀座だ、銀座だ」さう天帝は慘酷にも信じさせる

灰が一降りごとに 忠實なる人々の胸を暖める
オホン オホンと それは米松のひれわたる音である

陽春

草が萌えて来て 風が吹いて来て

登音が趁つて来る 松の枝に、春は鳴つてゐて
一家三人の眸へ空が光つて、太陽は、こともなげに

「沈黙」を降りそゞぐ

負擔

海をみてゐて その音をきいてゐて

「悠久」を知る代りに このなまけ者は

「瞬間」たけしか記憶にない 昔の詩人たちよ
僕はいま、戸數割といふ一恐ろしい税を考へてゐる

情春

僕は、松林の間から見た あの明るい海を知つてゐる

僕は庇間の蜘蛛の巢から見た あの薄暗い空を知つてゐる

そして僕は一人々よ 人間の瞳の中から見た

あの「不満足」を充分知つてゐる

現住所 千葉縣夷隅郡大原町濫内

故田 岡嶺 雲

タオカレイウン（文）

通稱佐代治、高知縣の人、初め東京に出で、水産傳習所に學び、卒業後東京文科大學に入つて二年研學した。氏もと常人と異つて尋常の文學士となることを好まない。大學選科に移つて漢文科を専修した。卒業の後「青年文」を發行して成功せず。一時岡山縣津山中學校教師となり、更に新聞記者となつた。いばらぎ東亞新報等に筆を揮ひ尋いで清國に航して江蘇學堂に教授したが病氣のため歸朝した。明治三十三年北清事變の起つた時九州日報社に在つたが渡清して福島安正將軍と事を論じて合はないため歸朝し、再び岡山へ赴いて中國民報の記者となつた。三十八年復た上京して雑誌「天鼓」を發行したが失敗して窮迫甚しくなつた。そこで再び江蘇學堂に赴いて志を得ないで復歸朝し、爾來落魄其極に達し赤貧洗ふがやうになつた。四十年脊髓病に罹つて日光に病を療し、著述によつて漸く生活した。兄これを助けやうとし

故多賀庵由池

タガアンユチ（俳）

たが固く辭して受けない。遂に四肢殆んど自由を失ふに至つても尙著作を止めなかつた。大正元年九月七日四十三歳をもつて歿した。著書に「嶺雲搖曳」「霹靂鞭」「ちぎれ雲」「俠文章」「下獄記」「壺中觀」「數奇傳」其他藤田劍峯、笹川臨風、白河鯉洋、大町桂月等と合著にかゝる支那文學大綱及漢籍註釋數卷ある。氏の文は所謂熱烈火の如く意氣天に沖せんとするものがあつて、其の縦横の筆、奔放の氣溢れて「うろこ雲」「ちぎれ雲」其他數篇の文をなし、字々悉く其の肺肝より流れ出た文字でないものは無い。

廣島の俳諧師、勝見九郎兵衛と稱し、幼より書を寺僧に學び十四歳の時俳道に入り和切、雪頂、霞ト等について研鑽し、又高木松居に従つて經史を受けた。のち山陰山陽を跋渉して畿内に入り又北國に遊んだ。歸郷の後、春草園と號し俳諧の宗匠となつた。第五世多賀庵第五世歿して十數年の後

その名を嗣いだ。時に明治五年正月であつた。家業は製壘であつたが職餘机によつて或は作吟し或は選をなして夜の更けるのも忘れること少くなかつた。資性温厚人に接するに決して倨傲阿諛の風が無く、實に天真であつたから、人益々これを敬して門前俳句の添削を請ふもの堵をなしたといふことである。散策を好んで餘暇あれば名勝を訪うて風流自ら樂んだ。明治三十四年十月歿した。享年八十。著書に「龜の尾集」「家集」等がある。

高木角戀坊

シカギカクレンボウ(川)

明治九年七月三日東京淺草に生れ、三宅觀瀾の孫三宅道明に就いて漢籍を、春日圓穂に英學を、森如件齋に繪畫彫刻を學び、十五六歳の時より新聞雜誌に投稿し、廻覽雜誌を發行し遂に川柳作家となつた。青年の頃新派俳優の群に投じ又二年間踊の稽古をした。その後活版職工となり、勞働運動に關係し、嶋田沼南大井馬城等と共に演壇に立ち壯年の頃新聞記者となつた。そして中央、毎日、

電報、日本、國民、明治等の外多くの雜誌に關係し、其間に福原雨六氏と共に川柳を初めた。又霧垣夢文に、俳句は加納野梅に、漢詩は辻實讓、村田黄雲に、川柳は井上劍花坊について學び、現今では東京に六つ、地方に四つの支部、數百名の門下を有してゐる。尙派別で言へば、新派に屬し、小樽の氷原、大阪の小康、名古屋の新生、出雲の出雲草詩等に屬してゐる。草詩堂主、草詩堂主人は氏の別號である。

六甲の曉霧

霧の海大阪あたりチト汚れ

ですとませうで切れてゐる手紙

平舞臺ジャンコのやうな針の穴

現住所 東京府下巢鴨二ノ三五

高木背水

タカギハイスイ(畫)

名は誠一。明治十年九月佐賀縣に生れ、初め大野幸彦、堀江正章に就いて洋畫を研究し、後白馬會研究所に入つて益々其の技を練つた。三十六年、

滿洲、朝鮮、地方に遊び、三十七年米國に渡航してコロンビヤ大學に入り、三十九年卒業し、四十年より歐洲各國を巡遊して四十五年二月歸朝した。四十四年英國ロイヤル・インスティテュートに作品を出品し、文展へは第一回に「濱邊の松」第六回に「ウインザー橋の朝」第七回に「晩秋」を出して其の特技を示した。香水畫塾を開いて洋畫を教へてゐる。又太平洋畫會會員となつてゐる。

現住所 東京市麴町區永田町鍋島侯爵邸内

高倉 輝

タカクラキ(小)

明治四年四月十四日高知縣幡多郡七郷村に生れ、大正五年京都帝國大學英文科を卒業して後同九年まで同大學の囑托となり、爾來翻譯と創作とに従つてゐるが、翻譯に「心の劇場」戯曲に「女人焚教」小説に「蒼空」等がある。「蒼空」は近く出した長篇の小説であつて、幼い時から異國に育つて大學の語學教師として迎へられた語學者を主人公とし、其の語學には左程興味を有せぬがしかた

なしに倦怠の心で身をその教室に運んでゐる學生を副主人公としたものである。そして作者は後天的性格のいかに人の性格に於て重きをなすものであるか、人は他人の不幸に對してはいかに無關心であるか、従つて人生はいかに淋しいものであるかといふやうな一種の氏の教育觀人生觀等を現したものである。

現住所 長野縣沓掛

高桑義生

タカクラギセイ(文)

明治二十七年八月東京市淺草區猿若町に生れ、十年來雜誌の編輯に従事し、最近原稿生活に入つた。氏は五六の匿名をも用ゐて寄稿するので、雜誌の範圍も廣いが主として「少年少女雜誌」及び「娛樂雜誌」に投稿してゐる。氏は高桑姓の時は必ず義生の名を用ゐてゐる。

現住所 東京市板橋町六二八

故高崎正風

タカサキマサカゼ(歌)

氏は薩摩の人、有名なる勤王家で歌人である。天保七年七月鹿兒島に生れ、家世々島津氏に仕へた。父を温恭と言つて藩主の繼嗣を定めるとき奸黨の計にかゝつて自盡するの不運に陥つた。正風時に十六歳、士籍を削ぎ大島に謫せられた。氏三年の間島中にあつて酸苦を嘗め且つ讀書三昧に耽つた。後釋されて歸藩し益々學問に精進した。殊に歌道に興味をもつてゐたので有名な歌人八田知紀翁に就いてその指導を受け頗る造詣が深くなつた。幕末天下多事に際し氏は藩命を奉じて國事に奔走した。文久二年四月氏は有馬新七等藩主島津久光の命を用ひないで上京するのを探知したので之を久光に密告し遂にかの有名な伏見寺田屋の騷動を見るに至つた。三年京都の尊王攘夷論者が大和行幸攘夷討幕を企てた時、氏は會津藩士秋月胤永、廣澤安住等と謀つて遂に朝議一變し、三條實美卿等七卿の西下となつた。明治元年征討將軍宮の參謀と爲り、四年參議官に任じ尋で歐米各國を視察し、七年大久保利通が全權辦理大臣として清

國に赴いた時隨行し、九年御歌掛を十九年御歌掛長を命ぜられた。二十年男爵を授けられて華族に列し宮中顧問官、樞密顧問官の諸官を歴任して正二位勳一等に至り、四十五年一月二十七日薨じた。享年七十七。氏長く御歌所の長となつて一生詠するところ實に數万首の多きに達したが選擇して凡そ四千首を家集として家に傳へてある。又氏の歌風は所謂御歌所派と言はれ、もと桂園の流れを汲んだ點から舊堂上派に對して一種の新派であつたが、今日の所謂新派歌風より見ればもう時代から遠ざかつてゐるものとされてゐる。ことは毎年年勅題豫選歌の批評談を新聞雜誌によつて見ても明かにわかる。

み國にて見なれしものは久方の月ばかりなる旅の空かな

萬代の基さだめて樞原の大宮柱たてし今日かな
久方の空飛ぶ鳥もうらやまぬ車や人のつばさなるらむ
國民の赤き心を門毎にかゝぐと見ゆる日のみ旗

かな

源はなほ山吹のひとしづく國をうるほす富の小川も
富士がねを空にのこして鳥がなく東路遠く霞たなびく

正風翁の所長
時代の御歌所派歌人

香川景樹—八田知紀—高崎正風—
税所敦子

黒田清綱

高柴象外

タカシバシヨウガイ(俳)

名は貞雄、明治十七年一月二十日福井市豊島上町舊福井藩士族の家に生れ、中學校卒業後官吏、銀行員、會社員、新聞記者等に就職し、工業會社の支配人となつた。氏は十四歳の時福井市に於て老鼠堂門下の宗匠に就て發句の手引を得、のち「ホト、ギス」の發行を知つて之によつて新派の興趣を感じ、それを獨習しては佐藤紅綠氏に添削を受けた。其の後「日本新聞」「日本及日本人」等に

二十餘年の間投句し、或は他の選句をしたこともある。けれども後には海紅派に屬して其系統に屬する各俳誌に作句を發表してゐる。尙氏は「前置付俳句」の研究に潛心してゐることも特記すべきことである。氏の句は「日本新聞」「國民新聞」「舊毎日電報」「日本及日本人」「ホト、ギス」「海紅」等に投稿し、「春夏秋冬」「日本俳句抄」「明治選者句集」「明治句集」等に採録されてゐる。著書には十八歳の時に上梓した「俳句語彙」の外「前置付俳句集」及自選集句の「枯魚集」等がある。夫人和賀子も俳句をよくし、その號を千枝子と稱してゐる。

曉の月に田毎の氷かな
ぬば玉の夜の一方や火事明り
現住所 靜岡縣江尻海岸

高島九峰

タカシマキエウホウ(漢)

名は張輔、長州萩の人、宮内省圖書御用係を奉職し、傍ら詩文を嗜み、隨鷗吟社の客員であり大正

詩文の寄稿家として知られてゐる。大正十三年六月御用係を退き全く文人生活には入つた。従五位勳五等。氏の令兄高島北海は有名な畫家で前に文展審査員であつた。

明治神宮成謹賦

鬱葱靈木護崇祠、
夙復朝權恢帝業、
金天致祭千秋典、
聖德自爲神國鎮、

長門峽歌

阿武之川遠發源、
此裏奇觀世所罕、
吾家舊住此川上、
都門爲客久不還、
吾弟好畫愛山川、
今窮此境發其秘、
投資關途便游覽、
飛瀑深潭相接連、
天造靈奇誰狀得、

想見先皇龍鳳姿、
新頒大憲鞏邦基、
旭日騰光萬戶旗、
氷教黎庶頌明治、

萬山成峽一水奔、
未聞游客仔細論、
遙看水源疊碧嶂、
常憾峽間缺尋訪、
海外名勝亦着鞭、
長門峽名世始傳、
緩步可以涉重險、
白雲紅葉好點染、
吾雖未覩心先識、

殊喜探究因吾弟、且誇勝地在鄉國、
國府犀東氏は前詩を評して「典雅豊麗にして中に一種の神采を藏し、此を誦すれば神宮の莊嚴を想見すべし」と言ひ、館森袖海氏は後詩を評して賴子成の耶馬溪に於けるが如く、山水靈有らば當に知己を千古に驚くべし」と、氏は亦人格高潔で同人の畏敬するところである。

現住所 東京府下千駄ヶ谷原宿二〇二

高島北海

タカシマホクカイ(畫)

名は得三、嘉永三年九月長門國萩町に生れ、畫を父に學び、内外の博覽會展覽會に於て金銀銅賞を受けたること數回、明治三十年迄は山林専門の農商務技師だつたが三十六年より畫家として立ち四十年小室翠雲等と文展對抗の正派同志會を結び第二回より日本畫部審査委員となつた。作品は第二回に「本邦高山植物」第四回に「蜀道七盤關眞景」第六回に「積翠」第七回に「梅雨」第八回に「秋」第八回に「魚介」第九回に「峭壁摩天、斷崖

夾波」第十回に「富士の裾野」大正六年朝鮮金剛山に遊んで第十一回に「朝鮮金剛山四題」を出した即ち氏は明治四十一年の文展第二回から大正七年の文展最終の第十二回迄審査員を續け現在は日本美術協會の幹事であり最近には帝室技藝員の呼聲さへ高かつたほどの南宗畫の大家であるが氏は豫て過度の神經衰弱に罹り東京市外品川御殿山の自宅で靜養中震災後俄かに感ずる處あつて愈々東都美術界を隱退する事となり二三日前突如一家引纏めて郷里山口縣の長府に歸りそこで餘生を樂しむこととなつた、翁が美術界に現在の地位を占むる迄には幾多の波瀾と數奇な經歷とを持つてゐるが翁が畫壇に志しを抱くに至つたのは中年後の事で初めは農商務省の山林技師を奉職して常に山野を跋渉し日本アルプスがまだ世間に紹介されない以前から既に翁は幾度となくその高山を縦横に踏破してゐた日本全國の名山と云ふ名山は殆んど翁の足跡を印せぬ處はない位で其間翁は山嶺の美を會得し山靈の神祕を感ずるに至つて翻然彩管で之

が神祕を視さんと決心し明治三十年職を捨て、東京に移り美術家としてたつ事となつた。爾來數十年致々として研究の結果は遂に山嶽畫家として現代畫壇の權威となるに至つたが翁の終生事業は山嶺の研究にあつて最近においても七十餘歳の高齡にも拘らず畑仙齡氏と共に飛驒の山奥に籠つて深山の表現の研究に努力してゐた程であつて翁が東都の畫壇を去るの詞に自分は既に老境に入つて何等美術界に貢獻することも出来なくなつたから日頃憧がれてゐた郷里の名勝長門峽の近くに居を定めて靜かに餘生を送る積りであると。令弟高島九峰は有名な詩人である。

現住所 東京市麴町區元園町二ノ六

高須梅溪

タカスバイタイ(文)

名は芳次郎、明治十三年四月十三日大阪市船場に生れた。氏の自叙傳小説と言はれてゐる「無産階級に生れて」によれば、氏の父は破産し母はこの世を早く去り、小學校を中途で退學しなければな

らなくなり、遂に丁稚奉公に出た。のち早稻田大學の英文科に入り、こゝを卒業の後國民新聞、東京毎日新聞、二六新聞等にはいつて新聞記者生活をした。また「新評論」を主宰したこともある。少年の頃から筆を執ることが好きであつたが爲に、誰に習ふと言ふこともなく、少い時分から文章が上手であつた。嘗て徳富蘆花なども氏の文を読み其の人を知らなかつた頃、始めて面會した時の挨拶に「あのやうにうまい文章を書く高須梅溪氏は君であつたか」と、其の豫想よりも年が十歳ばかり若かつたので吃驚したさうである。著書に「蒼空」「日蓮上人及其殉教者」「平家の人々」「近松の人々」「源氏の人々」「西鶴の人々」「近代文藝史論」「江戸幕府衰亡論」「江戸時代」「平安時代」等の數多くあるが、何れも廣く讀者を以て居る。中でも最近の著書「近代文藝史論」の如きは、單に小説を小説としてのみ叙述しないで、時代思潮の基調をなす諸種の社會相を説くは言ふまでも無く、江戸繪即ち錦繪や狂言作者又は歌人俳

人等各種藝術の交渉をよく示して居るから、大層面白くもあり且記憶にも極めて便である。時雨るゝ日宿なき犬を憐みて芋粥やりし心さびしき
網島の秋の月夜に佇立みて小春治兵衛の戀惚ぶかも
その昔梅川おもふ忠兵衛が涙流しけん新町の秋
我橋幾度橋を渡りけんわが仰ぐ空に一片の月
打水のあと青々と風起ちて松の木の間に月仰ぎつゝ

現住所 牛込區西五軒町三五

鷹田其石

タカダキセキ(畫)

號を忘筌堂といひ有名なる日本畫家、明治六年六月六日富山縣下新川郡生地町に生れ、初め島崎其邸に就き後、橋本雅邦、川端玉章に學んで南北合派を研究し、東京美術學校に入つて二十五年九月その特別課程を卒業した。二十八年以來内國勸業博覽會、眞美會等で屢々受賞し、四十年一月、芝

である。
現住所

高田常齋

タカダツネトキ(畫)

増上寺飛雲閣天井及壁畫を描いて其の非凡の才を世に示した。大正七年一月東京で個人展覽會を開き、七十餘點を展覽し、爾來幾度も展覽會をして好評を博した。人物、花鳥、山水を描くを得意とする。氏は讀書家であつて宗教哲學の書を好んで耽讀してゐるさうである。

現住所 東京市小石川區大塚窪町二四

高田集藏

タカダジユウゾウ(文)

大正の親鸞と稱せられ日本のアウガスチンと呼ばれる著書、名利顯榮を求めず清貧と愛苦とに泣きつゝ、遇ふ程の人に人の道を説いて休まざる氏は固より藝術家としての作家傳に入れるはどうかとも思はれたが、藝術が偽り無き個性の表現である以上、氏の生活記録であり偽り無き體驗であるものを、しかもそれが詩のやうに美しい信仰のレコードであれば、氏の著書「聖痕」の如きは、西田天香氏の「懺悔の生活」や賀川豊彦氏の「死線を越えて」などと共に立派な藝術品と見なしたいの

名は常三郎。號を三島堂とも言つて、安政元年伊豆國三島町に生れ、山中松韻、村田香谷に就いて南宗畫を學び、又洋畫を中丸精十郎、清水東谷に學んだ。又後にシイブルト、ワグマン等に就いて學び終に常齋畫の一派をなした。明治二十八年十月、神奈川權現山に香雪館を設け本田錦吉郎、山本芳翠、原田直次郎、中丸精十郎、小山正太郎五姓田芳柳等と來往し日本浮上油繪の輸出に盡した。作品「小松宮殿下御肖像」は名作である。近年は南宗に洋畫の畫法を加へた一種の畫風を出しつゝある。

現住所 神奈川縣横濱市根岸町三二〇〇

高田竹山

タカダチクサン(書)

東京の書家、説文研究家。文久元年五月江戸に生

高田蝶衣

タカダチヨウイ(俳)

本名は四十平、明治十九年一月淡路國津名郡釜口村字里に生れ、早稲田大學にはいつてあつたが、在學中病氣を得て途中で退學し俳句に熱中し一方の宗匠となつた。その句に

たこつぼの水に炭消すうばが宿
もちの粉に油こぼしぬよひかざり
仙洞に日がな行き來やみそさしい
霧弱りのみか蜂や簾にあさひあり
蘭の香や霧しづくつたふ幹に日影
葉さくらに向岸の灯と並び歩す
五月やみ庭竹にまとふ朝煙

等ある。句の傾向は海紅派河東碧梧桐氏のやうに時に多少の破格なものが無いではないが、頗る穩健でホト、ギス派の高濱虚子や原石鼎氏等の句に近いものであるから、勿論層雲派の萩原井泉水氏の句のやうな極端なもので無いことは、こゝに引いた數句によつても知ることが出來よう。嘗つて

れた。通稱忠周、字は士信、竹山は其の號である。夙に書道に志し唐宋三代以後篆隸以下十體に通じ専ら説文字學を修めて斯業に有名である。其著に「行草字彙」「中等科習字帖」「補正朝陽字鑑」等がある。「補正朝陽字鑑」は氏の最も苦心した著書で全部三十六卷より成る大部のものである。これは既に絶版となつた朝陽字鑑の中の、穩やかでない點の改正せられたものだけでも數百項ある。或人は日本の支那學者が推古朝のそれから大正の聖代となつて、始めて本場の支那學者を壓倒し得たものと激賞してゐる。我邦音韻學の泰斗大矢透と對照して考へられる篤學者である。氏は勅題について次の詩がある。

新年言志

去歲激震與暴颶、怪火猛惡燼東京、醒來亦是一場夢、奚疑無常即浮生、窮變知化君子事、彰往察來大人行、心機宜同斗柄轉、好與新易向光明、除災致福祇由己、振作隆興樂春榮、
震災前住所 東京市下谷區仲徒町二ノ三七

博文館發行の文學雜誌「文章世界」の出て居る頃はその俳壇の選者をして居つた。著書に「蝶衣合集」がある。

現住所 神戸市楠町二二五ノ三

故高野竹隱

タカノチクイン(詩)

名は清雄、鹿兒島の人、最近代に於て漢詩壇の明星と仰がれ、隨鷗吟社の客員として盡すところが少くなかつた。筆蹟も亦頗る高雅であつて、人はその寸楮を得て大に什寶としたが大正十年四月十日病氣のために物故した。年六十。古備詩壇西川吟社は氏の指導に因つたものである。

石上玄雲覆紫芝、 高山人去未多時、
蕭曹絳灌壓梁肉、 九節菖蒲炊贈誰、
湖邊老人采澤瀉、 間渠誰是種蓮者、
但言蚊龍不影收、 前年綱得黃金瓦、
尙氏の死因に就いては次のやうな説をなすものもある。即ち氏が嘗て佐藤六石の詩を大に非難したところが、佐藤六石の反駁に遭つて到底詩壇に立

つて行けぬ事情になつた。氏は之を大に遺恨に思ひ、一年半ばかり悶々の情を抑へたが遂に憤死した云々。附記して世に問ふ所以である。

豪谷山人著色花卉畫卷

溱洧 訶樂 春歛 殘、 摘粉 搓酥 濕未乾、
文人 游戲 乃巨測、 別驅 造化 出毫端、
春風 手裏 意相屬、 將離 慰藉 情難足、
更有 花枝 交嫵媚、 爭妍 競態 相反偈、
豪谷 山人 酒中 仙、 畫成 擲向 酒家 眠、
四時 花氣 吹不醒、 空色 開謝 還自然、
士女 芳華 惜顏色、 老矣 少年 我亦憶、
展卷 詎妨 花著袂、 一榻 宴坐 衆香國、

藏六金印譜引

少時 不識 印泥 紅、 以油 和墨 士庶 同、
間聞 刺指 血糝 糊、 抽力 卽覺 與悲 風、
方今 文明 非復 昔、 富貴 將身 賭一 擲、
疲神 弊力 聊自 酬、 鑄斗 大金 那足 惜、
世間 留傳 秦漢 印、 誰視 以銅 遽謂 吝、
往往 偉畫 存奇 撫、 塵垢 古色 中含 潤、

貴戚公主乃有玉、衛青兩字土花綠、
 佞倖董賢猶鏤銀、那許黃金私鑄琢、
 榮華炫耀圖不朽、此事亦要名人手、
 藏六範鑄古法傳、游戲兼巧龜龍紐、
 千里奔走爭相求、紫綬直欲輕公侯、
 此譜森然起凡例、看君能事亦千秋、
 嗚乎能事亦千秋、如拓兩邕之碑板、
 姓名篆籀還見攸、

この詩のごとき用意深刻、金印を題として暗に風習の遷易を寓し、世態日に華奢に趨いてゐるのを慨してゐる。今勝島仙坡の氏を哭した吟詠を左に示さう。

吉備詩風君挖揚、絳帷垂教七星霜、
 西川吟多才俊、無復一人來奠香、
 千百詩篇關世間、縱橫任手不須刪、
 才名京攝誰相並、前有岐山後雨山、
 洛北垂帷五閱年、誰名嘖々四方傳、
 雁門一集撰刊後、私淑長洲沈石田、
 竹隱の病革るや田邊碧堂は東都より奔り赴いたが、

間に合はなかつた。太白山人は浪華より行いて會し、長尾雨山は葬事の周旋に甚だ力めた。吉備の詩壇はこの指導者を失つたことを大層悲しんだ。令息忠雄氏は法學士であつて今は東京に移住した。

高取稚成

タカトリチセイ(畫)

名は能夫、稚成はその號であるが別に山櫻とも號す。慶應三年五月十九日佐賀縣神崎郡松熊村に生れ、初め山名貫義に師事して土佐派を研究し、後松原佐久に就いて故實を學び歴史人物を能くする。明治二十二年以降「青年繪畫共進會」繪畫研究會歴史風俗展覽會、巴里萬國博覽會、「文部省美術展覽會」等に出品して銀賞數回、銅賞十數回、入選數回に及んだ。巴里萬國博覽會、會て東京勸業博覽會に出品した「配所の奇瑞」の圖は特に明治天皇御用品となつた。帝國繪畫協會の會員、日本美術協會歴史部委員兼評議員、國風畫會委員であつて、日本美術協會の日本畫派の幹部格であるが

大震災後伯爵芳川寛治伯の後援によつて佐藤紫煙の諸氏と共に多くの作を落つてゐる事になつた。尙文展へは第三回に「赫夜姫」「上天の圖」第六回に「藤房の草子」第七回に「南浦魚水」第九回に「四家文體」等を出し、何れも土佐派の秀逸として賞讃を博した。

現住所 東京府下戸塚町、字源兵衛、一三四、花田越後邸地内

鷹野つぎ

タカノツギ(小)

本名は次(ツギ)、明治二十三年八月十五日靜岡縣濱松市下垂町に生れ、同地の高等女學校に入り、在學中既に文才を發揮して人の注意を惹いた。同校を卒業して後、時事新報社員なる長野縣佐久郡松原の人鷹野彌三郎氏の夫人となり、創作を事とするやうになつた。そして文學雜誌「處女地」の同人としても相當の活動を示した。創作集「悲しき配分」の外近作に「黄昏」「歸省した子供達」「不安」「新婚の妹へ」「朝なき家」「疲れ」「二人

の友」「微笑」等の小説を「早稲田文學」及び「處女地」等に發表したる外評論「樋口一葉」感想「陽光を浴びつゝ」「家事のひまに」等の外、いろいろの隨筆なども數多く出して、創作能力の無限を示してゐる。

このうち「黄昏」について言うて見れば、如何にも女性らしい繊細な心持をよく描いて居る。結婚して七八年目の妻が一月一僅かほんの一月一程夫と別れて住み、その間頻りと手紙のやりとりをしてゐるうちに、新婚當時の夢想と情熱とのよみがへりを感じて、新しい心持で再びあふ日を待つと言ふ心持などを書いてゐるが、なか／＼手に入つたもので女史が努力如何によつては、閨秀作家に人の乏しい今日大に期待されるのである。

現住所 東京市外世田ヶ谷太子堂三五〇

故高橋勝藏

タカハシカツゾウ(畫)

萬延元年九月盤城國互理郡に生れ、明治十八年渡米して桑港畫學校に六年在學し、ヘンリーゲーツ

マセウス、エーランド等に學び、後シガゴに行きソツスマン、ランダス等に就いて大に研究し二十六年歸朝の後劇場背景畫の改良に努め、又芝公園に芝山研究所を起して後進の誘掖に盡した。文展へは第三回に「桃」第四回に「甲州葡萄」を出して好評を博した。大正六年七月年五十七で歿した。

高橋玉淵

タカハシギヨクエン(畫)

名は柳三郎。安政五年八月江戸に生れ、川端玉章に學び、内外博覽會及び共進會等に出品して受賞すること數十回、日本美術協會、及び日本畫會の評議員、正派同志會幹事、川端畫學校教授になり、文展へは第二回に「秋光」を出して其の手腕の確かさを知られた。

現住所 東京市牛込區市ケ谷仲ノ町四七

故高橋月山

タカハシゲツサン(詩)

國際公法學者であつて法學博士。信濃高遠藩の儒

者高橋白山の長男で明治二十七年東京帝國大學政治科を卒業し、大學院に入り、國際法を專攻し、海軍教授に任じ日清戰役に常備艦隊司令長官の法律顧問として乗艦し、後旅順口海軍根據地譯官を命ぜられた。丁汝昌に與へられた伊東軍令部長の勸降文は實に氏が起草したものである。後英獨佛の諸國に留學し、三十年法學博士を授けられ、三十四年歸朝し、次で東京帝國大學教授となり、國際法を擔當した。大正三年大隈内閣の時に内閣法制局長官に任じ、大學教授を兼ね、同五年大隈内閣辭職と共に罷めて貴族院議員に勅選せられ、専ら大學教授に任じた。從四位勳二等に叙し、帝國學士院會員となつた。大正九年九月十三日年五十四で卒したが特に正四位に陞叙せられた。氏は父白山の家學を受けて、漢詩文を善くし、「雅文會」を起し、「大正詩文」の牛耳を執り月山の名は同人の推すところであつた。

金州途上

三山扼海勢 岩峯 萬里威風 旭海風

白石洞 深籠怪霧、 紅砂崖 瘦落寒潮、
衣冠寧 問秦耶漢、 父老 猶稱舜與堯、
戰罷 金州城外路、 有三人乘 月夜吹簫、

雙魚閣酒間偶作

折葦 枯蘆 芝浦濱、 胡爲對酒 暗傷神、
朱欄 一曲 猶如舊、 無復低吟 淺酌人、

故高橋源吉

タカハシゲンキチ(畫)

有名なる洋畫家高橋由一の子で天繪畫塾に父の教務を輔けてゐたが後工部省美術學校に入り、フオントナーに學んだ。明治十七年、十一會に加はり、又明治美術會の設立に奔走し、明治初代の洋畫界に盡すところ多かつた。晩年は轢軻不遇で中央畫壇と消息を斷ち、地方を放浪して大正二年十一月、宮城縣石の巻で年五十三で歿した。

故高橋廣湖

タカハシコウコ(畫)

畫人なり肥後國山鹿の畫家浦田雪翁の子で通稱は久馬記、初め天鹿と號して雪舟派の畫法を學び、

青年の頃上京して松本楓湖の門に入つて廣湖と號し、在學數年の後技大に進んだ。やがて舊名妓今紫の養子となつて高橋氏を冒し、明治三十八年「都美樣圖を畫き」選畫會に出して好評を博した。四十年「蒙古襲來圖を博覽會に出し」銀牌を得、四十一年第一回文部省美術展覽會に「重盛諫父圖」を出したが未成畫といふので落選した。然し非常に傑作なので有志者は之を展覽會の傍の屋内に陳列したら大に觀客の稱揚する所と爲り、將來有望の作家とせられた。其他秀作少くない。四十五年五月子爵花房義質氏の囑を受けて其畫傳を作る爲めに朝鮮に渡り、材料を蒐集して歸京したのち同年六月二日病のため歿した。年僅かに三十八。氏は人となり謹嚴、頗る同儕の畏敬する所となつた。其畫は人物を描くに長じて特に王朝時代の風俗を得意としたものである。

故高橋泥舟

タカハシデイシユウ(書)

幼名謙三郎、通稱精一、諱は政晃、字は寬猛、泥

舟はその號である。書を能くし勝海舟、山岡鐵舟と共に世に三舟を以て稱せられた。幕府旗下の士山岡正業氏の二男で當時鎗術絶妙の聞がある。弱年にして幕府の師範になり威名時人を壓し終に叙聞に達し特に従五位下朝散大夫伊勢守に叙任され幕府の新徴組を托せられた。將軍家茂特に氏を愛重した。氏は資性剛直其國事を論ずるに權門を避けないから、動もすると幕吏の忌彈に觸れた。嘗て幕府征長の議あつた時氏は大にその不可を論じて聞かれず終に蟄居を命ぜられた。維新の際に戦功あつた。のち義弟山岡鐵太郎を薦めて駿府に到らしめ勝安房等と圖つて參謀西郷隆盛に面し恭順の實を表して事なきを得た。爾來清貧に安んじて世に出ないこと三十餘年唯詩歌筆痕を樂しみとした二舟早く死して泥舟獨り長く存し書名大に坊間に鳴つた。明治三十六年二月十三日年六十九で病歿した。

故高橋富兄

タカハシトミエ(國)

本多錦吉郎等と十一會によつて油繪の鼓吹に盡力したが、二十七年七月年六十七で病歿した。其子に源吉があり、門下に原田直次郎、柳源吉、森本貞徳、五百城文哉、安藤仲太郎等の名家がある。

故高畠式部

タカハタシキブ(歌)

幼名はとみ、大阪の醫者石井氏の女で天明五年に生れた。長じて京都の鍼醫高畑清音の妻となり明治十四年五月二十八日年九十七の高齡で歿した。歌は始め香川景樹に學び後千種有功卿の指導を受けた。歌集を「麥の舍集」と言つてゐる。その上木された後に詠んだものも千五百餘首あると言はれてゐる。刀自は歌ばかりでなく琵琶、笙、書、茶等に於てもいづれも堪能であつたと言ふことである。

少女子が袖はへ遊ぶ春の野はは、子よめ菜の花もゑみけり

鳥ならばくひてもゆかむ山松のこすゑの藤を見ぬ人のため

有名なる國學者であつて加賀藩の士、資性温厚頗る長者の風がある夙に國學を田中躬之に學び、造詣甚深く、梅園、又古學舎と號し、嘉永中に藩校明倫堂の國學講師となり、廢藩の後石川縣に又第四高等學校教授に任ぜられ、其他長らく官吏生活をなし、各學校に教鞭を執り、外國文典の法に倣つて「日本文法問答」を著はし、其他國文軌範、十訓抄校本等の著がある。殊に和歌を嗜んで、佐々木弘綱氏等とは特に親交厚く門人も頗る多かつた。大正三年九月年九十の高齡をもつて卒した。

故高橋由一

タカハシヨシイチ(畫)

怡之助、藍川と號し佐倉侯堀田氏の臣であつて、文久二年洋畫家川上冬崖の教を受け、又英人ワグマンに就いて學ぶ。慶應二年佛國博覽會に出品し、明治四年大學南校の教授となつた。之れ我が國に於ける畫學校の初めである。後濱町に天繪學舎を創設して子弟を教授し、十二年、明治天皇御尊影拜寫の命を受け、又其後小山正太郎、淺井忠

霧深きあしたの原をわけ行けば聲ばかりなる雁ぞ落ち來る

など其の名高い歌であつて、刀自は柳原安子、油谷倭文子、進藤筑波子、鶴殿餘野子、紅子、荷田蒼生子等と共に二百年この方の女の歌人として大田垣蓮月に次いで知られてゐる。墓は京都圓山の長樂寺にある。

高濱虚子

タカハマキヨシ(俳)

明治七年二月二十日伊豫の松山市に生れ、郷里の中學を経て第三高等學校に入り更に第二高等學校に轉校したが、思ふ所あつて中途で退學し、俳人たらんとして氏をもその道に誘ひ入れた河東碧梧桐と共に、同郷の先輩であり俳壇革新の唱道者なる正岡子規居士の家に寄寓した。尤も上京後父兄にすゝめられて再び第二高等學校に入つたが、學校生活を續けることはどうしても出来なかつた。上京後は放浪生活を續けて居たが、天才を有する彼は遂に子規門下に頭角を現し、明治三十一年九

月ホト、ギスを東京に移してから、虚子は主としてこれが經營の任に當り、編輯校正より販賣に至るまで悉く皆彼の手でやつた。尤も虚子がこゝ迄に到達するには、子規が有名なる道灌山の諫告があり、あくまで彼をして俳統を繼がしめようとして善導したゝめであることは言ふ迄も無い。虚子は又その頃より今日のいはゆる寫生文を盛に試作した。三十五年子規居士の死に遭つて思想上にも深い感銘を受け、遂にその衣鉢を繼いで俳壇の巨匠と仰がれるやうになつた。三十八年頃より一種の小説熱が俳人の間に高まり夏目漱石の「我が輩は猫である」その他の作品が續々發表せられるやうになり、虚子が最初よりの希望の小説創作慾をそゝり、從來試みたる寫生文を小説に應用して「風流織法」「斑鳩物語」「大内旅館」等を書いて頗る世評を博した。更に「俳諧師」「續俳諧師」等を公にして、文壇上に重要な一地位を得た。續いて「朝鮮」その他の作を出した。文は寫生文から來てゐるので、精緻である一方俳趣味より來た

酒脱味もある。その精緻な點は漱石など、共通の特質であつて面白いと思ふが、兩氏の文はまた各特異の色を持つて居ることは言ふ迄も無い。萩原井泉水などの層雲一派から言はせると、新俳句の層雲派は最も新しく、河東碧梧桐の新傾向をその次に置き高濱虚子のホト、ギス派をふるい句と論じてゐる。併し又虚子派から見ると層雲派のものは俳句で無いと言つて居る。これらの論議を一々批判しても見たいが、この短い傳記の間に悉くことは出来ないのを遺憾とする。虚子は餘技として謡曲をよくし、舞臺に立つだけの自信を持つて居る。鳴雪翁が喜の字の祝に俳敵碧梧桐と共に「翁」か何か舞つて一般の喝采を博したのは名高い話である。氏はこの方面から謡曲「鐵門」といふのを新作して舞臺に載せてあつたが、世に廣く知られてゐないのは惜しいと思ふ。なかなかよい文であつて、古いものに比べても何等遜色が無いと思はれるが、矢張り謡曲は時代の産物であつて始めて生命があるものと見える。

難波女やいくさになれて畑打つ
菜の花や蝶むれ渡る大井川
花の幕能などある社前かな
海見えて路分れたる焼野かな
病院や春の月見る上草履
柿くうて橋を渡れば宿屋あり
冬がれの道二筋に分れけり
穂芒にとまるでもなき蜻蛉哉
等は舊作であり
大寺の茶店の中を冬木立
大いなる冬木になりぬ寺近く
等は近作である。

現住所 相州鎌倉大町原

高間 惣七

タカマソウシチ (畫)

明治二十二年七月東京市に生れ、洋畫に興味をもつて之を學び、遂に東京美術學校西洋畫科に入り大正五年優等の成績をもつてその選科を卒業した。文部省美術展覽會に於ては、第七回に「午前

の日」第八回に「養鶏場」第九回に「まこものも」と第十一回に「浮雲」等を出して褒状等を得て入選し好評を得た。また此の外に國民美術協會に「冬枯」「みなかみの初夏」等を出品して益々其技の圓熟を示してゐる。大正十二年の大震災後大阪毎日新聞社主催の日本美術展覽會に出した「靜物」は満谷審査員の推薦によつて入選し、銀牌並に賞金五百圓を贈與された。尙同展覽會に出品の畫は梅雨晴れの明るい空を畫いたもので、よく作者の氣分を出してゐるとの評があつた。大正十三年の帝展に「樂園」「南窓の一室」を出して特選となつた

ヒロカハ

現住所 東京府下西巢鴨町八八

故高見 廣川

タカミコウセン (國)

名は祖厚と言ひ、國學者中島廣足の門人であつて國史國典に通じ兼ねて書を善くしてあつたが大正六年九月三十日七十二歳で歿し、熊本高麗門妙立寺に葬つた。京都堀川寺之内四丁西西法寺に塚がある。

故高嶺秀夫

タカミネヒデオ(美)

福島縣舊會津藩の人。初め慶應義塾に入つて學び明治八年、教育研究の爲米國に留學して十一年歸朝した。爾來女子高等師範學校長となり、日清役の頃東京美術學校長、及び東京音樂學校長を兼任した。古美術品を蒐集し、特に浮世繪に於て日本一の稱があつた。文展第一回より第三回まで日本畫部の審査員となり、四十三年二月年五十七で歿した。

高村光雲

タカムラコウウン(彫)

號は無心庵香橋といつて嘉永五年二月江戸淺草に生れ、初め中島光藏と云ひ、文久三年佛師高村東雲の徒弟となつたが、明治七年師の姉高村つゑ子の女婿となり、高村幸吉と稱した。十二年師の歿後獨立して一家をなし、十九年龍池會の觀古美術會に作品を出して銅賞を得、又此の年東京彫工會を起して常務委員となり、二十二年、東京美術學

校雇となり、次で教授となつた。二十三年帝室技藝員を命ぜられ、二十四年「楠公像」木型主任、二十五年「西郷隆盛像」木型主任となり、爾來内外の博覽會、展覽會の鑑査員となり、コロンブス世界博覽會其他に出品して度々金銀牌を受けた。文展では第一回以來彫刻部審査員となつた。嗣子に彫刻家高村光太郎があり、門下に米原雲海、山崎朝雲、平櫛田中、本山辰吉、内藤伸、石本曉海、加藤景雲、山本瑞雲、前田照雲、今戸精司等の多くがある。

大正八年帝國美術院會員となつた。實に現代彫刻界の元老である。信州善光寺の「仁王尊」はその傑作の一である。大正十二年十一月東臺曠原兩派の美術團が握手した時朝倉文夫、北村西望等新進の者より除外されたので一波瀾を起したのであつた。

現住所 東京市本郷區駒込林町一五五

高村眞夫

タカムラシンブ(畫)

目された。著書には「美術巡禮記」があり、「中央美術」其他に美術批評を書いてゐる。又太平洋畫會の理事をしてゐる。

現住所 東京市本郷區動坂町一一七

故高村東雲

タカムラトウウン(彫)

文政九年江戸下谷北清島町に生れ、初め奥村藤次郎と稱し、幼時佛師高橋鳳雲の門に入り、後師の姓と自己の姓と一字づつをとつて高村の姓を稱した。溫和にして上品なものを作つたが、大作の遺作がない。明治十二年九月二十三日年五十四で病歿した。養嗣子高村光雲は斯界の第一人者である。

高村光太郎

タカムラミツタロウ(彫)

明治十六年三月東京市下谷に生れた。彫刻の大家高村光雲氏の男で藝術的天分を豊かにうけた人である。東京美術學校彫刻科出身でその方面の腕もたしかなものだが詩人としても可なりの位置を

明治九年八月新潟に生れ、父が長岡藩士であつたので幼時より長岡市に移り、三十二年上京して、洋畫家小山正太郎の不同舎に入學し約三年間在學した。同學には青木繁、小杉未醒、坂本繁二郎、荻原守衛等があつた。作品を初めて發表したのは三十三年太平洋畫會の第一展覽會で爾來毎回出品し、四十年には東京勸業博覽會に「黄蘗の僧」を出して忽ち三等賞を得日本に於けるクラシック風の特徴ある作家として認められた。此年より四十五年迄博物館出版部に入り、装幀を擔任し、大正三年四月歐洲留學の途に就き、西比利亚をへてドイツ、フランスに遊んだが偶々歐洲戦亂が起つたので巴里に永く止ることを得ず、イタリー、イギリス、スエーデン、ロシア等を遍歴して大正五年二月歸朝した。又先に太平洋畫會研究所に教鞭を執り、文展へは第一回に「畫室の沈黙」「新秋」第二回に「夏の椽」第三回に「停車場の夜」第四回に「道成寺」第五回に「春日野」「休憩」「食後」を出し、幾度も三等賞の榮譽を荷ひ將來を矚

占めてゐる。學校卒業後數年間歐米に遊んだ。詩集「道程」の外「印象主義の藝術」翻譯「ロダンの言葉」「續ロダンの言葉」等の著並に彫刻の製作が多い。「ロダンの言葉」は文そのまま詩であり、大藝術家ロダンの眞を傳へたものとして非常の高評を受けた。

氏は又新譯ホイットマン「自選日記」(スペインマデイズ)を金尾文淵堂から刊行してその印税を窘蹙状態にある米詩人トラウベルに寄贈するなど人として尊いところのものをもつてゐる。氏の近作詩人は文藝雜誌「明星」に殆ど毎號載せられてゐる。

現住所 東京市本郷區駒込林町二五

高群逸枝

タカムラハヤエ(詩)

熊本縣生れといふ外、女史の生年月日も経歴も判然しないが、或る文藝雜誌の載せて居る處が誤無いものならば、女史は女工、乞食、詩人と言つたやうな、随分數奇な運命の持主であるやうだ。著

闇夜のごとく高まれる海

暮れ暮れに花は渦巻き陽の映えの
風に流れて窓昏みたり

男ひとりじいと見る——見る其の眼
千仞の闇うしろに積る

かなしみの唄へば唄に照る
牧場に近いたのしい入日

現住所 東京市

高安月郊

タカヤスゲツコウ(劇)

本名は三郎、明治二年二月十六日大阪瓦町淡路町に生れ、殆んど獨學自修に依つて今日の文學的地位をかち獲た。これは小説家田山花袋氏等と同じく其の如何に苦心と努力とをしたか想像に餘りあることであらう。氏は斯くのごとくにして詩人戯

作集に「日月の上に」「放浪者の詩」「美想曲」「妾薄命」「胸をいためて」「私の生活と藝術」等あるが、女史は「私の生活と藝術」に於て「妾の生活や藝術は、近代主觀論自我論近代理想主義これらが持つ相對的な意義と假設的な信條との缺陷に於て破れて、絶對を以て立上つた處に始まる妾は言ふ人間の歴史は放棄の歴史であると、從來のあらゆる哲學の根本原理は、それを生活の根本原理とする時、すでに我々の不安と不満と輕蔑とを起させるに過ぎないものである」と言つて居るので見ても、女史が如何なる思想と抱負とを持つてゐるかがわかるであらふ。

吹く風の白白の大揺れに

消えて消るる夕映さの徑

底に沁む溶けし桃いろ樹の光り

大揺れに揺れ陽は揺れに揺れ

泡やぶれ天やぶれて身に迫り

曲家評論家として一權威となつた。著作には「悲想の人」「文覺」「魔の曲」「春雪集」「東西文學比較評論」等の多くの詩集戯曲集文集等がある。氏の作「さくら時雨」は歌舞伎座に上演され、三幕もの、「關原」は各地で舞臺にのせられた。氏は大阪出身な爲に幼い時から芝居や淨瑠璃等を見る機會も多くあり、家庭の空氣もさういふ藝術的雰圍氣の中に育つたので自然かゝる方面に興味を持つやうになつた。近く近松門左衛門翁の二百年記念祭の大阪に開催された時、氏は其の依頼を受けて態々東京より下阪して講演をしたことがあるが其の話の内容は言ふまでもなく得意のものであつたが、氏の聲は頗る低い爲に聽衆を満足せしめることが出来なかつたのは惜しいと思つた。つまり氏は文の人、筆の人であつて。多くの聽衆をやんやと喜ばせるやうなもの、持合せは無いのであるそこにいつては渡邊霞亭氏はえらいものだ。其の體格於てその聲量に於てどこへ出しても立派な辯士である。

けふはうれしや雞より先に、
里を出て行きや、雲雀もまだか。
山は朝霧、日はやうくと
載せた重荷の露照す。

重荷載せても花ならよかる
花のかんざし、小露の玉や。
蝶もうかうか町まで来れば、
京の娘はまだ醒めぬ。

花は入らぬか、入らぬか桃は。
雛の節句はあしたか、けふか。
わしは御殿もほしうは無いが、
人形ひとつは抱きたい。

京の娘は友禪重ね、
花見、遊山と化粧に暮す。
わしは花賣り、山家に暮す、
せめて土産に紅ほしや。

花賣

一

ここに氏の爲に特記しなければならぬことがある
それは外國文學移植といふことであるが、氏は本
邦文壇の先覺者として明治文壇にイブセン、トル
ストイ。ドストエーフスキー等の泰西諸文豪を紹
介せる點に於て遙に鷗外、逍遙、魯庵氏等を凌ぐ
といふ人さへもある。殊に歌劇唱道の第一人者と
して銘記さるべき人である。これは大正七年末に
著した「月郊詩集」に徴すると極めて顯著なもの
がある。詩集に收められたものは、明治文壇初期
の産物としてウオーヅワス、バイロン等の影響
をうけた七五調朗詠體の新體詩であつて、進歩し
た今日の詩壇から觀ると、思念のやゝあきたらぬ
ものが無いではないが、一度音化せられるときは
其の諧調の好感を與へること、到底昨今の歌劇の
比では無いという人もあるくらゐである。氏はま
た餘技として小唄も作つてゐる。音楽家弘田百合
子女史は氏の愛嬢である。

紅もつけぬが、わしには似合ふ。
賣る花でも頭へ載せて、
山へ歸るを呼ぶのは花か。
花も、姿も寫すとは。

姿はづかし紺地の木綿、
帯も淺黄や、赤いは襷
白い脚絆につかぬか塵は、
吹も春風、二里の路

氏はまた俳句をよくして其の作少く無い。
風に臥せば月の上行く水も見ゆ
温室に花の靈聞けば日も薫る
風を引裂いて立つ仁王哉
現住所 大阪府東成郡天王寺一本松

高安紫山

タカヤスシザン(畫)

名は知名、字は子周、紫山は其號で別に雨岳古樵
の號がある。天保六年七月十一日茨城郡加茂部村

に生れた。幼い時怙恃を失ひ、土浦藩高安源貞の
養嗣となつた。長じて水戸に遊び醫を本間棗軒に
學んだ。業成りて歸り慶應三年江戸に移つて業を
開いた。維新後大學東校に出仕し擢んでられて權
中助教となつた。明治四十年海軍省に轉任した。
在職殆んど二十年累遷して大軍醫に至り正七位に
叙し二十一年老を告げて退職した。翁性温厚夙に
畫癖があつた。最も山水花卉を好み傍ら古名家に
出入した。暇あれば揮灑倦まず其の描寫するところ
古人の粉本殆んど五百幅の多きに及んだ。尙諸
州を歴遊し佳山水を模寫し其の技益々精を極め
た。齡耳順を踰へても而も鏤鏤として少しも衰へ
なかつた。

現住所 東京市本郷區千駄木町二二九九

瀧井折柴

タキイオリシバ(俳)

本名は孝作、明治二十七年四月四日岐阜縣大野郡
高山町に生れた。少年時代から俳句に興味を感じ
て句作に熱中し、遂に上京して斯道一方の大家河

東碧梧桐氏に師事し、又早稲田大學文科の聴講生となつて文藝に關する研究に没頭した。氏は大正三年上京の後碧梧桐氏の率いる新傾向の機關雜誌「海紅」の編輯に従事すること五年の後、一年ばかり時事新報の記者となり、更に改造社員として盡すところがあつた。著作集「妹の問題」の外近く書いたものに小説「一枚の版畫」「小石川の親類」「隣家」「沿邊通信」「妻の親」等があり、その外評論をも書いてゐる。句は言ふまでも無く海紅一派の新傾向なもので其の句甚だ多い。「妹の問題」等によつて氏の作風を見るに、よほど落付いた筆であつて、靜かな氣持で讀み終らせるが少し熱があたりたいと言ふやうな批難をする人もあつた。併し氏の本領はやはり句作にあるのであるから、他の創作的手腕は先づこれからと言ふところであらう。

祖父の雪搔き雪汁垂る、
八ツ手赤枯れの雨戸を開けた
二月の日の窓の花さしの若い莖

彩色は暉南田、周笠、及椿山、渡邊華山に得る處が多い。その代表作には岩崎家所藏にかゝる「四季花鳥金地屏風」「百齡食祿松鶴遐齡屏風」及び澁澤家所藏の「四季花鳥屏風」等で、遺著には「畊香館畫牋」「花鳥畫譜」「丹青一斑」等がある。性質溫良恭謙、閑居を好み、晩年は鎌倉長谷村に住して明治三十四年九月逝つた。七十二。息に美術批評家文學博士瀧精一があり、門下に山本昇雲米山朴庵、佐藤紫烟等がある。

瀧田 樗陰

タキダチヨイン (記)

本名は哲太郎、樗陰は其號である。又一に望岳樓主人とも號する。明治十五年六月二十八日秋田市手形新町に生れ、明治三十六年より當時唯一の思想高級雜誌「中央公論」に關係してより同誌編輯に従事すること二十年、一意その發展をはかつた。同誌の今日あるは全くその盡力により且つ氏の手腕を待つことが多い。今は同誌の主幹をして居る。氏はかゝる雜誌の主幹をして居るといふこ

花野風あらぶるにかゝる碑を摺る日
門大樹伐りし夜銀河ふりかはる
現住所 千葉縣我孫子町字子の神

故瀧 和亭

タキカテイ (畫)

南宗畫の大家。名は謙、字は子直、蘭田の別號がある。本姓は瀧宮であつたが後、瀧と改めた。天保元(三?)年正月江戸千駄ヶ谷に生れた。父は平吉、藝藩の浪士であつた。幼時は大岡雲峰の門人佐藤翠崖に學び、後寛木木舜に就き、十六歳の時大岡雲峰の門に移つて南北合宗の畫法を學んだ。二十歳の時長崎に遊び沙門鐵翁に師事し、又清人陳逸舟、華昆田、錢少虎、江元璣と來往した。嘉永五年江戸に歸り翌年北越に遊で留ること十四年其後も亦北越に行く。明治六年官令を帯びて埃國博覽會に花鳥圖を出品し、十年、第一回博覽會に「松樹牡丹圖」を出して名聲を博し、十四年以後屢々宮内省の恩令を拜し、二十六年、帝室技藝員となつた。その得意とする處は花鳥畫で、没骨の

とが一つの便宜を與へて、現代作家の手續などは随分よいものを蒐集して居る。文豪夏目漱石のものなどは其の數に於て、また其の量に於て君以上の藏幅家は恐らく一人もあるまい。編者が松岡讓氏より親しく聞いたところによつても、其の遺作展覽會などに行つて見ても、珍らしいものゝ多くは大抵君のものであつたし、態々牛込辨天町の夏目邸に行つても見たが、其の遺幅のよいものは家にはあまりない。又有島武郎氏のものにしても龍田氏がかの問題を引起した波多野あき子の手を経て贈與された詩幅などは、數ある有島ものゝうちで實に々々絶品というても決して言ひ過ぎではあるまいと思はれる。尙思想雜誌としての「中央公論」が成功したので、續々これに似寄りの雜誌が發行されてゐる今日、即ち「改造」「解放」「現代」「雄辯」等各可なりの發展をなして幾多の強敵となつて居る今日、氏に取つて書畫蒐集以上苦心されなければならぬものゝ多くあることを思ふ。氏の學歴は東京帝大の文科より法科に轉じて

政治経済科の四學年課業を履修したが卒業試験を受けずに退學した。
現住所 本郷區西片町十番地ろノ九號

田口掬汀

タグチキクテイ(小)

名は鏡次郎、明治八年一月秋田縣角館町に生れ、三十三年上京して文藝雜誌「新聲」の編輯員となり、又新聞記者生活をやつたが、思ふ所あつて、後に東京外國語學校にはいり、佛語專修科に學び、小説家として名を著すに至つた。「女夫波」「伯爵夫人」「ふたおもて」等は氏が數多い作の中で殊に世に聞えたものである。日本美術學院の主幹であつて、藝術雜誌「中央美術」の主筆としてその快筆を揮つてゐる。

現住所 東京市外長崎村一八三三

故田口鼎軒

タグチテイケン(文)

名は卯吉、安政二年四月二十日江戸に生れた。幕臣舊静岡藩士である。慶應二年幕府九番組の御徒

となり明治元年請うて商人となつた。二年召還されて駿州沼津生育方となり、次いで勤番組、兵學校卒業生となり三年静岡病院生徒となり次年東京修業を命ぜられ英書醫術經濟學を修め五年大藏省翻譯局上等生徒を命ぜられ七年紙幣寮十一等出仕に補して次で權中屬、中屬等に歴任し十一年官を辭し翌年經濟雜誌社を創立し尋て兩毛鐵道會社を設立して共に其社長となつた。後南島商會を起し其頭取となり、爾來聲望があつた。東京市の區市會議員次いで衆議院議員に選ばれ精勵の廉を以て銀杯を賜はつた。貨幣制度調査會員、農商工高等會議員、等を命ぜられ、又商業會議所特別議員に選出せられ三十二年三月法學博士の學位を授けられ、鼎軒の名は文筆に富める氏の著書によつて廣く知らるゝに至つた。「大日本人名辭書」「日本社會事彙」「日本開化小史」「自由貿易」「日本經濟法論」。「經濟策」等は何も著書中の有名なものである。

生前の住所 東京本郷區駒込西片町一〇

故田口米作

タグチメイサク(畫)

元治元年四月下野國下都賀郡野田村に生れた。通稱米作後に之を號とし又櫻川とも號した。家は世々農を業とした。明治六年父に従つて東京に出て文學を松本民彌、黒崎玉田に修め繪畫を中村晚山小林清親に修め爾來身を繪畫に委ね洋風畫家となつて竟に團々珍聞及中央新聞等に執筆し滑稽の諷刺畫家を以て名を擧げた。日本美術協會、日本畫會等の會員として盡すところがあつたが明治三十六年四十歳にて歿した。

生前の住所 東京市芝區櫻川町二一

田口米舂

タグチメイホウ(書)

東京の書家。文久三年下野國佐野天明に生れ夙に攷古金石學を修め兼ねて佛典を學んだ。後清國に漫遊し書道を修めること三年深奥の研究を積んで歸つた。氏名は茂一郎字は子壽、米舂は其號であつて別に蘇山外史、姑蘇佛龕主人の號がある。能

く古書畫古器物の鑑定にも通じてゐる。其書殆んど和臭が無くて雄渾の力が漲つてゐる中に品位を藏してゐる。

現住所 東京市本郷區弓町二ノ二三

故武井柯亭

タケイカテイ(書)

名は泰、字は通、通稱は完平、後柯亭を通稱とした。會津藩士である。文政六年に生れて天下多事の際京都に上つて諸藩の志士と交り國事に奔走した。かの長州の久阪玄瑞等と祇園に會して其頭を毆つたとき、實に氣力があり度胸あつてよく衆人の畏服するところであつて、人之を會津の奇傑と言つた。柯亭は長州の名士と交り其事情に通じてゐるので、これに對する策略を藩の執政に献したが執政は一笑に附して之を用ゐなかつた。爾來風月を友とし吟嘯を事としてゐたが、戊辰の役起つた時進撃隊長に擧げられ、大に奮戦した。會津開城の後薩長の親友はその出仕を勤めたが亡國の臣何の面目あつて斗筲の祿を取り獨り暖飽を貪ら

んやと言つてこれを固辭した。これより翰墨を携へて四方を漫遊し、清貧に安んじて優悠自適し明治二十八年五月二十三日歿した。享年七十三。氏は豪放氣節あつて詩をよくし書に巧であつた。書は初め藩士星研堂に學び、後工夫して自ら一家を成した。性甚だ酒を嗜んだが、何程酔うても態度を崩さない。才氣横溢雄辯滔々として四筵を壓するの概があつた。又音楽に精しく尤も琴を善くして、別號を柯亭琴士と言つた。

故竹内久一

タケウチキユウイチ(彫)

安政四年江戸淺草谷中天王寺門前山川町に生れ、明治二年、堀内龍仙に就て象牙彫刻を學び、翌年川本州樂に師事した。二十二歳の時から象牙彫刻家として立ち、二十一年、東京美術學校教授に任じ、數度の博覽會に出品して優賞を得、三十九年帝室技藝員となつた。又文展では第一回以來第七回まで彫刻部審査員となつた。遺作には博多の東公園に「日蓮銅像」があり、瀬戸内海牛ヶ首島の

竹内桂舟

タケウチケイシュウ(畫)

舊和歌山藩士、武内藤介の二子、名は銀平、桂舟は其號、文久元年江戸の藩邸に生れた。初め狩野永惠翁に養はれて畫を學び、後家兄の歿するに及んで歸り家督を繼ぎ、再び上京して繪畫を研鑽して竟に一家を成した。曾て薩摩燒の陶器畫に従事し新機軸を出した。今の薩摩燒は多くその模型によつてゐる。現に博文館編輯局員として雜誌小説等の挿畫を描いて其名は廣く知られてゐる。現住所 東京市麴町區四番町一〇

竹内信山

タケウチシンザン(書)

天保元年九月信州野尻郡今の信濃尻村に生れた。名は精三、諱は元貞字は伯孝、信山は其號である。又知分、盧山の別號がある。弱冠の頃醫儒の兩學を修め壯歲にして小島知足に就いて古學說文學及書法五體を研究した。篆書は李陽氷の眞髓を得、楷則は虞法顔法を折衷して一格をなし傍ら篆鑄法を鈴木春谷に修めたので爾來書家と篆刻との二技を専門とした。

現住所 東京市芝區田村町八

竹内栖鳳

タケウチセイホウ(畫)

名は恒吉。元治元年十一月京都御池通油小路の料理店に生れ、十四歳の時土田英林の門に入つて始めて畫筆を執り十八歳の時四條の大家で殊に花鳥畫の名家である幸野楳嶺の門に移つた。爾來業大いに進んで畫名漸く高まり、京都美術學校教諭に任ぜられ、別に家塾を開いて幾多の秀才を輩出

せしめた。三十三年八月歐洲に渡り翌年二月歸朝し、歸來畫風一轉して號も前の棲鳳を栖鳳に改めた。三十五年、日本美術院展覽會に「古都の秋」を出して江湖の賞讃を博し、四十年、文展日本畫部審査員に任命されて又大正三年帝室技藝員となつた。文展には第一回に「雨霽」第二回に「飼はれたる猿と兎」第三回に「あれ夕立に」第五回に「雨」第七回に「繪になる最初」第十一回に「日稼」を出した。又四十三年、東本願寺から天井の揮毫を依頼されて今尙考案中である。いかに藝術的良心の強い人であるかわかる。大正四年、今上陛下御即位に際して野口小蘗女史の悠基の畫を書くに對して氏は主基田の屏風揮毫を命ぜられた。現に京都繪畫專門學校教授として令名があり兼ねて家塾を開いて後進の誘導に努めてゐる。其の子に竹内鳴鳳があり、橋本關雪、上村松園、土田麥僊、西山翠嶂、小野竹橋、石崎光瑤、井口華秋、廣田百豊、八田高容、森月城、三木翠山、有井祥雲、加藤英舟、北上聖牛等はその門下に出

た。大正八年帝國美術院會員となり、九年支那に遊んで畫囊を肥した。十二年大震災後秋季日本美術展覽會開催の時その審査員を囑託された。大正十三年京都繪畫專門學校の紛糾の際他の六教授は留任となつたが、氏は遂に辭任して閑地に就いた。

現住所 京都市御池通堀川東入ル

竹尾千代

タケオチヨ（歌）

朽木縣那須野の人、家は世々醫を業として居るが女史の父は醫業の傍政治に興味を持つて政友會に於ける地方有力者である。女史は郷里の宇都宮高等女學校を優等の成績を以て卒業し、推薦されて奈良女子高等師範學校には入つて、専ら國語の研究をなし、傍心の花會員として歌道に精進し、既に第一歌集梨の花を出してその天才を認められた。卒業後母校なる宇都宮高等女學校の教諭となつたが、其の後同じく母校である奈良女子高等師範學校に轉任して教育に従事する傍古美術の鑑賞

に耽つて舊蹟古社寺を尋ね且詠歌にも努力してゐる。さきに「婦女新聞」に於て短篇小説を募集したとき女史は之に應じて「憂鬱」の一篇を出した。審査委員生田長江沖野岩三郎兩氏の推賞を得て一等の當選を勝ち獲懸賞金一百圓を贈られた。尙大正十年に第二歌集「うたかた」を出したが、この歌集は自序に「梨の花を出して恰度三年になります。その間我が身の上に振りかゝつた悲しみ、親しい人の上に出つた嘆き、あれからこれと思ひかへす時たまらない氣持になります。うたかたは大方其の三年間の毛野の生活を歌つたもので御座います。云々」とあるので其の題材もほゞ察せられようし又其の次に、「幾度か火に入れようとし、一首一首でございました。」とあるのを見ても歌道に對する其の眞剣さがわかるであらう。

雲迷ふ那須野に立てるわが影の小草の如もいとほしきかな

聲の限り落ち行く夕陽呼びかへせ呼びかへせあ

のくるめく夕陽
瀑の音にふるひ戦く秋草のちひさき花を摘み溜
めにけり

残雪の那須野が原を越えて行く一人の旅に細る
わが影

滅び行くものゝなべてのなつかしさ夕陽の奈良
を涙して看る

寂滅のその黄昏の陽を浴びておごそかなりし天
地想ふ

現住所 奈良市法蓮町

竹越三又

タケコシサンシャ（文）

慶應元年十月新潟縣に生れ、明治十三年頃同人社に入り、英漢學及普通學を修め後慶應義塾に轉じた。更に又米人モルフホルドに就き英語及佛語を學んだ。二十二年大阪論社に入り編輯に従事し翌年出京して國民新聞及國民の友記者となり次で時事新報社に入つた。三十年雜誌「世界の日本」を發行して其主筆となり三十一年文部大臣秘書官

に擢任せられ文部省參事官を兼ね正五位に叙した。五月官職を辭して又操觚に従事し開拓社々長となつた。其著二千五百年史は我日本の歴史を文化的に取扱つたものとして有名なものであつた。「支那論」「新日本史」等の著に次いで苦心の大作「日本經濟史」を出した。其後宮内省御用掛となつて明治天皇の御傳記編纂を命ぜられて目下之に従つてゐる。氏は一時政友會代議士として其幹部となつたが落選の後意を政治に絶つて三たび筆の人になつた。三又はその雅號である。氏の力作たる「日本經濟史」は佛國進化學者ルボン氏と本野子との日本近時の彗星的發達に對する談話に其動機を得たもので、三又氏は本野氏の德憑によつて大正四年の總選舉に於て敗北した後之に着手したもので、之には日本經濟史編纂會を起し諸家の賛成を得て、本書八卷を完成した。氏は「人は生れながらにして經濟的動物なり」と云ふ見地から如何なる國家に於ても、歴史の本體は則ち人類の經濟病動機にあるのだといふ解釋を有し、上は國初

の生活状態から、降つては徳川氏滅亡明治政府の興起に至るまで章を逐ひ節を分つて之を論述し、あらゆる書物を涉獵して以て近世日本興隆の道程を證明して、日本の今日に於ける大發展はルボン氏の説のごとく決して彗星の卒爾的のものではなくて其根柢の深いことを知らせてゐる。中に参考圖、年表、總目次、索引の外、各年代の産業商品物價史表を附し殆んど完全を期して便利に之を詳論して居る。氏は政治家として忘れられる日があつても、二千五百年史の著者日本經濟史の編者としての氏の業績は蓋し不朽なものであらう。

現住所 東京府下豊多摩郡東大久保町一四

武定巨口

タケサダキヨウ(俳)

名は鈺七、明治十六年二月二十三日岡山市仁王町に生れ、幼時より盛に貸本を耽讀したものである。岡山中學を半途で退學し、十六歳の時大阪に一族と共に移住し銀行員となり餘暇をもつて漢籍を學んだ。二十歳の頃住友銀行に入り二十六歳辭

職以來丹波京都に放浪生活をなし、三十四銀行に入つた。氏は十八歳の頃武富瓦全に就いて蕪村派の俳句を學び、のち雑誌「車百合」に投書して青木月斗氏に知られた。三十四年一月松瀬青々氏の雑誌「寶船」「倦鳥」を起した頃より熱心に投書し、遂に青々子の指導下に寶船同人となつた。又四十三年の春より大正六年まで青々氏主幹のもとに「寶船」「倦鳥」の編輯を擔當した。著には自家句集「つは蔭」の外小説戯曲等がある。氏の句は「ホト、ギス」「俳星」「寶船」「大阪朝日新聞」等に投稿され、「春夏秋冬」「續春夏秋冬」等に蒐録されてゐる。

丈草の衾一つや煤拂ひ

室の梅八幡の藪に野風かな

蓬萊や方丈の調度みがくれし

初日影田毎の氷うごきけり

現住所 大阪市東平野町七ノ二八二

故竹柴其水

タケシバキスイ(劇)

してしまつたのは惜しいことであつた。

武島羽衣

タケシマハゴロモ(歌)

近世の名作者河竹黙阿彌翁の衣鉢を襲ぎ門弟中の元老として近世の世話狂言者河竹新七の後を繼いだ市村座の立作者竹柴其水氏は本名岡田新藏と言つて先代守田勘彌の門弟で鬨斗進三と號し作者見習として守田座に出勤し、明治五年黙阿彌の門に入つて竹柴進七と改め新富座に於て立役者に進み同十八年中師の俳名其水を襲名し明治二十七年明治座開場以來同座の立役者として先代左團次の爲に六十餘種の新作をした。四十三年新進の爲道を開いて隱退し爾來狂言作者の生字引として尊重された。師の養孫繁彦氏が「黙阿彌全集」其の他の大著を編むに當つて其の顧問として非常に盡力した。大正十二年二月十日急性肺炎のため東京下谷中根岸四六の隱宅に逝去した。行年七十七。逝去當時明治座では其の作「三人片輪」を上演中であつた。「め組の喧嘩」「遠山政談」「文覺」「勸進帳」等は著名の傑作である。大正十二年の大震災によつて家は焼け土藏は落ち終に演劇正本の全部を失つて三世新七以來の正本千餘冊が灰燼に歸

名は又次郎羽衣は其の號である。明治五年東京に生れた。夙に文章を愛好し幼より文章詩歌を作つてゐたが帝國大學文科大學に這入るに及んで一層趣味の深くなるのを覺えた。在學中既に大町桂月鹽井雨江等と詩文の優秀を以て聞えた。大學に於ては國文學を専攻し作歌は特に得意であつた。一時操觚界にあつたが後東京音樂學校の教授たること可なり長かつた。今は之を辭して私立日本女子大學校の教授となり、御歌所の寄人となつた。一時帝國文學其他の雜誌に長詩や短歌文章を寄稿したものが今は「わか竹」に寄稿する位であるが全國到る處に出張して歌道の講演を試みてゐる。氏は教授法に巧みであるから生徒はいつも氏の授業の來るのを待ち兼ねてゐるといふほどである。著書には奈良女子高等師範學校教授であつた故鹽井雨江及酒豪文人大町桂月二氏と合著の「花紅葉」

の外「修辭學」、「新撰詠歌法」、「新井白石」其他ある。かの「美しき天然」の如きは一般の學生に大變喜ばれる歌詞であるがこれは氏の作の一篇なのである。

ぬれ燕

雫もかをる春雨に
ふるやの軒のつばくらめ
しほれぬこぞのふる聲に
さへづりかはす音をきけば、

泣きわぶる子のなぐさめに
花や見せてん、鳥もやと、
春をたづねてまよふなる
心の闇もあるものを。

ひかりみちたる久方の
のどけき空にうちむれて、
うき秋しらぬわが身ぞと
世の人みなやおもふらん。」

春花のまよひはさめてあめつちも一つみどりに
よみかへる夏

たらちねの墓まうでしてかへるさの心に似たり
秋晴の空

うつみ火を友とかこみて語らへば心までこそ暖
まりけり

鴉啼く森の下道日は落ちて襟もと寒き風のひと
ふき

労働の塵の中にもま心の汗を樂しむ王者のほこ
り

現住所 東京市

故竹添井々 タケノエセイセイ(漢)

名は進一郎、字は光鴻、天保十三年三月熊本藩の
家中に生れ、明治八年修史局御用掛となり二等協
修に任じた。この年特命全權公使森 有禮の隨行
として渡新し尋いで法制局御用掛となり十一年歸
朝後大藏省御用掛となつた。十二年三月又清國に

差遣せられ正七位に叙し十二月歸朝し大藏省書記

官に陞任した。後清國天津領事に任じ尋で判事に
兼任し十五年朝鮮事務掛長となり外務大書記官に
任じ累進して従五位に叙せられ此年辦理公使に任
ぜられ朝鮮京城に在勤、時に京城の變があつて氏
頗る盡瘁した。後功を以て正五位勳四等に叙せら
れた。十八年京城擾亂のため所有品烏有に歸せし
を以て特別手當金五百五十圓を下賜せられた。二
十六年三月職を辭し更に文科大學教授に任じ漢學
支那語學講座を擔任し二十八年九月正四位に進ん
だ次いで其の職を罷め爾來閑地に在つて詩書を以
て樂しみとしてゐる。著書「棧雪峽雨日記」「左
氏箋釋」等は有名なものであつて帝國學士院は後
者に對して其功績を認め學士院賞を授與した。號
を井々と言つて詩文に長じてゐる。女婿嘉納治
五郎氏は貴族院議員、講道館長として有名であ
る。

玉山紫溟兩先生年忌祭恭賦

明君勉文治、誘掖贊其成、種玉藍田暖、

寒芹泮水清、村叱知禮讓、東賈咏千城、

誰繼前賢蹟、蘋繁何限情、

高妙古淡にして氣骨頗る渾厚、景慕の情語句の間
に流露してゐる。

更に井々をして學者より詩人としての聲價を高か
らしめた作は次の雙殉行であつて、讀む者をして
感慨に沈ましめる。

雙殉行

戰雲壓城城欲壞、腹背受敵我軍敗、

聯隊旗兮臣所掌、爲賊所奪臣罪大、

旅順巨礮千雷轟、骨碎肉飛血雨腥、

二萬子弟爲吾死、吾何面目見父兄、

青山馳道連朱闕、萬國衣冠儼成列、

靈輿肅々牛步遲、金輪徐輓聲如咽、

弔砲一響臣事終、刺腹鰐喉何從容、

旁有蛾眉端座伏、白刃三刺纖手紅、

遺書固封墨痕濕、責躬誠世情尤急、

言言都自熱腸迸、鬼哭神洞天亦泣、

嗚呼以身殉君臣節堅、舍生從夫婦道全、

忠魂貞靈長不散、千秋萬古侍桃山、

此詩一度國民新聞紙上に出づるや都鄙喧傳せられ太陽等にも轉載された。詩人落合東廓氏は之を評して、生氣凜然として筆に風霜を挿み、悲壯の感慨深情無限にして眞に千古に傳ふべし」と激賞してゐる。大正六年七十六歳で病歿した。

生前の住所 東京市麴町區五番町九

武田 粲

タケタアキラ (彫)

明治十六年東京に生れ、初め竹中光重に就いて五年間木彫を學び後東京美術學校に入り、明治四十年木彫科を卒業した。間もなく伊太利に渡り後英國に轉じ建築裝飾を學んで大正九年一月歸朝。東臺彫塑會會員となつた。父は有名な小説家武田仰天子である。

現住所 東京府下代々木一六五七

武田 鶯塘

タケタオウトウ (俳)

明治七年十月十日東京下谷御徒町に生れた。父敬

孝は朱子學派の儒者であつた。鶯塘は本名櫻桃四郎の音よりとつた號である。海軍士官たらんとして幼時攻玉舎幼年養に學び後三田英學校に移り更に神田英學院に學んだが學歷といふほどのものがなく殆んど獨學である。明治二十四年頃尾崎紅葉山人主幹の紫吟社に入つて始めて俳句に志し長く文藝俱樂部の選者となつて後大正二年南柯吟社の主幹となつて今日に至つた。又二十七年博文館に入り少年世界編輯を擔當し次いで文藝俱樂部に移り後毎日電報社々會部長となり中外商業所新報社會部長三越吳服店編輯主任を経過し幼年世界創刊と同時に再び博文館に復歸し大正六年四月隱退して俳的生活に這入つた。主として「南柯」「海の世界」「譚海」「赤壁」等に寄稿し「南柯」を主宰してゐる。「俳諧辭典」「俳句自由自在」「そらどけ帯」「吉田松蔭傳」「西行行脚物語」等數ある著書の中「西行行脚物語」は特に氏の力作である。氏の句中「夜の底に沈む街たゞ稻妻す」の如きはよく氏の傾向を示してゐる名句である。

島の灯は皆水にあり春の星

一路たゞ呪の櫻吹雪きけり

山吹や土橋暮れたる水明り

夜の底に沈む街只稻妻す

現住所 東京市赤坂區仲ノ町七

武田 霞洞

タケタカドウ (書)

氏は西川春洞の門人で筆力躍動自ら雄勁の氣を帯び、今や心手相隨の妙境に達し、氣韻も亦尠くない。楷書「歸書歸去來辭」は後進の参考とするによい手本である。

所感

性拙少神契、臨池三十年、時摹右軍字、

紙上起雲煙、

現住所 東京

武田 仰天子

タケタギヨウテンシ (小)

名は穎仰天子は其號、別に如心庵の號がある。安政元年閏七月大阪堂島に生れた。年十四家を出で

孝は朱子學派の儒者であつた。鶯塘は本名櫻桃四郎の音よりとつた號である。海軍士官たらんとして幼時攻玉舎幼年養に學び後三田英學校に移り更に神田英學院に學んだが學歷といふほどのものがなく殆んど獨學である。明治二十四年頃尾崎紅葉山人主幹の紫吟社に入つて始めて俳句に志し長く文藝俱樂部の選者となつて後大正二年南柯吟社の主幹となつて今日に至つた。又二十七年博文館に入り少年世界編輯を擔當し次いで文藝俱樂部に移り後毎日電報社々會部長となり中外商業所新報社會部長三越吳服店編輯主任を経過し幼年世界創刊と同時に再び博文館に復歸し大正六年四月隱退して俳的生活に這入つた。主として「南柯」「海の世界」「譚海」「赤壁」等に寄稿し「南柯」を主宰してゐる。「俳諧辭典」「俳句自由自在」「そらどけ帯」「吉田松蔭傳」「西行行脚物語」等數ある著書の中「西行行脚物語」は特に氏の力作である。氏の句中「夜の底に沈む街たゞ稻妻す」の如きはよく氏の傾向を示してゐる名句である。

河泉の間を放浪し或は教師となり或は官吏となつた。明治二十二年始めて小説「三都の花」を著し東京金港堂發行の「都の花」に掲載し大に世評を博した。爾後志を決して文壇に投じ二十四年東京都新聞の聘に應じて上京し後改進黨新聞に轉じ又朝日新聞に這入つて専ら其小説を擔當した。其著に「相思畫譜」「局松島」「花ちる里」「樂屋銀杏」「弓矢八幡」等最も稱せられた。氏は閑餘鉄筆を弄して其技の見るべきものがある。

無題

晴明 風日家々柳、

高下 棲臺處々山、

煙中楊柳誰開眼、

風裏杉 松自點頭、

十里長堤分野色、

一行遠樹約青天、

朱檻夜 飛溪路雪、

碧村暗隔馬蹄塵、

(下略)

現住所 東京市牛込區矢來町四

竹田 敬方

タケタケイホウ (畫)

名は源次郎。汲古又英齋と號し其の堂を光慶畫房

竹友藻風

タケトモソウフウ(詩)

名は虎雄。明治二十五年大阪に生れ、夙に上田敏博士等の指導を受けて象徴派詩人となつた。尙歐米に渡つて彼の地の詩壇を瞥見した。多くの譯詩がある。東京高等師範學校教授。

銀(譯)

ゆるく靜かに月はいま
夜をさまよふ銀の靴。
かなたこなたと覗き見る
銀の木枝の銀の實や、
ひとつひとつと窓がとる
銀の薬屋の月あかり、
小屋に丸太のやうになり
犬がねてゐる銀の足。
鳥屋にちらほら白い胸、
鳩の眠も銀の羽根。
はつか鼠はかさこそと、
銀の足爪、銀のまま、

武田半山

タケタハンザン(書)

安政元年一月江戸に生れた。舊幕臣遠山景高の四男である。幼名於菟吉年甫めて十八の時出で、武田家を嗣ぎ名を信任と改めた。武田氏は信玄の後裔である。氏幼より書を嗜み川上修齋の門に入つて修業し半山と號して廣く知られた。氏は又植物の栽培を巧にし今尙ほ書道の傍ら池塘庭園の清娛を取るを快としてゐる。
現住所 東京市芝區烏森町二

水の光に魚も澄む
銀の流の銀の蘆。

現住所 東京市外下澁谷、一一三六

故竹貫佳水

タカメキカスイ(文)

明治八年三月十日前橋市石川町の藩士平太夫の二男として生れた。數學家として有名な竹貫登代多の弟である。本名は直次佳水は號であるがこの外に直人、直人劍などの號を用ゐた。幼時父を失つて十二歳の時兄に供はれて上京し讀書に耽つた。のち攻玉社に入學して土木學を専攻し卒業後東京灣築港調査部係、臨時測圖部測圖手となつて遼東半島及朝鮮へ出張したこともある。三十一年二十四歳の時技手に昇進したが退職して山陽新報社に入つた。其後幾多の曲折を経て三十六年北米へ渡航し三十七年歸朝の後博文館へ入社し少年世界の編輯に従事した。三十八年私立竹貫育兒院を設立し翌三十九年少年圖書館を設立し大正元年少年文學研究會大正四年お伽學校を設立した。尙博文館

員としては大正三年中學世界及大正六年「少年世界」編輯主任となつてゐる。大正十一年七月長逝した。氏が最近兒童文學について新しい考をもつてゐたのに終に其の發表を見ることが出来なくなつたのは返すくも惜しいことである。嗣子眞弓君は慶應義塾大學法學部に學んでゐる。著書中兒童用のものには「少年算術遊戯」「少年百科事彙」(木村小舟と合著)「少女四季物語」「少年日本地理」(木村小舟氏沼田笠峯氏と共著)「少年遊戯奇術種本」「少年魔術遊戯」「少女思出の記」「日本紀ばなし動物神話(渡邊北海と共著)」「氣紛れ少年」神出鬼没少年軍使」「お伽福袋」「少年新話お伽つれく草」「日曜お伽斬」「幼年畫話百番」等の外、圖書館に關する圖書、工學圖書を多く著してゐる。尙氏の姓はタチメキでは無くてタカメキと讀むべきである。氏を追悼した句を二三次に擧げて見よう。

竹折れて置き所なし涼臺 巖谷小波
盆栽の竹の枯れたる暑かな 坪谷水哉

梅雨晴るゝ間の悲しみや父逝きぬ

竹貫眞弓

武林無想庵

タケバヤシムツウアン(小)

明治十三年二月札幌市南三條西一一七の資産家寫眞屋の愛子として生れたが、家庭の都合で放浪的生活をやつて滅多に家には居ない。帝大文科卒業後禪學の研究をしたり翻譯などを書いてゐた。感想文などは新聞雜誌に時々載つてゐるがどつか悟つたやうなこだはりのない禪味がある文だ。「サフオ」「サニン」等の翻譯がある。氏は嘗つて無想庵無語を出して風俗壞亂の故を以つて發賣禁止を命ぜられたが、氏はこれを改訂して長篇小説結婚禮讚を改造社より出した。本書は人間本能の色慾を赤裸々に告白した一人間の記録であり、人妻への大膽な愛着を赤裸に告白した深刻無比の戀の記録である。氏は愛人と結婚後相携へて渡歐し愛娘イウオンヌを擧げた。氏はその體質甚肥満してゐるので醫師の注意により酒、煙草其他一切の刺

五〇〇

戟物を嚴禁してゐる。三島光子女史は氏の令妹である。最新刊の「文明病患者」は「結婚禮讚」の續篇とも言ふべきもので性格的にも戀愛的にも特異の興味をそゝられる。氏はこの書を置土産として再び天涯萬里の旅に出で、上海に渡りエチプトドイツ其他に放浪する筈である。最近の作には小説「性慾の觸手」「第十一指の方向へ」「ダンスマカブル」「否められたるポテ鬘」隨筆「放浪メシノン」は積載したコースフアミーユ」「ミイラになりかゝつて」「我輩は猿でない」「ブルヂョア。キャビン」「巴里斷片」評論「妄評多罪」等を出してゐるが其の標題を見ただけでも、氏の著眼の常人と異るところのあることがわかる。氏の作は筆致の暢達といふ事は寧ろ過分とも言ふべき程であるが道草を食ふ弊が少なくない。

現住所 神奈川縣二ノ宮中平方

竹久夢二

タケヒサユメジ(畫)

明治十七年九月岡山縣に生れ、早稲田實業學校に

短歌

すくすくと枝さしのべし川柳生きて相見む夏來にけらし

あがためにつくるココアの匂ひより里居の朝の秋立ちにけり

これやこれよりどころなき魂の風に吹かるゝ岸の青柳

俳句

とつおいつ別れともなき柳かな

思ふまゝを鷺の鳴き立つる春日かな

現住所 東京市本郷區菊坂町菊富士ホテル内

太宰施門

ダザイセモン(文)

明治二十二年四月一日岡山縣兒島郡小田村字柳田に生れ岡山中學、第一高等學校を経て大正二年東京帝國大學文科の佛文科を卒業し、大學の副手となつて第一高等學校及慶應義塾大學の講師となつた。氏は其間に五年間の心血を注げる大著述を公にした。即ち佛蘭西文學史である。一體佛蘭西の

入つて學んだが、其後方針を變へて畫家たらんとして退き、新聞雜誌に挿畫を描いた。「夢二畫集」詩集「どんたく」二卷の外、多くの畫集の出版がある。又油繪の作もある。所謂夢二式の畫は氏を以つて鼻祖とするのである。

春の宵

行燈のかげにふみかけば

身につまされし燈心の

涙ぐみたる灯はゆらぐ

心がらにはあらねども

わすれてたもとつひかいて

われも泣かるゝ春の宵

夜の歌

ほんにおもへばきのふ今日

つんではくづすわが心

夜は夜とて三味線の

身もすてばちの三下り

いうてせんないことなれば

歌うてのけよとおもへども」

五〇一

文學に通することは歐洲文學の全體に通ずることであるから、この事業は容易なことではないがまた興味のある仕事である。文藝復興、古典主義、浪漫主義、寫實主義、印象主義、自然主義、象徴主義、新浪漫主義、新古典主義等一切の思潮の根幹と鬱叢たる枝葉とは之を佛蘭西の文藝に學ばねばならぬからである。氏は上下一千年に亙る世界文學の真相を傳ふるために、其間の遷移進化の跡を明かにすると共に、一々の時代を縫ふ大作家の天才と作品とを解説評論し、書の大半を近代現代に費してゐるから新時代の讀書人にとつて好個の良参考書と云ふことが出来る。氏は岡山中學及一高より帝大に至るまでもいつも優等の成績をもつて特待生で終始し、卒業の時は恩賜の銀時計を勝ち得たほどの人で頭腦頗明敏である。佛語科の中等教員臨時檢定委員となり、また例の土屋子爵や廣瀬君と共に佛蘭西學會を組織して活動してゐる外曉星學校でも佛蘭西語を教へてゐる。氏が佛蘭西學會から公にした「傳統主義の文學」は一時我が

文壇に於ても問題にされたほどの影響があつた。性極めて濃厚寡言、體軀は肥つてゐるが神経は極めて繊細な近代人がた、何處までも學者的の人でありながら、また一面極めて世間的な如才のない處もある。氏は別に道樂は無いが、芝居は随分好きでな方であつて、高等學校在學時代には土曜日には大抵劇場へ出かけたものださうな。既に洋行する筈であつたが世界戦争の爲にのびのびになり大正十一年渡歐した。その學殖、その見識、及その倦まざる研究心とは近く學界に頭を抜くことあきらかである。

現住所 京都市上京區岡崎町東天王九八

故田 崎草雲

タザキソウウン（畫）

下野足利の藩邸に生れた。名は芸、初め瑞白又白石生と號し、硯田農夫、七里香草堂、蓮岱山人等の別號がある。永く江戸に任し、又郷國に歸つた。初め畫を川崎梅翁に學んで梅溪と號し後金井烏洲及び谷文晁に學び、又春木南溟に就き、更に

盛茂燁の畫を見て自得する處があり、好んで山水を描いた。安政年中足利に隱退し蓮岱山に白石山房を結んで閑臥したが、天資豪放、慷慨の氣があり、維新の頃には勤王の士として東西に奔走した。第一回繪畫共進會以來出品毎に賞牌を受け、晩年帝室技藝員に擧げられ、三十一年九月年八十四歳の高齡をもつて病歿した。遺作の主なるものには、皇居に畫いた御杉戸を初め、「安政大地震繪卷」「風景繪卷」「秋山幽隱」等がある。門下に故相場古雲、小室翠雲の名家等がある。東京淺草の橋場町には志士として墓石を建てられてゐる。

田島象一

タジマゾウジ（記）

尾張名古屋の著述家で任天居士、醉多道士と號し夙に漢學を修めてその造詣深く文章も達筆であつた。明治十年の頃團々珍聞に記者となり同二十一年より名古屋に赴き扶桑新聞及新愛知等に記者となつた。著書頗る多い。氏は始め少壯の時上京して

氣鋭志大であつて世と相容れなかつたために、妙々雑俎と稱する雜誌を發刊し、奇矯滑稽の文章を草して、世を嘲り俗を言り且つ花柳界の情事を記し、一時都鄙の間に喧傳せられた。名古屋に在る頃代議士の候補者となり選舉を争つて失敗したので、氏深く之を憤つて南禪寺に寓し、更に上京して池上本門寺に淹留し、四十二年九月三十日遽かに病のために逝いた。享年五十七。氏は磊落酒を嗜んで尤も漢文に長じ、筆を執れば一瀉千里の才があり、服部撫松、石井南橋等と、各々一方に分立して麗筆を揮ひ、文壇に馳騁したものだ。

現住所

田代龍岳

タシロリユウガク（書）

駿河の人。文久三年六月生れた。幼より書を好み戲遊を喜ばなかつた。前田龍川を師として諸法帖を攻究し博覽會其他に出品して褒賞を受けしこと數回に及んでゐる。

現住所 京都市麴町區一番町三二

田代 倫 タシロリン(小)

明治二十年十月四日九州の熊本に生れ、獨學自習によつて創作に従事する素地を作つた。長篇小説「新らしきアダムとイヴ」短篇集「惡魔の傳道」とその報告書「閻の使者」等があり近く發表したものに小説「冬の足音」「春と蛙の日」「灰」「流れゆくもの」「母と子」戯曲「沈黙」「落葉」等があり其の外長篇小説戯曲評論感想等があり創作能力の一通りでないことを示してゐる。現住所 東京牛込區新小川町三ノ一九

故多田親愛 タダシナイ(書)

有名なる書家、もと東京市芝神明宮に禰宜をしてゐたが、明治三年徴されて職を神祇官に奉じ又大學出仕を仰付けられ、七年東京帝室博物館屬に轉任して、二十七年迄勤続した。夙に書道を嗜好して習つてゐるうち尊圓親王の書に接して大に喜びこれこそ自分の終生學ぶべき指南であると言つ

て終日終夜練習した。後世尊寺大納言行成卿の筆意を欽び盛に上代様の長所を修得して、我邦入木道の衰頹を救はんとした。かくして古筆の宣傳に全力を盡してゐることが畏くも天聽に達して、二十年皇后宮の思召によつて詩歌色紙二十四枚を謹寫して録上し、三十七年九月には堀江物語二巻を淨寫して上つた。後病を得て三十八年四月十八日歿した。享年六十六。我邦近代習字の手本として千陰流が一時勢力を得たのは一般の知るところであるが、其後御家流の俗化に飽き／＼した愛書家は氏によつて大に慰められたが、續いで小野鷲堂阪正臣諸氏の大家が出て更に岡山高蔭尾上柴舟大塚治六諸大家の力によつて氣品高い文字を見ることの出来るやうになつたことは喜ばしいことである。多田氏の書を忠實に傳へてゐる人に氏の令嬢である。女史及もと文人として有名であつた星野天知氏等があり、岡山縣津山の歌人で植月重一氏等がある。

多田不二 タダフジ(詩)

明治二十六年十二月十五日茨城縣結城町に生れ、栃木縣立直岡中學校を経て第四高等學校に學び、更に東京帝國大學文學部の哲學科に這入つて心理學を専攻した。大正八年優良の成績を以て卒業し文藝方面に活躍し、詩文雜誌「帆船」を發行して之を主宰し、又他に時事新報社員となつてゐる。著作には詩集「惱める森林」「リヒアルト・デエメル詩集」等、に關するものが多い。

贖罪

飢は私にながく續いた、
虚飾と懺悔の烈しい争闘の中に
私は毎日何を生まうと焦つたか、
そこには絶え間のない悔があつた
不明な求愛の狂ほしい孤獨があつた
おお、何が私をしてかくも慌しい亂舞に走らせたのか
私は唯、苦々しい終結を待つために

故田近竹邨 タヂカチクソン(畫)

現住所 東京市外大久保百人町一九五

名は岩彦。元治元年四月豊後國竹田町勤王家田近養一郎氏の子として生れ、南宗畫の淵野桂仙及大家田能村直入に學び、京都府立畫學校南宗畫科を卒業し、第四回及第五回内國勸業博覽會に於て褒状を得た。文展へは第二回に「寒林暮靄」第三回に「細雨空濛」第四回に「秋山曉靄」第五回に「山雲吞吐」第六回に「深遠」「平遠」第七回に「乍雨乍晴」第八回に「春雲秋靄」等を出して褒状又は三等賞を得た。

自己を飽くまで欺かうと努めた、
未來はいつも私を驅つて 遠い罪の記憶に脅かす

私は今、總ての正當の深淵に臨んでゐる
私の前面には狂暴な敵が待ちかまへてゐる
貧しく武装した私はこの限なく貪慾な自己の熱情と更に長く戦はなければならない。

大正八年帝國美術院の推薦となり、後有志と大阪に日本南畫院を組織し斯界のため大に盡さうとして居たが腎臟病の爲め享年五十九歳をもつて歿したのほ惜しいことであつた。

なき名もあらぬ花
廣き世ぞかたわなる我のただ一人ありもあらず
も何のさゝはり
的も無く放ちたる矢ぞ矢面にたつとみづからな
ど思ひたまふ
現住所 京都市富小路夷川北

橋 糸重 (歌)

東京府士族橋良珉の五女、明治六年十月十八日に生れた。夙に東京音楽學校に學び同二十五年七月同校を卒業し同二十九年十一月高等師範學校附屬音楽學校教授に任ぜられ三十四年五月東京音楽學校教授に轉じた。爾來同校の教授としてピアノ科を擔當してゐる。尙歌道にも趣味を有し夙に佐々木信綱博士の指導を受け松村みね子の名によつて有名なる片山廣子女史等とともに心の花派閥秀作家として知られてゐる。

東京の人、祖先は伊勢の人、世々國典和歌を以て有名である。祖父は橋守部、父は冬照、氏は嘉永五年二月江戸本所に生れた。夙に歌學を修め、椎木吟社を開き國文和歌書法を教授して都下有數の歌人である。妻は岩崎氏、名は清子、一女子名は禮子既に湯淺氏に嫁した。何れも和歌を好み且つ堪能である。

橋 道守 (國)

橋 守部
橋 冬照
橋 道守
橋 禮子
橋 登勢子
橋 可雲
橋 辨玉
橋 清香
橋 足禮

震災前住所 京都市本所區小泉町二九

建 畠 大 夢 (影)

名は彌一郎といひ、明治十五年二月和歌山縣有田郡に生れた。初め京都高等工藝學校に學び、明治四十四年東京美術學校彫刻選科を卒業した。文展へは第二回に「閑靜」を出して直ちに三等賞を得て好評を博した。尙第三回に「ゆく秋」第四回に「埃」第五回に「ながれ」第六回に「ねむり」第七回に「おゆのつかれ」第八回に「のぞき」第九回に「夜の深み」を出して褒状又は三等賞に入り、第十回に「絶望」を出すに及んで特選となり、第十一回に「子供」「激昂の人」を出して名譽の推薦となつた。山根八春はその門下である。大正八年以來帝展審査員となる。十二年大震災後開催された日本美術展覧會の審査員を囑托された。現住所 京都市下日暮里渡邊町一〇四〇

館 森 袖 海 (詩)

名は鴻、陸前の人、夙に詩作に志し遂に斯壇の大家となつた。現に「雅文會」の編輯に従ひ、「日本及日本人」の詩壇を擔當して選者となつてゐる。其詩は「大正詩文」「斯文」「日本及日本人」等の諸雜誌に寄稿してゐる。

悼 中村櫻溪先生
拜向棺前淚濕衣、廿年風誼一朝非、
文章未畢名山業、忽駕白雲魂不歸、
輓 小牧櫻泉先生
昭代居然帝者師、經筵幾歲講倫彝、
昊天遽奪斯人去、一夜宸哀傳玉墀、
梅花源雜詩
東風三月趁晴暄、尋到梅花深處村、
一道玉川明似玉、青山如繪劃仙源、
玉兔山莊夜幾更、西崦月落又參橫、
白雲來與梅花宿、一枕寒香透骨清、
寫景畫の如く、筆墨雅重、實に新進の白眉である。文も亦その長とする所で「中村先生墓誌」「三碧對碑」「書聖教序後」「贈吳博士序」「文要知

體」等の外多くの名作を出してゐる。「先正傳」は好評ある良著である。

故田所千秋

タドコロチアキ(歌)

舊派の歌人である。元姫路藩士で和歌を有名なる國學者本居豊穎翁に學び日米道人 鹿水等の號がある。官幣中社生田神社の官司に任ぜられ、從六位に進み、權大教正となつた。頗る書に巧みで「明治洋響集」を書いた。明治四十四年五月二十八日年七十六で病歿した。「小倉の山口」等を暮した。

田中宇一郎

タナカウイチロウ(小)

本名は卯一郎明治二十四年十二月山形縣西田川郡鶴岡町に生れ、幾多の境遇を経て今日に至つた。即ち氏は初め玄關書生として大に苦學し、後小學校の教員を奉職し、進んで中學校の英語教師となり、更に方向を轉じて店員となり、後更に轉じて新聞記者をやつて今日の創作生活に這入つた。著

作に「惱める人々」「鶯の唄」の外多くの長短篇小説隨筆童話等の作がある。

現住所 埼玉縣本庄町横山長次郎方

田中玉堂

タナカオウドウ(論)

名は喜一、東京の人、夙に英米に遊學して哲學を研究し、世界思潮の大觀をなし自己のイズムを宣傳して、自ら東洋の大哲學者を以て任じて居る。嘗て東京高等工業學校教授の職になつたが、今は早大講師となつて哲學や思想問題を説き傍ら中央公論其の他の思想思潮思索的諸雜誌に時事を論じ哲學を説いてゐる。そして一度論陣を張るや、堂々常に數十枚の紙面を充たし、その文極めて森嚴を以て鳴つてゐる。「吾が非哲學」「書齋より街頭へ」「哲人主義」「解放の信條」「改造の試み」「玉堂論集」「二宮尊徳」「福澤諭吉」等哲學、文藝、傳記及び思想上の論著が多い。文明批評家としてまた活哲學者として重んぜられて居る。精嚴にして壯麗なる文章もこの種の文としては最もふ

さはしい。最近の論文集「徹底個人主義」は大小九篇の論文で教育道德政治文學等の多方面にわたり、個人主義の徹底を以てあらゆる人生問題を説いてゐる。論文「國文哲學の建設」「神秘主義の心理倫理」「最高藝術の大星小星」等の文もある。

「最高藝術の大星小星」はラツセル、ジエムス、ペエタア、サンタヤナ、ニイチエ、トルストイ、ミル、カアライル、エマアソン、タゴオル、シモンス其他二宮尊徳、福澤諭吉、岩野泡鳴、松井須磨子等東西諸種の人物をとらへて、その人格を論じ、藝術を談じ、それと同時に著者自身の人生觀又は藝術觀を述べたものである。又近く發表した「現代批評の原理としての哲人主義」を居るにその想は益々博大にして透徹、其文愈々暢達にして壯麗であつて、我が論壇才人少くないが、説く所堂々として眞に生ける哲人に接する思ひをなすものは氏を措いて他に人あるなしの概がある。氏が獨逸哲學を粉碎しようと主力を傾けてゐることは

嘗て發表した「世界平和に因みて諸家の文化主義を檢討す」其他の長大論文によつて知ることが出来る。要するに氏は先人の説を盲信することなく獨得の見解を以て各自の哲學を打立てようとするのである。

夫人孝子女史は、人も知る財界の王傑澁澤子の令姪で、大正八年萬國労働會議に出席した人であり英語が上手で文章も巧み演説も甘い。

現住所 東京市小石川區原町一〇六

田中貢太郎

タナカコウタロウ(小)

明治十三年三月二日高知縣長岡郡三里村仁井田に生れ、高等小學校を中途で退學したる後、船大工小學校教師、新聞記者等を経て明治四十年上京し同郷の先輩文章家大町桂月を輔けつゝ、文を賣した。氏の文中桂月氏のと判別がつかぬやうなものあるは氏に接近して其の感化影響を受けたためである。著書に「奇話哀話」「切支丹屋敷」「五日雨夜話」「戀愛鬼話」「鳥語集」「剪燈新話」其他

數篇あり、近く發表した作物には「岐阜提燈」「墓の血」「黒い蝶」「螢火録」等の創作の外、隨筆「歳首歳晚俳諧言」「隱風録」物語に「西湖夜語」「女國」「美酒花雕記」其他甚だ多い。「美酒花雕記」は支那の紹興酒を飲んで古の李白や蘇東坡を氣取る筆者の面目紙上に躍如として「西湖夜話」「泰山に上つて天下を小とす」其他と共に氏が大正十一二年の交支那漫遊後の産物である。近時作家として達者な筆を執り多くの讀者をもつてゐる大泉黒石氏を中央公論の瀧田樗陰氏に紹介したのは氏はなさうである。

現住所 東京市小石川區若荷谷町九五

田中五呂八

タナカゴロハチ(川)

明治二十八年九月二十日北海道釧路市に生れ、上川中學校卒業後札幌農科大學に學び中途退學して實業界に入つて今日に至つた。氏はその實業に従事する傍謂はゆるデイレツタントとして川柳を試み高木角戀坊其他の川柳諸家と交り深く沈滞せん

としつゝある川柳と藝術圈内に引き入れるために力を盡し、機關雜誌「氷原」によつてその議論主張を發表し兼ねて實例の句作を試みてこれに掲載し傳統川柳の向上に骨を折つてゐる。氏は詩及哲學的思想を盛れる書物を愛讀し、詩の傾向としては萩原朔太郎氏のものに共鳴してゐる。小樽新聞の川柳欄は氏の指導によつて近來大に見るべきものがある。圍碁、スキー、寫眞等は約半歳に亘る雪國生活の氏にとつて好伴侶である。今氏の作より二三句を次にあげて置かう。

捨石になりゆく昨日ばかりなり

墓道で生きてゐるのが洒落を言ひ

毒草と知らず毒草咲きほこり

等諷刺痛切骨を刺すものがあり、或は世態人情を巧に道破したものが數多い。

現住所 小樽市花園町東二丁目一五

田中純

タナカジュン(小)

明治二十三年一月十九日廣島市に生れ、廣島中學

現住所 鎌倉由井濱

田中總一郎

タナカソウイチロウ(劇)

明治三十二年十一月十日に生れ、第三高等學校を経て東京帝國大學文學部の美學科に這入つて居るまだ在學中の學生ではあるが、既に戯曲に筆を染めて「午前八時」「再婚」等の著作を出し、注目を惹いてゐる。又劇の實演方面にも研究の手をのばしてゐるので劇評なども傾聽に價する見識を持つてゐる。評論に「舞臺上のリアリズムに就て」その他多くある。

現住所 京都市下京區上り下立賣通大炊御門町六

田中田士英

タナカデンシエイ(俳)

名は英二、明治八年三月九日長崎市銅座町に生れ、同地小島尋常小學校に奉職し傍ら俳句に精進してゐる。氏は高濱虚子の俳句入門及佐藤紅緑の俳句小史によつて斯道に入り、内藤鳴雪翁の「文庫」松瀬青々の「寶船」高濱虚子の「ホト、ギス」に

神戸關西學院神學校を経て、大正四年早稻田大學英文科を卒業した。氏は嘗て來者會懸賞脚本の募に應じて、處女作戯曲「五月の朝」を書き、一等に當選して賞金三百圓を得たことがある。其の脚本は大正八年の五月であつたか東京帝國劇場に上演されて好評を博した。雜誌「新小説」の編輯主任となり文藝評論に得意の筆を揮つた。「露西亞文藝の主潮」「大陸文豪評傳叢書」「妻」「月光曲」等の著書の外、近き頃の作に小説「微動」「或る求婚者」「火遊び」「純潔」「岐路」等の外、感想や評論などが數多くある。「微動」は漸く中年者のなかま入りをしさうな青年文學者が妻をもとめてゐる心持を基調として、或る海岸の別荘地に集つて來て居る人々の生活を取扱つたものでそのいかにも明るく藝術的な筆觸は進境の著しいことを示してゐる。併し「或る求婚者」は立體的に感じが浮び上つて來ないと言ふやうな批評もあつた。兎に角人間社同人として、相當の努力と成功とをしておる作家と言はれよう。

教へられ、子規歿後の「日本俳句」によつて河東碧梧桐の指導を受け、現に「長崎日々新聞」の俳壇に選者として鳴つて居る。氏は「文庫」「寶船」「俳星」「ホト、ギス」「層雲」「日本及日本人」「海紅」「日本新聞」「長崎日々新聞」「俳誌ナカサキ」等に寄稿し、其の句は「續春夏秋冬」「新春夏秋冬」「日本俳句抄」「海紅句集」「明治一萬句」等に掲載されてゐる。氏は未だ著書は無いが、輯録したる選集「ナカサキ」がある。

蚊屯ろせり這ひ檜葉の張れる下

懸磬の室いふも月に酒泉あり

隱亡火見る丘隅や稻光

御鷹奉行が扶持の民住む花野かな

現住所 長崎市東古川町六

田中 實

タナカミノル(畫)

明治二年七月九日常陸國笠間に生れた。同藩士猪瀬虎之助義治の三男である。幼名を龍太郎と言ひ後に田中氏を繼ぎ名を實と改め鉄齋、和堂、二波

山人と號した。幼より畫を好み筆墨紙を弄して花鳥の形狀を描き無上の樂とした。後上京して瀧和亭の門に學ぶこと數年技藝大に進み繪畫共進會、日本美術協會、青年繪畫共進會、内國勸業博覽會へ出品して屢々賞與を得明治二十二年日本美術協會に於て 皇后陛下行啓の際御席畫の榮を擔つた。二十六年天皇陛下日本美術協會へ行幸の際席畫を命ぜられた。

現住所 茨城縣西茨城郡笠間町字笠間一八

田中 賴璋

タナカライシヨウ(畫)

名は大次郎、明治元年八月十日島根縣市本町に生れ、夙に畫を好み、初め森寬齋に學び、後川端玉章に師事して圓山派の畫法を研究し、殊に山水に妙を得た。明治四十三年川端學校教授に任ぜられ爾來文部省美術展覽會に出品して三等賞褒狀二等賞等を受け、日本美術協會、英國博覽會に出品して銀牌三回を得、其他諸會に出品して受賞頗る多い。帝國繪畫協會の會員で、日本美術協會一會員

日本畫會評議員、天真會幹事、選畫會審査員等になつた。文展へは第二回に「鳴瀧」「新秋」第三回に「霞む春」「晴る秋」第四回に「朝霧寒林」第六回に「水廓の春」「山村の春」第七回に「木會山中残雪」第八回に「盞磬」第九回に「四季の山」等を出して褒狀及び多くの三等賞及び二等賞を得第十四回に「山月四趣」第十一回に「挂瀧四趣」を出して兩回とも特選となり、大正八年遂に帝國美術院の推薦となり、大正十二年同展の審査員の候補者に擬せられてあつた。

現住所 東京市下谷區上野櫻木町二二

田邊 至

タナベイタル(畫)

明治十九年十二月東京に生れ、後東京美術學校に入つて四十三年西洋畫科を卒業して同校助手となつた。大正三年、二科會の運動に與かり、選ばれその鑑査員となつたが事情あつて翌年脱會した。作品は第一回文展に「無音」第二回に「牧牛」第三回に「夏の夕」「雪」第四回に「窓邊の肖像」第

五回に「肖像」第六回に「甲良ほし」第七回に「曇り日」第九回に「雲の蔭」第十回に「樹蔭」等を出して褒狀又は三等賞を得た。此他光風會等にも出品して好評を博してゐる。大正八年帝展推薦となり、同十三年「ロシアの女」「ギタリスト」の傑作を出した。同十四年審査員に擧げられた。

現住所 東京府下瀧ノ川村田端一〇〇

田邊 碧堂

タナベヘキドウ(詩)

名は華、通稱爲三郎、備中の人、隨鷗吟社協賛であり、雅文會の顧問に當つて「大正詩文」の稿中頭角をあらはしてゐる漢詩人であり、最も絶を其の得意とする。

社頭曉

燎火蕭森 鷄唱長、

廟庭奏 樂想鴻荒、

黎明光自天巖戶、

眼見 童童日出光、

阿賀野觀楓

阿賀溪頭趁曉程、

丹黃林木媚人明、

扁舟棹 破千巖影、

百里 晴川錦浪生、

雲嶺重 疊水鬱環、

身入 丹楓黃柏間、

奇巧誰如青女手、

織將錦繡裏溪山、

替石氏は之を評して「溪山紅葉の勝、歴々と寫し
山して着色の横卷を披くが如し云々と言うてゐ
る。又支那泰山に登つて十首の作を得た。

登泰山(十首之内)

百里雲開望岱宗、

神封嶽嶽欲相從、

天風送我天門上、

晴髮東南第一峯、

日觀峯頭曉霧時、

濤光一道照欽戲、

東望欲獻吾皇壽、

五色雲中拜海嶼、

現住所 東京市四谷區須賀町二

田邊松坡

タナベシヨウハ(詩)

氏は幼少より漢詩文を好み、殆んど卷を措くこと
なく、長じて彦根藩の大儒で詩人である岡本黄石
の門に學び、大に詩才を發揮し「雅文會」の顧問
となり、「大正詩文」に寄稿する外「書勢」其他
の詩の選者となり、且つその作詩をも發表してゐ
る。尙氏は其の經營に成れる鎌倉高等女學校が震
災の厄に遭つたが善後策宜しきを得て盛大に趣い

てゐる。

鳴鶴日下部翁輓詞

少微昨夜落都門、遺墨披觀淚晴吞、
當日麴坊參一社、先師石叟素同藩、
仰瞻孤鶴雲中影、難返殘梅月下魂、
奇字成風斯道廢、誰從心畫唱溫敦、
鬚束銀鉞顏似童、態度如古武士風、
結髮學劍膽氣雄、風雲一賭蓮幕中、
翻然見幾投學宮、草棚文教要變通、
訓化不遜漢文翁、阪都庠序留遺功、
寄跡市井擬陶公、致賞得宜家道豐、
婚嫁了去煩累空、旋謝世事還關東、
古府煙霞花木叢、泉石林園稱翠紅、
翰墨風流與道隆、丹青往々欺化工、
老來矍鑠誇厥躬、古稀加七耳不聾、
智者樂水流水同、仁人靜壽山共崇、
隻身兼得心自沖、地仙高臥白雲壙、
兒孫繞膝娛融々、開讌豫期秋菊楓、
萊衣相映光態々、對延年醪樂不窮、

巖洋 一曲調焦桐、

天籟吹送玉玲瓏、

現住所 相州鎌倉和田塚

故田邊蓮舟

タナベレンシユウ(詩)

太一と稱し、幕府の旗下の士であつて、村瀬石庵
の次子である。夙昌平巒に入つて才名を馳せ、俊
才中村敬宇と大學雙美の稱があつた。尋いで甲科
及第の後甲府徴典館の教授に赴任し、三年の後外
國方と爲り、外國事務に執掌し、福地源一郎、福
澤諭吉等と京濱の間を往來し、海外の事情に精通
した。元治元年三月池田筑後の守に隨行して渡歐
し佛英の偉人傑士に應接して外國事情を詳にし
た。尋で幕府より使節を佛國に簡派する時正使に
隨つて折衝の功があつた。戊辰の亂に身を商賈に
變じて横濱に入り、竊かに資金を調べて之を函館
に送り、榎本武揚等をして後顧の患なからしめ
た。維新の後外務少丞に任じ四等出仕に進み、一
等書記官に移り、明治四年岩倉具視、木戸、大久
保、伊藤、山口等の歐米派遣に隨行し、書記官長

となり、臺灣事件の起つたとき辦理大臣大久保利
通に從つて北京に赴き、後北京に代理公使となり
歸朝の後元老院議官に任じ、錦鷄間祇候となつ
た。爾來閑居して詩文書を樂しみ、晩年維新史料
編纂員に擧げられて從三位勳三等に累叙した。氏
は胸襟洒脫、頗る詩文に長じ書に巧である。新詩
を獲る毎に之を新聞雜誌等に寄稿して老齡猶推敲
を怠らなかつたが、大正四年九月十六日東京で薨
じた。享年八十五

和氣清磨

伏奏神語帝心驚、妖髡失色噤無聲、
滿廷文武具位耳、朝陽賴有一鳳鳴、
臣身不避鼎將饒、臣名何擇穢與清、
拚將熱血瀝丹陛、一木欲支大厦傾、
君不見一代儒宗有眞備、讀書不識一忠字、
尊爲帝師位大臣、趨拜西宮不知愧、
花影
誰畫春光入剡藤、東風一陣暖烟凝、
石家錦障連三里、仙女行雲擁幾層、

臨水輕盈日方午、横窓嫋娜月初升、
愧無佳句酬佳景、曲々闌干枉久憑、

夏日口占

箬篷遮斷夕陽光、浴後纏牀好納涼、
剩有門前三百頃、清風吹度藕花塘、
弦月昇時水有光、臨池亭子暮風涼、
荷花競色紅兼白、也是吾家十錦塘、

田南岳璋

タナミガクシヨウ(畫)

南宗畫家。明治九年十一月三重縣に生れ、初め田中成章、幸野樸嶺に學び後久保田米僊、野村文學に就いて四條派の畫風を學び、山水花鳥は其の最も得意とするところである。日本畫會、日月會、美術研精會、日本美術協會等で受賞すること數十回、日本美術協會、日月會會員となり、文展へは第六回に「志摩大王崎」「南海の竹」第七回に「幾句八景」第十回に「甲斐の山」第十一回に「山里の秋」を出した。大正七年五月支那に遊び畫想を養つて歸つた。御揮毫及御用品の恩命を荷ふこと

十數回の多きに及び、嘗つて畫帖奏呈の選に入りまた皇后陛下伊勢大廟行啓に際して伊勢名所五十餘枚を謹寫して奉つたことがある。大正十二年の日本美術展覽會には「海近き赭土山の松」といふ四曲一雙を出して斯界の賞讃を博した。現住所 東京市芝區三田小山町五

故谷口靄山

タニグチアイザン(畫)

越中富山の人。名は貞。初め江戸に出て谷文晁及高久靄崖に學び、後京阪及び長崎に遊んで諸名家に交り、諸家の長を採つて畫いた。中西耕石、田能村直入、村田香谷等に次いで關西の南宗畫界に重きをなし、中でも直入と氏とは畫壇の兩大闢と言はれた。明治三十二年十二月年八十四で病歿した。

故谷口香嶠

タニグチコウキヨウ(畫)

京都の人。名は槌之助。竹内柄風、菊池芳文等と共に四條派の大家幸野樸嶺に就て學び殊に山水花

鳥をよくし、内國の諸展覽會に出品して屢々賞を得、巴里の世界博覽會で金牌を得た。京都繪畫專門學校として三等賞を得、第四回に「四季花卉」第五回に「羅浮」を出品して名聲をあげた。大正四年十月年五十二で病歿した。門下に猪飼嘯谷、一之瀬孤螢、小早川秋聲、伊藤小坡等の諸名家を出してゐる。

沖の方に網引するらし枕邊に聲吹き送る浦の朝風

故谷口藍田

タニグチランデン(漢)

文政五年の秋生れた。諱は中秋、字は大明、藍田は其號であつて又別に介石とも號し、肥前有田の人で家世々佐賀藩に仕へた。幼い時から他に秀いでて八歳の時已に詩を賦したので、古賀穀堂は神童と呼んだ。初めて兵法を講じ武技を習つたが後節を折り書を讀んだ。廣瀬淡窓を師とし業大に進んで遂に都講と爲つた。又江戸に遊んで羽倉簡堂に従學した。簡堂の門下には才俊甚だ多かつたが

藍田は齋藤竹堂及び頼三樹と共に頭角を現してゐた。諱介石の名都門に籍々たるものがあつた。數年の後佐賀に歸り弘道館に寓し、更に有田に歸り帷を下して教授した。時に年二十八。尊攘の論起るに及んで氏は長崎に行き副島種臣・大隈重信等と共に國事を謀つた。戊辰の變に長崎鎮臺は府民を棄てて逃げたので氏は同志と共に居民を綏撫した。後鹿兒島の弘文館教授となり、尋いで大參事を兼ね、廢藩の後鑛道館に教授した。氏は又家塾を開いたが來り學ぶ者甚だ多かつた。氏はその學極めて宏博で兼てまた國典にも通じ傍ら道釋方伎の術にも委しい。周易には最も深く讀むこと實に八千遍になつた。年六十一のときに沖繩に遊んで經を師範學校に講じ明治二十六年能久親王の聘に應じて能本に適き、尋で大阪に移り、翌年東京に従ひ寵遇日に頗る渥い。氏は足跡海内に遍く至る處で講説し、晩年藍田書院を建てて教へ、又行道會を設け「詩」「中庸」等の書を講じた。著す書に「周易講義」「咬雪餘稿」及詩文數十卷ある。

三十五年十一月五日東京四谷の寓居に於て年八十一を以て歿した。四十四年明治天皇の西巡の時詔して正五位を贈られた。

谷崎潤一郎

タニザキジュンイチロウ(小)

明治十九年七月日本橋に生れた。氏は恵まれたる天才藝術家の資質あるにかゝはらず物質上に於ては可なり苦しい試練を受けなければならなかつた。令弟精二氏の苦學も有名なものであるが氏もまた叔父の助力により學資を得て東大文科國文科に入つたといふことを聞いてゐる。四十二年八月和辻哲郎、後藤末雄、小山内薫、木村莊太、小泉鉄の諸氏と共に文學雜誌新思潮を發行したがあまり雜誌に熱中して退學の止むなきに至つたが一方「新思潮」に於て發表した「刺青」「象」「誕生」「麒麟」等非常に世の注目を惹いて直ちに一躍文壇の花形となつた。その後「スバル」に「少年」の一篇を書くに至り永井荷風は之を激賞して曠世の天才と賞し森鷗外博士は氏を「豪傑」と呼んださうだ。

それより短篇集「悪魔」戯曲「戀を知る頃」長篇「鬼の面」及び材を徳川時代にとれる「お艶殺し」「お才と巳之助」等を出したが、其の特異の作風は日本に於ける唯一人の擅揚たる唯美派悪魔派作家と稱せられてゐる。文章は放膽濃艶到底他の追随を許さぬ。前年文部省に文藝委員を置いて文藝の傑作を賞せんとした時氏を激賞して其選に入れようとしたのは故京大教授上田敏博士であつた。實際唯美的なロマンチックな純藝術的な上田博士の氣に入りさうな作風である。其後に出した「人魚の嘆き」「異端者の悲しみ」「二人の藝術家」等何れも人の意表に出づるものである。西歐の悪魔派と稱せられるものでも氏ほどの特色はなからうと思はれる。最も近來は官能の陶醉以上に何物かを築き上げようとしてゐる。又「金と銀」「近代痴情集」「AとBの話」「愛すればこそ」等を出して何れも洛陽の紙價を高からしめた。「愛すればこそ」は上演禁止問題で世論のあつたものだけに著書としては却つてそれがために有名となつて非

常に版を重ねた。國民文藝會は「愛すればこそ」「永遠の偶像」「お國と五平」の三作によつて推賞された。

大正活映に關係して民衆藝術の爲に力を盡さうとしてゐるし、兒童の讀物にも手をつけてゐる。幻想的な氏の作物は一度之を緋けば兎に角讀者をして卷を覆ふ能はざらしめる魅力を有してゐる。戯曲作家としても現代の最高標準と言はれてゐる。氏は美食家として名高く住も衣も美的なものを選ぶといふ話である。作をするにも態々帝國ホテルに宿泊して書くといふことなどは珍しくないさうである。氏は空想家幻想家としてよりも其想が或度まで氏の實生活より養はれてゐるところに作の根強さをもつてゐるのである。文士谷崎精二氏は氏の令弟である。

現住所 兵庫縣六甲山苦樂園内

谷崎 精二

タニザキセイジ(小)

東京日本橋區蠣殻町に生れた。小説作家谷崎潤一

郎氏の實弟であるが文章の傾向は甚だ違つてゐる。違ふといふよりも寧ろ正反對の作家であつてその作には常に著しく人道主義的色彩がある。兄潤一郎氏にあくまで物質的官能的なるに對し、精二氏はあくまでも精神的心靈的であり人道的である。潤一郎氏の常に美に醉ふに對し、精二氏は常に愛の命に目覺めてゐる。精二氏は發電所員となつて自活しながら、早稻田大學英文科を卒業したが、その成績は最も優等であつた。創作「蒼き夜の空」「地に頬つけて」「離合」「結婚期」「戀愛模索者」「生と死と愛」「静かなる世界」等の外、アナトール、フランスの「タイス」メレジコフスキの「先驅者」等の翻譯がある。「結婚期」は福岡日々新聞に連載の小説であり、「別宴」は氏の長短篇集である。尙近く出したものに翻譯「女の一生」小説集「誘惑」「或る姉妹」「明暗の街」等があり、評論に「文壇とブルジョア意識」等がある。文藝に關係ある人に調子外れと言ふやうなどうか普通でなく、常識的で無く、殊によると世間

の習慣や道徳を超越して居る人が少くないが、氏は珍しくもよく調和が取れてすこぶる圓滿な性格の持主である。風采から思想から實際生活からすべての方面がよく整つて居る。つまり氏が兄潤一郎氏と傾向の異なるものかゝる處から來て居るのであつて、文は人なりといふことを思はせられる。或る人は氏を評して、藝術家として特に取り立てゝ言ふほどの特徴は無いかも知れないが、併し藝術家をして藝術家たらしめる程度の才能が萬遍なく備つてゐるのみならず、それらの才能のすべてを役立てる総合的の支配力が兼備されてゐると、之が或はある意味に於ける大きな特徴かも知れぬ。早稻田大學助教授。

現住所 東京牛込區辨天町六

故谷 森善臣

タニモリゼンシン (圖)

有名な國學者であつて、幼名は松彦、弘化元年種彦又は種萬都と改め、最後善臣と稱した。通稱は外記といつて京都の人である。幼より書を能くし

又伴信友の門に入つて國學を研究した。又和歌を巧にして名聲あつた。夙に皇陵の荒廢して居るのを嘆じ大和河内等の陵墓を探り求めて嘉永四年に「諸陵徵」等を著した。學習院を建設せられた時國學の教授を命ぜられ、諸寮寮の再興せられた時寮官人となり、大和介に任じ幾もなく諸寮助となつた。明治維新後は大學中博士等に任ぜられ、明治三十年四月特に從四位に叙せられ後正四位に至り同四十四年十一月十六日歿した。年九十五。著書に「聲の五十字」「語鑑言語經緯」「南山小譜」「柏原山陵考」等甚だ多し。

故田能村直入

タノムラチヨクニユウ (畫)

豊後の人。初め三宮傳太と云ひ小虎散人と號したが、九歳の時南宗畫の大家田能村竹田の門に入つて癡の名を與へられ、又願絶の號を與へられた。後年、笠翁、青椀、飲茶庵主人、青入山樵等の別號がある。彼後竹田に破門されたが、後年竹田の男如仙に乞うて破門を許され、田能村と姓を改め

直入と號した。明治の初年二十六歳の時大阪に住

し學を篠崎小竹に武を大鹽後素の門に受けた後更に京都に移り、京都畫學校攝理兼教授となつた。後去つて自ら南宗畫學校を起し、又南宗畫會を組織し、關西南宗畫界の牛耳を執つて斯道の發展に力を致した。展覽會共進會等の審査員となり、又賞牌を得たことも甚だ多い。晩年は諸國を漫遊して四十年十月年九十四歳の高齡をもつて病歿した。作品は支那の名畫の筆意を寫した「吸古山泉」其他多數あり、門人に田近竹邨等がある。

玉手菊洲

タマテキクシユウ (畫)

天保十年九月大阪に生れた。東京の畫家玉手棠洲の男である。又は廉、諱は孝重、通稱治郎、菊洲は其號である。夙に父の畫法を學び明治十五年夏東山道木曾路を遊歴して出京した。時に繪畫共進會開會に際し山水及能樂の圖に出品して都下に名聲を博した。爾後屢々宮中に伺候し、兩陛下及皇太子殿下の御用を蒙り益々名聲を高めた。後専ら

北宗畫に力をなれた。

震災前の住所 東京市淺草區老松町二四

田村西男

タムラニシオ (文)

名は喜三郎、明治十三年二月東京谷に生れ、日本橋の千代田學校と法學院に學び、中央新聞記者となつた。著書に「藝者」「又藝者」「半玉」「春色濡模様」「藝者往來」「女優鬚」等がある。

木履で薄氷ふんで見たりけり
憂き人の襟巻をして見たりけり
娼家二三軒柳淋しき眞晝かな
草深き三谷へ通ふ朧かな
短夜やなんにも言はず雨が降る
夏の雨竹林に灯の走りけり
物の怪に洛中騒ぐ朧かな
現住所 東京市神田區豐島町四五

故田村宗立

タムラムネタツ (畫)

弘化三年八月丹波國に生れ、號を月樵と言ひチャ

レス・ヘンリー・ポーレンに洋畫を學び、又佛畫及び南北合法の日本畫を描き、初め京都繪畫學校に洋畫を教へ、又關西美術院の發起者で諸所の展覽會に出品して受賞したが大正七年七月十日歿した年七十三。氏は日本畫家にして洋畫家である。

田山花袋

タヤマカタイ(小)

名は録彌、明治四年十二月上州館林町に生れた。館林小學校卒業の後十一歳志を立て、上京し、京橋の書肆有隣堂の丁稚となり苦學して漢籍英語等を勉強した。初め日本法律學校に入つたが學資なき爲半途退學した。二十七年紅葉の主宰せる「千紫万紅」に處女作「瓜畑」を發表しようと思つたが遂に紅葉に容れられなかつた。それで蘇峯を主盟とする民有社並に透谷が領袖である文學界派に接近した。二十九年「太陽」に紀行文「日光山の奥」を連載して紀行文家として認められた。三十二年「故郷」の一篇を公にして世を驚かし三十五年「重右衛門最後」を公にするに至つて作風一轉

從來のセンチメンタルな情懷を旨とした境地より自然主義の方へかたむいた。「蒲團」を新小説に發表して當時勃興の新機運に魁して自然主義文學の第一人者と稱せられた。つゞいて長短百有餘篇を公にして文壇の泰斗となつた。三十二年博文館に入り文章世界を起し、大正一年博文館を退いて今日に至つてゐる。氏は精力絶倫、小説の勞作の外文話、紀行文、作歌、地誌類の著作も頗る多い。又佛敎に心酔して大乘的の傾向を盛に鼓吹してゐる。故に近年發表の小説にも文話にも佛敎具のあることは見逃すべからざる事である。大正七年十一月七日青山祭場で行はれた島村抱月氏葬儀の時、氏は文壇を代表して美文調の名文を氏獨得の咏嘆的な朗讀をして僧侶や婦女子には特に深い感銘を與へたさうだ。最新刊「毒と藥」は、文壇の老将たる氏が近來苦悶の宗教的觀念を中心として苦心慘愴の餘になれる含蓄極めて多き告白感想及評論集であつて、中にも小説新論の如きは文藝愛好家の絶好資料である。大正九年誕生五十年祝

る。

も、年を六たひかさねし鎌倉の昔の寺に入相の鐘。

冬の川すきとほりても見ゆるなれおよくあひるの水かきの色

現住所 東京市外代々木山谷一三二

田原梅谷

タワラバイコク(畫)

賀會が開かれ各雜誌に於ても氏の業績を掲載した。島崎藤村氏の寡作と田山花袋氏の多作とはその反對することによつて兩大家を批評する時の話題となるので有名だ。花袋全集に收められるものは(一)、生、妻、蒲團、一兵卒外十五編(二)、縁田舎教師、幼兒外五編(三)、髮、春雨、残る花(四)、一握の薬、馴れる迄外二十四編(五)、燈影、獨孤雲、風雨の夜外十一編(六)、時は過ぎ行く外十三編(七)、黄い小さい花外三十一編(八)、一兵卒の銃殺、再び草の野に外二編(九)、ある僧の奇蹟、Sと其の妻外二十四編(十)、残雪、新しい芽、鈴子の戀(十一)、感想録(十二)、山水小記、山行水行、温泉めぐりの全部十二卷となるわけである。

東京の人、名は和、字は致中、通稱銀次郎、梅谷は其號、別に日華堂の號がある。慶應元年二月生れた。老川文藏の男であるが後出で、田原屋を嗣いだ。幼時高林芳谷に就き南宗畫を學び、更に藤堂二州伯について修めた。明治十九年東洋繪畫共進會に於て褒状を受け、翌年繪畫共進會に出品して獨逸國皇室の御用品となつた。二十三年皇后陛下御席畫を勤めて御賞金を賜はつた。爾來日本美術展覽會其他に於て數回褒賞を受けた。震災前住所 東京市神田區淡路町二ノ四

故彈 琴 緒 ダンコトオ(歌)

有名なる大阪の歌人である。名は舜平と言ひ、桐圓と號し、攝津の國伊丹の國に生れ、漢學を橋本香坡に習ひ、後大阪に出て中村良顯の門に入つて和歌を學んだ。門人甚だ多い。富豪藤田傳三郎氏は實に其門下生である。大正六年十月年七十一で病歿した。「類題秋草集」「桐園咏草」等の著書がある。

うゑわけし言葉の花は世の人のかたらひ草の種とこそなれ

チの部

近松秋江 チカマツシユウコウ(小)

本名は徳田浩司であるが、近松門左衛門翁を崇拜するの餘り自ら其の姓を冒したのであるさうな。明治九年五月岡山縣和氣郡藤野村に生れ、慶應義

塾に學び更に早稻田大學英文科を卒業し、四十一年讀賣新聞日曜附録に「文壇無駄話」を出して文名をあげた。のちまた「別れた妻の話」の一篇を公にして小説家としての地位を十分に認められた。この作は一種悲痛なる氏の實感を書いたものであつて、愛慾のなやみを描いた長篇ものである。續いて「疑惑」「舞鶴心中」「葛城太夫」等の作を出したが、深刻な内部經驗と繊細な情味ある筆で描き出す潤のある文は、容易に人の企及し得ないものを示してゐる。吉井勇長田幹彦等と共に遊蕩文學者の一人に數へ上げられて、赤木桁平氏の指彈を受けたこともあつた。其の後紀州高野山に上つて佛教の研究に力を用ひた。名を成すべくして成さいでゐるやうな氣のする作家である。近頃の作としては小説「狂亂」「霜凍る宵」「返らぬ日」「嫌はれた女」「屈辱」等を「改造」「新小説」「女性」等に出した。批評家中には氏の作に對し徳田秋聲式と長田幹彦式との表現法を兼ね用ひる態度を非難してゐるものもある。氏は家庭の關係

で政治に興味を感じ、又歴史を幼少から愛讀したのでいつか「日本外史」や「十八史略」などの中のロマンチックな處の影響を多分に受けてゐるやうである。

現住所 東京市外中野上ノ原九五二一

遅塚麗水 チツカレイスイ(文)

名は金太郎、麗水はその號である。明治元年十二月十九日駿河の國沼津町在小諏訪に生れた。學歷は殆んど無いが幼より文を好み且巧みなどころから夙に鉛槧に従事し歴史物語や旅行記、小説等に筆を染めてゐる。

俳號松白、都新聞社會部長であつて、小説も作るが寧ろ漢語句調の艶麗な紀行文家として特に有名である。「日本名勝記」「半月城」「松島遊記」「大和武士」「照日之松」「さんざ時雨」「月夜鴉」「陣中日記」「ふところ硯」「露わけ衣」「山水往來」「山水供養」「日本道中記」「山東遍路」等多くの著書がある。また俳句を嗜んで時々名吟を出

してゐる。

掌を洩るゝ稻子の髭や晝の風

瀧しぶき群れ咲く射手の揺れ合へり

米研いで月の朧に流しけり

楷や金扇馬標花ふゞき

靜潭の岩皆夏を瘦せたりな

亭々の松鶴を呼ぶ日永かな

現住所 東京市外淀橋町角筈一四八

茅野蕭々 チノシヨウシヨウ(詩)

名は儀太郎、明治十六年三月長野縣上諏訪町に生れ、東京帝國大學に入つて獨逸文科を卒業し第三高等學校教授を経て慶應義塾大學教授の現職にいた。もと新詩社の詩人與謝野氏の門下である。氏は小説にも立派な手腕を有つて居り歌人としても相當な感受性と表現力を持つてゐる。「モデルの歌へる歌」と題する長詩はかつて朝日新聞の文藝欄で推賞されたものである。「なつかしき淺黄色なる葱畑馳走りて土ほこり立つ」「野の牛よ汝

は八百年も身じろかす黙して立つや夕立のもと」など何れもよい歌であるが前者は殊に客観味の勝つたよい境地を捉へて技巧もそれに叶つた佳作である。詩、歌、小説翻譯等に亘つて多くの著書があり、近くは玄文社より「獨逸戯曲集」を出版したる外、評論「自我と原始への歸復」「デーエメルの二人」「シュニッツレルについて」「ゲョエテのバンドラとヘンナ」「最近獨逸文學に於ける戀愛と結婚」「永遠の愛の流れ」等を「思想」「新小説」「女性」「婦人公論」等に發表し尙「明星」や「詩聖」等には殆んど毎號にわたつて得意の詩歌文章を出して、盡きざる詩的天分を示してゐる。夫人雅子女史も閨秀歌人として有名で、嘗て與謝野晶子女史山川登美子女史と共に明星派の三才母媛と稱せられ三女史の合著「戀ごろも」も明治三十七年に出版されて居る。

それ

Klabund

I-hi-wei

五二六

これが神聖な名だ、或は神聖な

三和音。

I-hi-weiそれが呼ばれる。

I-hi-wei

これはJe-bo-va

I-hi-wei

これは神聖な三位一體。神なる父。

子と精靈。

三つでもある、神々なる人間、人間なる神、

神となつた人間。

印度人の佛陀。

猶太人の基督。

支那人の老子

老子が彼等の中で一番だ。

老子に於て始めて彼は己れを見た

その後佛陀に

その後基督に、

私は彼の名で彼を呼ぶ、

彼の三和音で彼をうたふ、

彼が私を聞くやうに、聞入れるやうに、私の魂の意味、私の存在の魂を。

x

一になるのに、人間は三度變らなくてはならぬ。

人間から動物に、

動物から草花に、

草花から石に。

神は石のやうな心だ。

全く動かない、絶望の風で。

全く動かされない、誘惑の匂で。

全く攪亂することが出来ない。

唯一つの眞理がある。

岩のそれだ。

岩は永久に眞だ。

現住所 東京市芝區三田綱町一

千葉掬香

チバキクコウ(評)

本名は鑑藏、掬香はその號、又一に擁書山莊主人

とも號し、東京市深川區油堀先考の住宅(舊眞田伯爵別邸)に於て明治三年六月二十六日に生れ、十五歳まで茅野雪庵先生の塾に於て専ら漢學漢文を專攻し、又本郷進文學舎の諸講師に就いて英文世界史を學び、十六歳にして青山學院に入校した。明治二十年十二月同學院總理マクレイ先生に伴なひ米國ニューヨーク州シラキユス府に赴いた。同二十三年カゼノキヤ高等學校を卒業し、同年より二十六年までヒコオネル、コルヂェト兩大學に於て經濟學、社會學、心理學を專攻し、同じく二十七年エエル大學大學院に入學して、哲學、政治哲學、經濟學、比較法理學を專攻した。同二十八年同大學院に於てマスター、オブアーツの學位を受け、同年九月獨逸伯林に赴き同地の大學に學び専ら政治經濟の諸學を研究して三十年歸朝した。爾來三十四年まで銀行會社に重役として勤務する傍、東京専門學校に於て經濟學と英國のヴィクトリア文學を講じた。著者に「イブセン戯曲」「輓近倫理の傾嚮」「泰西思潮」等があり、又雜誌

「丁酉倫理研究」「藝文」「萬年子」「明星」等に社會學上や政治文學の諸論文を發表して居る。
現住所 東京市下谷區中根岸町三〇

千葉江東

チバコウトウ(譯)

本名は龜雄、明治十一年九月二十四日山形縣酒田町に生れ、仙臺第一中學校、國民英學會を経て、早稻田大學校の前身なる東京專門學校に入り歴史地理科に學んだが半途で退學し、更に東京外國語學校に入學して清語科に學び、記者生活に入り先づ「文庫」「新聲」「日本及日本人」「日本新聞」「國民新聞」等を経て「時事新報」の社會部長となり、更に現在の「讀賣新聞社」の社會部長になつた。著書に「シヤヤラバ」「日本仇討物語」等がある。

現住所 東京府下大井町庚申塚四八六六

中條百合子

チュウヂヨウユリコ(小)

明治三十二年二月十三日東京市小石川區原町十三

に生れた。幼にして讀書慾が旺盛で大抵の小説や稗史は手にしたといふ。東京お茶の水の高女卒業後「貧しき人々の群」「日は輝けり」「福宜様宮田」「一つの芽生」等の作がある。大正七年出發渡米して學んだ。有望な天才的閨秀作家である。處女作「貧しき人々の群」は坪内博士の推獎によつて中央公論に載せられたものである。(推獎狀は文壇名家書簡集所載)「美しき月夜」は短篇であるが頗る圓熟のあとが見える。渡米中大正八年十月三十一日紐育に於て荒木滋氏と結婚した。荒木氏は師範學校を中途でよして桑港に渡り十數年間勉強して遂にコロンビヤ大學ベルシャ語科を出た人で、波斯文學者としては日本で他に類のない學者であり、現に慶應大學文學部教授をしてゐる。

百合子女史の近く書いたものの中には小説「南路」「戯曲」「火のついた踵」「猿」其他短篇小説感想や隨筆「伊太利の古陶」等がある。女史の戯曲に於ける手腕も相當に認められるやうになつた。即ち

問題の構み方もよく又十分之を自分のものにこなして自然的に具體的に取扱つて戲曲的に展開させる力量は男作家のものと比較しても恥しくない位である。

現住所 東京市赤阪區青山北町一ノ八

故長

三洲

チヨウサンシユウ(書)

氏は儒者であつて又最も有名なる書家で傍ら又南宗畫をも善くした。名は茂、字は世章、又秋史、本姓は長谷氏、幼名は富太郎とも又光太郎とも言つた。學者梅外の子である。長姓を稱したのは支那風にしたので服部南郭の服南郭、長谷川紅蘭の張紅蘭のやうなものである。幼い時家學を受け又廣瀬淡窓の門に入り、後その弟旭莊の大阪塾に塾長となつた。當時沸騰してゐた尊王攘夷論者と交りを結んで大に感憤するところがあつた。萬延元年長門を過り、長藩の儒士屋蕭海及び執政周布兼翼穴戸眞澄等に交り、同藩明倫館の講師となつた。後藩命によつて彦山僧徒及二豊の志士を遊説

し、小倉藩の爲に捕へられようとした。元治元年外國軍艦の赤間關を襲ふ時氏は奇兵隊に入り前田砲臺を守り大に奮戦し傷いて退いた。時に長藩分れて正俗の二論黨に分れたが、氏は俗論黨の爲に忌まれ去つて長府侯に寄り萩侯の俗論黨を斥けることを説かしめた。後正義派藩政を執るやうになつて氏は大に重用された。明治元年討幕の役氏は越後口に向ひ、東軍と長岡城を争ひ、更に奥羽に轉戦して會津平いだ後歸つた。三年の冬權大史に任じたがこの時廢藩論起つた。けれども一二の雄藩が承知しないので三洲は新封建論を著して之を駁した。四年大學少丞に轉じ、柳原前光に隨て清國に使し、五年文部少丞に任じて侍讀を兼ね、學制五篇を草して上つた。尋いで大丞に陞り教部大丞を兼ね、七年學務局長に遷り侍書を兼ね一等修選となつた。十年龍駕に扈從して大和京都に巡回し一等編修官に任じた。これより先木戸孝允のため用ひられて其奏議多くは三洲の草に成つたと言はれてゐる。孝允の薨後三洲は其の知己を亡つ

たことを痛み辭職して仕官の意を絶つた。爾來詩文書畫を唯一の樂としたが二十年の間籠脊少しも衰へないで時々勅命をうけて書畫を獻納する光榮を有した。二十七年東宮の侍書になつたが幾もなくして辭した。二十八年正五位に陞叙し三月十三日卒した。享年六十三。近世書を談するもの貫名海屋長三州を推して海内無双と言つてゐる。息壽吉氏は東京帝國大學文科大學卒業後、奈良女子高等師範學校教授、學習院教授を経て九州帝國大學教授となつた。

學統

廣瀬淡窓——長梅外——長三洲(梅外の外淡窓の門に入る) 僧五岳

俠士

酒後悲歌霜月高、 浮雲富貴付兒曹、
錦袍未灑仇衆血、 愛惜腰間秋水刀、

幽意

撫罷孤琴欲睡遲、 茶殘香冷客歸時、
畫樓待月窓猶暗、 輕拍闌干唱小詩、

ツの部

塚原健二郎 ツカハラケンジロウ(小)

明治二十八年二月長野縣埴科郡東條村竹原に生れ正則英語學校に學んだ位のもので大した學歷はもつてゐないが文藝に興味を有し創作に従事してゐる。「ある迷宮の舞踏者」の著を出してゐる。

現住所 東京市外池袋字本村二七三

故塚原澁柿園 ツカハラジユウシエン(小)

舊幕士塚原市之丞の男、幼名直太郎後靖と改めた。蓼州又澁柿園主人と號し小説を書いた。嘉永元年三月江戸市谷合羽阪根來組屋敷に生れた。維新の際選ばれて徳川家に従ひて駿河に移り沿津兵學校の資業生となつた。明治三年藩命を以て薩摩に遊び歸りて静岡の集學所に入り人見寧、梅澤敏、諸氏と共に武技を修め後上京して横濱毎日新聞

岐阜燈
紙衣淡薄竹身輕、 野草幽花畫得成、
挂向軒窓涼若水、 一燈風影看秋生、
芳野
古陵風雨晚蕭蕭、 野寺殘紅隨意飄、
五十七年春似夢、 滿山花氣失南朝、
父長梅外にも多くの詩篇がある。今次に二首を掲げておかう。

過御塔門

一別妻兒出故山、 片帆風浪黯銷魂、
非常最感英雄跡、 四十慚過御塔門、

嚴島

結構自平相、 崇祠碧海中、 遺蹤觀勝事、
絕代想雄風、 失路新潮滿、 入門柔爐通、
夜遊秋月白、 春望曉霞紅、

の編輯長となり同十一年東京日々新聞社に入つた。十五年朝鮮京城の變あるや赴いて入韓紀實の著をなした。爾來同新聞小説欄を擔任した。氏は諸家の舊記に詳しく歴史小説家として令聞あつた。又會て東海東山地方の山川諸澤を跋涉し時に或は「氣海觀瀾」「舍密開宗」「山相秘錄」等の書に涉り地理理化學農藝、工業に精通した。其性磊落不羈で儉素自ら奉じ、未だ嘗つて官職に就かない。蓋し戊辰の役賊名を被ふもの、須らく草萊の氓をもつて身を終へるのみと、其著「最上川」
「山川源右工門」「北條早雲」「伊達政宗」等數種ある。

氏は幕府滅亡の時兩親は徳川慶喜公のお供をして駿州江尻と所に土着した。その家の後を巴川が流れる。此川をこゝでは蓼川といふので其時代の艱難を記念するために蓼洲の號を選んだが、後親父の住んだ四谷坂町の庭に澁柿があつてよく實る。鳥もつゝかず人も取らず柿一代を至極安樂に毎年送つてゐた。其れ以來殆んど世の中を棄てし

つて羨ましく思ふこの柿の生涯にことよせて澁柿園と號したのであるから、この號を味つただけでもいろ／＼のことを思はせられる。蟹と酒さしこしの春を外でやる。生前の住所 東京市麴町區平河町四ノ九

塚本虚明

ツカモトキヨメイ(俳)

名は槌三郎、明治十三年四月二十七日大阪南地阪町に生れ、同二十七年十五歳の時中井銀行に入り三十四銀行員となり、大阪南支店、臺北臺南支店を経て現に尼ヶ崎支店に勤めて居る。十四の時舊派の宗匠に就て點を乞ひ、其の後「國民新聞」によつて高濱虚子の選に投じ「ホト、ギス」「俳星」等に努力してゐたが、同三十三年松ヶ瀬青々氏大阪に歸つて寶船」を發行したので翌年十月其の門に走つた。氏は「ホト、ギス」「俳星」「寶船」「倦鳥」「大阪朝日新聞」等に寄稿し、其の句は「朝の句抄」其他に掲載されてゐる。住吉の神の井かれぬ雲の峰

故月岡芳年

ツキオカヨシトシ(畫)

一魁齋及び大蘇の別號がある。本姓は芳岡であるが後、月岡雪鼎の後を繼いで其の姓を稱した。初め歌川國芳に學び、後又葛飾北齋の畫風を慕ひ、更に洋畫の風を取入れて獨得の一派を開いた。特に寫生を重んじ、人物描寫に活人のモデルを用いたのは當時に於ては新しかつた。其筆信屈粗豪で優艶の趣きは缺くが一世の人氣に投じて明治の浮世繪に一變化を與へた。二十五年六月年五十四で狂死した。版行の錦繪に「魁題百選相」「末廣五十三次」「大日本武將鑑」「新形三十怪選」「風俗三十二相」「月百姿」「近世人物誌」「新柳二十

都路華香

ツジカコウ(畫)

本名は辻宇之助といつて明治三年十二月京都に生れ、初め四條派の大家幸野椹嶺の門に學んで一家をなし、遂に京都美術工藝學校教授に任じた。その後各所の展覽會に出品して受賞多く、文展へは第一回到「石清水」を出して直ちに三等賞を得次いで第二回到「諸神歡呼」第五回到「松の月」第六回到「豊兆」第八回到「閑雲野鶴」第十回到「埴輪」「大潮の跡」を出して三等賞、二等賞、又は特選の榮譽を荷ひ、更に大正七年推薦となり、大正十二年帝展審査員の候補者に擬せられた。夙に畫藝を開いて後進を誘導し、門下に富田溪仙、岩田秀耕等を出した。十二年大震災後開催された日本美術展覽會の審査員を囑托されてあつた。大正十三年京都繪畫專門學校の紛糾があつた時、氏は同校教授を辭任する意志であつたが、土田麥僊氏等の斡旋によつて留任し、同十四年帝展會員に擧げられた。

筑波四郎

ツクバシロウ(小)

四時」等がある。門下からは水野年方、鍋木清方や池田輝方を出した。右田年英及山中古洞、武内桂舟、川合英忠や鱒崎英明を出した。明治二十二年五月二十日茨城縣新治郡都利村に生れ、私立東京中學校卒業の後、第七高等學校造士館乙部へ入學したが、事故の爲半途退學し、後主として語學を國民美學會に於て學び、國民新聞を振出して、四十四年十一月野間清治、伊藤源宗の諸氏と「講談俱樂部」を創刊し、大正二年群馬上州新報の主筆となり、大正四年六月「雄辯」編輯主任となり、大正六年九月文學士水島耕一郎と共に週間新報「週」を創刊し、其後雜誌「淡海」「日本」等に關係して今日に及んでゐる。氏は主として「講談俱樂部」「文藝俱樂部」「少年俱樂部」「雄辯」「寸鉄」「新趣味」「國本」等に寄稿し著書もまた數種ある。現住所 東京市本郷區千駄木町五七望月氏方

現住所 京都市上京區烏丸通丸太町下ル 大倉町二〇五

辻 香雨 ツッコウウ(書)

名は眞茂、字は君豊、香雨は其號である。文久元年八月京都に生れた。嘗て宮内省爵位局詰となり舍人及び内事課兼勤となつた。夙に書法を巖谷一六に學び頗る其の筆意に入つた。公務の餘暇を以て書法の教授に従つてゐる。後香雨の號を香塙に改めた。

現住所 東京市牛込區矢來町三三番八。

辻 冬史庵 ツシトウシアン(俳)

名は政造、明治十七年十二月十八日滋賀縣大津市元會所町に生れ、商業學校に學び、柴田孟舉氏に就き漢籍を研究し、俳道に入つた。十七歳の頃舊派芭蕉寺住職畑靜人氏の門に學び、京都に轉住後は中川四明翁の満月會に入つて新派に傾倒した。秋田握月氏と五助會を智恩院眞葛庵に開き、内藤

現住所 京都市木屋町通三條下ル材木町

辻 永 ツシヒサシ(畫)

明治十七年一月廣島市に生れ、初め洋畫を白馬會研究所に入つて學び後東京美術學校西洋畫科に入つて三十九年優等の成績を以つて卒業した。文展へは第二回に「秋」第三回に「牧場の山羊」第四回に「飼はれたる山羊」等を出して褒狀を得、第

鳴雪翁專選の文庫紙上に盛に投詠した。氏の句は鳴雪專選の諸雜誌、文庫、懸葵等に投稿したが、「寶船」「ホト、ギス」「日出新聞」「京都新聞」「京華日報」等の新聞雜誌に蒐録されてゐる。著書には「文照會誌」「俳文ほをけ草」「俳諧史蹟寫眞」等の外小文集がある。氏には冬史、狹水樓瀨五助、凍星、等の別號がある。四の宮の祭に賣るや瀬田の柿 稻刈や出水のがれて小百姓 鼠鳴くや添水に隣る芋畑 珠數にして干せば死ぬなり栗の蟲

六回に「無花果畑」第七回に「滿洲」第八回に「初秋」第九回に「落葉」等を出して毎回三等賞となり、第十回に「葡萄の實る頃」を出すに及んで名譽の特選となつた。大正十二年帝國美術院展覽會の審査員の候補者に擬せられた。光風會會員として同會への出品も少くない。

現住所 東京府下灘谷伊達跡一八〇六

津田 青楓 ツダセイフウ(畫)

名は龜次郎。明治十三年京都に生れ、初め竹川友廣に就いて圓山派の畫法を學び、後谷口香嶠に移り、更に淺井忠の塾にはいつた。四十年佛國巴里に遊んでジャン・ポール・ローランスに學び三年の後に歸朝した。文展へは第五回に「五月のインクライン」を出し、大正三年、二科會創立に参加してその鑑査委員となり、以後毎回之を出品してゐる。洋畫の他に圖案をよくし大正七年三月には石井柏亭と共に日本畫の作品展覽會を開いた。夫人とし子も淺井忠、谷口香嶠の門で洋畫を描き

「朝鮮ぬひと花瓶」等の作が世に知られてゐる。氏は故夏目漱石と親友深く、漱石の洋畫は全く氏の影響感化であると言はれてゐる。夫人が洋服研究の爲滯歐中、一婦人と戀愛に陥つたが、改造所載の「愚かな夫婦」はその事件の告白長篇小説である。

現住所 東京市小石川區關口臺町三四

津田 光造 ツダミツゾウ(小)

別名ひかる、明治二十二年十二月、神奈川縣足柄上郡南足柄村福泉に生れ、大成中學、神奈川師範等を経て文學に志し、一旦早稻田大學英文科に入つて學んだが、思ふところあつて途中で退學し、爾來小學校教師、「教育時論」の記者となり、又は「藝術自由教育」の編輯に従事したが、現在は「種蒔く人」「熱風」「大衆」等の同人として活動してゐる。小説「青年教師の懷疑」「大地の呻吟」等の著書の外、近くは小説「青年指導者」「金持と若者」「遺産」評論「新生活即ち新藝術」「死線

を越えてを讀む」「米は権力よりも強し」「早く文明から逃げろ」「階級藝術と超階級藝術」「階級意識の藝術」「小川未明氏の血に染む夕陽」「倉田百三に熱風を見舞ふ」「處女地の創刊」「熱風地帯」「熱風の改題と大衆の綱領」等の多くの作を「種蒔く人」「シムーン」「文藝旬報」「自由人」「熱風」「大衆」等の諸雑誌及新聞紙等に發表し、大正十三年池上本行寺で僧院生活をした。

現住所 東京府下蒲田新宿三二五

葛谷龍岬

ツタヤリユウコウ(畫)

名は幸作。青森縣の人。明治四十三年東京美術學校日本畫選科を卒業し文展へは第九回に「靜日」第十一回に「泉殿」を出し好評を博してゐたが大正十二年帝國美術院展覽會の審査員候補者に擬せられた。

現住所 東京市下谷區谷仲初音町四ノ一四一

土井晚翠

ツチイバンスイ(詩)

に轉せぬだらうといふ人もあつた。それはとにかくとして上田敏博士の後任は矢張り故厨川白村の方が活氣があり力があり花々しくてよかつたのかも知れぬ。夫人八枝は高知縣士族で東大文科を三

十一年に卒業した第四高等學校教授林並木の妹である。

星と花

同じ「自然」のおん母の

御手にそだちし姉と妹

み空の花を星といひ

わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど

にほひは同じ星と花

笑みと光を宵々に

替はすもやさし花と星

されば曙雲白く

御空の花のしほむとき

見よ白露のひとしづく

宮城縣平民土井七郎兵衛の長男、明治四年十月二十三日仙臺市本荒町に生れた。明治三十年七月東京帝國大學文科大學英文科を出て同三十三年一月第二高等學校教授に任ぜられた。三十五年三月職を辭して夏海外に遊學しロンドン、ライプツヒ、パリの諸大學には入つて學び、三十七年歸朝し、翌三十八年三月再び第二高等學校教授に任ぜられた。詩集「天地有情」は藤村の詩集と共に青年に廣く愛讀された。「曉鐘」「東海遊子吟」等の作もあるがこれはあまり行はれぬ。「天馬の道に」は最近のものである。「晚翠詩集」「天地有情」「曉鐘」「東海遊子吟」は集められて「晚翠詩集」として發行されてゐる。島崎藤村の詩が美を現はすものならば氏の詩は眞善を現はすもの、藤村の詩が女性的と言ひ得るならば氏はは大體男性的と言ふことが出来ると思はれてゐる。京大教授の上田敏博士の歿せられた時、その後任となるやうな噂もあつた位だから英文學も確かなものらしい。生家が資本家で裕福なさうだから地位のために他

わが世の星に涙あり。

現住所 仙臺市本荒町

土子晴吉

ツチコセイキチ(短)

明治二十四年八月東京市京橋區築地に生れ、私立京華商業學校、明治大學法科等に學び、井上劍花坊、高木角戀坊、尾山篤二郎、石井直三郎、岩谷莫哀等の歌人や川柳諸家と交り、川柳と作歌とをその雑誌に寄稿してゐる。大正六年より十年迄は短歌雑誌「金盞花」を主宰發行してゐたが今は關係の雑誌をもつてゐない。故政法學博士土子金四郎氏は實の叔父である。

現住所 東京府澁谷町下澁谷一〇五

土田杏村

ツチダキョウソン(評)

名は茂(ツト)明治二十四年一月新潟縣佐渡郡新穂村に生れた。大正四年に東京高等師範學校博物科を卒へて京都文科大學哲學科を出た。目下京大大學院に在學して論壇に文筆を走せてゐる。「文化

土田 麥僊

ツチダバクセン(畫)

名は金二。明治二十年越後國佐渡郡に生れた。有名な青年哲學者の土田杏村の實兄。十八歳の時京都に出て初め鈴木松年の門に入つたが半年ばかりで竹内柄風の門に移り、後京都繪畫專門學校に入つて四十四年別科を卒業した。氏は異色ある作家として知られ、文展へは第二回に「罰」第五回に「髮」第六回に「島の女」「冬」第七回に「海女」第八回に「散花」第九回に「大原女」第十回に「三人の舞妓」第十一回に「春禽趁晴圖」を出し褒状又は三等賞を得。出品毎に畫壇に問題を招いた。大正七年一月小野竹橋、榊原紫峯、村上華岳野長瀬晚花等と國畫創作協會を起し、以後文展に出品せざる事となつた。後外國に渡航してかの地の畫壇を視察して歸り、大正十二年帝展の審査員候補に擬せられた。大阪毎日新聞社主催の日本畫展覽會の審査員に擧げられた。十二年大震災災後開催された日本美術展覽會審査員となつた。

主義原論」「新社會學」隨筆「啞の如くに語る」宗教「華嚴哲學小論攷」及「自由教育論」等の著書多くある。雜誌「文化」を發行し其の他の雜誌にも盛に寄稿してゐる。大正十一年八月より長論文現代作家論を雜誌詩聖に連載したのを見ても氏は哲學の外文學藝術の方面に於いても一隻眼をもつてゐることがわかる。氏が評論壇に於て「日本は如何にして改造せらるべきか」といふやうな大問題を始め大小各種の毎月五十餘篇を出してゐる外に一雜誌「文化」を發行してゐるのを見てもその勢力の絶倫なるに驚かざるを得ない。論敵としては田中玉堂氏をもつてゐるが、これらの論争は主として哲學上の問題であつて、その内容から言つても紙數から言つても、實に堂々たるものであるから、まるで關取の相撲を見るやうに壯觀である。國畫創作協會の驍將土田麥僊は實に氏の令兄である。

現住所 京都市上京區新町頭

現住所 京都市外衣笠村衣笠園

故土屋 鳳洲

ツチヤホウシユウ(漢)

名は弘、泉州岸和田藩士、天保十二年十二月生れた。字は伯毅鳳州はその號である。十二歳甫めて藩塾に入り經史の句讀を受け後専ら護園物子の學説を講じた。十八歳の時但馬の宿儒池田草庵の門に遊び朱子王子及劉念台の學説を研究した。爾來又藩塾講習館にあつて經史子傳を修め二十三歳防長藝備の間に歷遊して坂谷朗廬森田節齋に就いて文法を研修した。後藩學講師として世子の侍讀を兼ね、明治元年藩中に黨論起るに及んで幽囚せられたが三年再び藩塾教授に任ぜられ翌年致仕して泉州長瀧村に歸田し、五年堺縣に出仕し學務に執筆した。後堺縣三等教授兼師範學校長となり傍ら家塾晚晴書院を開設して育英に従事した。二十一年以來職を兵庫奈良等の師範學校に奉すること數年二十六年華族女學校教授に轉じた。夙に教育に粹勵し文部省賞勳局及府縣より屢々賞賜を受け

た。著書に「皇朝言行錄」「幽囚錄」「枕上閑課」「馬關日記」「人之基」「家之基」「入門一讀」「孝經纂釋」「文家金丹」「文法錄要」「書法圖解」「晚晴樓詩鈔」「晚晴樓文鈔」「窓燈錄」等數種ある。

吉野作

- 松崖竹塙踏春行、鶯語綿繡弄午晴、
- 最是陵前風景好、紅霞深鎖洩溪聲、
- 謁金山神社、想見三軍衣錦回、
- 義旗一舉燈元魁、秋風吊古上崔嵬、
- 晚節英雄無限恨、
- 謁足利聖廟、此日杏壇瞻謁初、
- 萬然佳氣遍堦除、庫中貯得古經書、
- 堂上配來先哲像、霧歛雲流水自舒、
- 碧鮮翠滴山皆秀、當年韞積是璠璵、
- 盛德光輝天下仰、
- 鏤阿寺、
- 參天銀杏鬱蒼蒼、舊事尋來感愴長、
- 難奈佞媮含怨毒、堪憐貞婦遇寬殃、
- 野山臥雪明眞諦、渡瀨披霞搦寶坊、

遺物文書足徴古、春秋七百閱滄桑、
小牧櫻泉森槐南逝きし今日、漢詩の久保天隨と氏
とは文詩壇の雙璧と言つても溢詞では無からう。

故綱島梁川

ツナジマリヨウセン（文）

名は榮一郎と言つて岡山縣上房郡有漢村の人である。幼い時より穎悟好んで書を読み郷里の學校を卒業して東京に遊び、早稻田大學の前身である東京專門學校英語專修科を卒へ、更に文科に入つて専ら東西の文學哲學を究め、卒業の後早稻田文學の編輯に従ひ、坪内博士及大西祝等と其の名を並べるほどに至つた。明治四十年九月十四日宿痾の爲歿した。年齢僅かに三十五。氏の中心事業は思想上、宗教上の方面にあつたであらうがそれについて力を入れたのは文章であつた。心靈の開拓は氏の常に専心留意した目的物であるが文章の修練にも非常に刻苦した。光榮ある氏の生涯は樗牛と同じく一面氏の文章の賜であることは否まれぬ。氏は健康なる身體を持たぬため、「主義主張があ

つても、活きた言葉で公衆に面と向つて話すことが出来ぬ。年中藥餌に親しんで方丈の病室を出るを得ぬ身であるから、胸中を他に傳へる方便は文章を措いて外には無い。文章は僕の生命を托すべきものである」と友人に言つたことがある。氏は自ら文を草し、他人の文章を読み、文法修辭の細い論議にまで耳を傾けたのはこの考があつたためである。氏は初めより論文に得意で、専らこの方面に旗をあげるつもりで居たが創作に筆を染める心のなかつたでは無い。和歌は殆んど試みなかつたらしいが俳句は明治三十一年頃より數年間大分肩を入れたことは氏の書信の中にさへ三句や四句を挿入したのでわかる。硯友社派の總指揮格たる紅葉や、日本派の大將子規などの句を評しても、必ずしも恐るべきでないといふ勢で大に氣餒を吐いたこともある。瓜茄子と我れも流れん谷の川、一葉つゝ涼しさあふるばせをかな、念佛の一時涼しく通りけり、等の句を残してゐる。新體詩は早稻田卒業の前後に短いもの二三篇あり、小説は短

篇ものを試みたいと志してゐたが「月前狂」の一篇を残してゐるのみである。初めは諸種の文學物を試みる心があつたし、また健康が十人並であればやれたに違ないが、褥上の人となつてからは、専ら倫理宗教上の論文を推敲する方に心を傾けて其後は詩歌小説等は己が専門の参考として或は無聊を慰め心を養ふために讀んだらしい。氏は「心を養ふ料としては小説のやうな散文ものよりも詩歌の方がよいやうに思ふ」と言つて一時英國湖畔詩人のウオーズオーマを愛讀したこともあつた。氏の文章中最も骨を折つたのは新宗教論である。かの見神論の如きは稿を易へたことが數回、露西亞の文豪トルストイ著「戦争と平和のそれを思はせるほど彫心鏤」のものである。氏は高尚神秘なる思想は通俗平易の語をもつて表はし得るものではないと信じた。又簡潔難解の文章は人をして深く考へしめる利益があると思ひ、エマーソンの「余の間潔難解の文を書くは、人をして考へしめんがためなり」といつた言葉は大變共鳴してゐた。古

來の文章中で喜んだのは兼好法師の「徒然草」白隱禪師の「遠羅天釜」漢文の「莊子」「孟子」「韓非子」英文では舊約の「ヨブ記」「エマーソンの論集」丘淺治郎氏の「進化論講話」坪内雄著氏の文等である。我が國の文學には詞のあやに苦心したものは多いが想思相伴ふ立派な文章は少い。殊に鍊り鍛へた文章で深き思想を表したものが少いが、氏や高山樗牛等の文章によつて我が文學史に一段の光彩を添へることの出來たのは喜ぶべきである。著書には「スチーブン氏倫理學」「快樂派倫理」「西洋倫理學史」「梁川文集」「病間録」「回光録」「ルナン氏耶蘇傳」「歐洲倫理思想史」「春秋倫理思想史」「倫理講話」「漢文評釋」「我觀錄」「寸光録」「病窓雜筆」「書簡集」等少くない。大正に至つて「梁川全集」として發行された。

故角田竹冷

ツノダチクレイ（俳）

名は眞平、靜岡縣人角田彦右工門の二男で安政四年六月十五日沼津の近在に生れた。明治七年上京

して沼間守一の知遇を得た。嚶鳴社成るに及んで之に加盟し後法律を研究し同十三年代言人試験に及第して狀師となつた。十五年改進黨が起るに及んで之に賛し評議員に推され大に黨勢の擴張に努めた十七年東京府會議員となり同二十一年東京組合代官人會長に推され二十五年衆議院議員に當選した。後日露戦争の時功によつて勳四等に叙せられた。東京市に臨時市區改正局が設けられた時その局長になつた。かゝる政治的方面の外株式會社秀英舎、中央窯業株式會社、株式會社帝國劇場各取締役、株式會社東京株式取引所、跡見女學校各理事等の職に在つて匆忙の身でありながら常に俳句に親しんで聽雨窓竹冷と號し新派の宗匠となつた。秋聲會を組織して雜誌「秋の聲」を發刊し著書に「俳諧木大全」がある。

氏の

露の身や露の袂や露の宿

我庵は隣持ちけり秋の雨

酒沽うてあるとお言やれ雪が降る

杉田副議長

兎も角もやみにまぎれず花卯木

ロシヤの戦備

木下閣驚の眼の光りかな

などのものが多くあるが

全員委員長選舉

五月雨や瓜も茄子も花の咲く

といふやうに特に痛切骨を刺すものも亦時々吟じた。氏は竹冷の外、別號として聽雨窓、神田閑人、閑々人、半閑人、未閑人、頓々房等を用ゐた。雅號にも檀林の遵奉者と見るべき想がほの見えてゐる。これ日本派とは全然一致せぬ所以である。

椿 貞雄

ツバキサダオ(畫)

明治二十八年二月山形縣米澤町上宮澤町に生れ、洋畫に志して大に研鑽を積み、遂に斯界の名家岸田劉生、木村莊八の諸氏と共に大正五年草土社を起し、其の作品の多くは主としてこゝに出品されたが、二科會の第四回には「腦病院遠景」を出し

などの句を見ると、月並具が鼻についてならぬがしかしその月並のうちでも何となく内容にも技巧的表現の上にも詩的の感じを與へて、他の宗匠連の句とは同日の論ではない。しかも芭蕉翁の古池や蛙とび込む水の音

といふ句よりも其角の

山吹や蛙とび込む水の音

の方をよいと言つたあたりは見識の高いことを示してゐると思ふ。しかし氏の句には

鶏のうしろ吹かるゝ春の風

桑の實や廢宮の庭の聲

卯の花や古驛の娼家一二軒

茶を焚きて童子待つあり夏木立

火の番にとへばねてゐる返事かな

旅に寝て足袋乾かする圍爐裏かな

などよい句が少くない。氏の句には時事を吟詠したものが大變多く且つ面白い。

大政黨の現況

しかも元の水にはあらず杜若

て名をあげ、光風會にも出品した。大正十二年大地震後大阪毎日新聞主催の日本美術展覽會に出品した窓外の街は、審査員岸田劉生梅原龍三郎二氏の推薦によつて入選し、銀牌並に賞金千圓を贈與され、大正十三年四月春陽會出品の「石橋の風景」もまた頗好評を博した。

現住所 相模國鶴沼海岸林別莊第八號

津端道彦

ツバタミチヒコ(畫)

名は道彦、別に佳藝乃舎の號がある。明治元年十二月新潟縣中魚沼郡外丸村に生れ、福島柳圃、山名貫義に片山貫直に師事して土佐派を研究し、殊に歴史人物を能する。日本美術協會、その他諸會に出品して銀、銅牌各々數回、第二回文部省美術展覽會に於て三等賞を得、同會第六回に火牛を出して二等賞を得て共に宮内省御用品となつた。會て皇太子殿下御親選御用品たるの榮を荷ひ、其他御前揮毫を勤むること數回に及んでゐる。帝國繪畫協會、選畫會の會員、日本畫會の幹事、日本美

術協會歴史部主事、日本美術學院講師となつた。
現住所 東京市麴町區隼町二四

坪内士行 ツボウチシコウ(劇)

坪内義衛の次男で逍遙博士の姪でもとその養子であつた。明治二十年八月名古屋市に生れ早大英文科を最優等で卒業した。後米國に渡り英國に至つて俳優の群に交り、専ら劇曲を研究する事五年大正五年歸朝し劇壇の新知識として重んぜられてゐる。氏は幼時より舞踊を學んで其堂奥に達し更に外國に在つて實演の經驗をもつてゐる位だから帝國劇場に於て「ハムレット」を演出した時には大に名聲を博し其の後寶塚少女劇の顧問となつた。翻譯劇曲「不文律」「村の祭」の外社會劇「都會へ」小説「なすな戀」其他の作が澤山ある。早大講師であつたが今は學校に關係がない。「旅役者の手記」は氏がアーピング其他の一座に加はり旅役者として英米諸國を巡遊せる間の見聞記印象記を集めたもので、絢爛にして洒脱才筆最も藝術的

目的は人生の真相を描くにある事を主張し、勸善懲惡主義の小説を難じた。これ實に我邦に於ける文藝革新の最初の警鐘であつた。なほ此論を裏書する具體的小説一篇を著した。「當世書生氣質」これである。併し書生氣質は小説神髓の理想を立派に具體化したとは言へぬ。二十二年に長谷川二葉亭四迷氏が「浮雲」の一篇を出して氏の理想は實現されたと言はれる。浮雲の文は流暢な言文一致のもので地文と詞とは行を改め形式内容ともに新時代の産物といふに恥ぢぬ名篇である。東京専門學校創設せられた時その文科を指導した雑誌「早稲田文學」を創刊して新文藝の鼓吹に努めた。脚本「桐一葉」「牧の方」「杳千鳥孤城落月」「名残の星月夜」「義時の最後」「法難」等の外樂劇では「新樂劇」「新曲浦島」「新曲かぐや姫」等の作がある。氏は新しい論を立て、は之を實際の作物によつて模範を示すといふやうに作と論と相俟つて劇壇の啓發に力め、四十二年文藝協會を起して新劇勃興に魁した。沙翁研究に於ては世界的

の香高き歐米印象記である。大正八年寶塚歌劇團の先生に聘せられたが同團が十二月解散したので櫻井の新家庭で愉樂に浸つてゐる。初めホームス夫人と結婚したが夫人と別れて歌劇壇の名優雲井浪子と結婚し叔父逍遙博士の養家も離縁していろく非難もあつた。氏を中心として戯曲研究会なるものを組織してゐる朱雀社同人は文藝雜誌「作と評論」を九年十一月創刊した。
現住所 大阪府下箕面村櫻井

坪内逍遙 ツボウチシヨウヨウ(劇)

名は雄藏、會て春のやおぼろと號した。岐阜縣の人坪内其樂の三男で、安政六年五月二十二日美濃國加茂郡太田村尾張代官所に生れ、十歳の頃父と共に名古屋在に歸農した。明治九年東京に遊學して明治十三年東大文科を卒業し、東京専門學校早稲田中學校等に教鞭を執り、尋いで早稲田大學教授となり辭職の後同大學名譽教授に推薦された。十八年文學論「小説の眞髓」を著して藝術の至上

の大家でその翻譯は我が文壇の誇である。「文學そのをりく」「英文學史」等の外、倫理の方面の著書も多い。目下は早大の名譽教授として熱海の別荘に引籠つて創作並に翻譯に全力を盡して居る。脚本「桐の一葉」「杳千鳥孤城落月」等は中村歌右衛門によつて歌舞伎座其他で日蓮上人「法難」は東儀鉄笛氏の新文藝協會で上演されて相當の効果を收めた。大正十一年の春頃からページェント劇を鼓吹し博士自身にも例の具體的見本としての創作がある。同冬になつて家庭用兒童劇數種を選んで早稲田大學より出版し、尙帝劇の附屬技藝學校生徒に試演させた。家庭の讀物としても愉快極まるものである。特に篇中「龍宮」其他九篇の構想なり上演注意等があつて、博士の圓熟期の作物として推服敬重に値するとの評がある。これは博士が藝術教育を理想的にやつて見ようといふので、世間流布の實際と理論とはなればなれなものであるのを慨して童話劇を書き、更に「兒童教育と演劇」といふのを著したわけである。最

近作の戯曲に「長生浦島」「大いに笑ふ淀君」等の外常用漢字の問題を取扱つた長篇の論文も發表して多方面の活動をなし、老いて益々盛なりの氣勢を示してゐる。

現住所 東京市牛込區余丁町一一四

坪谷水哉

ツボヤスイサイ (文)

名は善四郎、新潟縣平民坪谷甚三の三男、文久二年二月二十六日新潟縣加茂町に生れた。明治二十一年東京専門學校政治科を卒業して博文館に入り編輯に従つた。同館の發展に盡瘁すること數十年その今日あるは氏の力に俟つものが多い。號を水哉と稱して公私多忙の傍著作に従事し内外各國を巡視してゐる。氏は多能であつて、文も句も歌も作る。博文館理事大橋圖書館長東京市會議員、東京市學務委員長牛込區會副議長等の公職に在る外東京市助役の候補に推されたこともある。著書は「世界漫遊案内」「日本漫遊案内」「山水行脚」「海外行脚」「新山水行脚」「政治歴史」「日本

女禮式」「最近の南國」等數十種あるが何れも廣く行はれてゐる。

藻鹽焚く烟か浦の夕霞

青田から月叩き出す水鶏かな

湯の村や桔梗刈萱ほととぎす

安房の眞帆上總の片帆小春かな

狐啼く聲あらはなり冬木立

御座船は霞みて須磨の夕日哉

鳶の輪の下をひと刷毛霞哉

山門や樂書に立つ春の人

大船や船續々と霞から

現住所 東京市牛込區北山伏町二九

津村京村

ツムラキヨウソン (小)

名は京太郎、明治二十六年八月兵庫縣明石市に生れ、小學校を出たる外學歴の取立て、言ふべきほどのものは無い。曾て實業家にならうとして織物業に従事したことがある。短篇小説集「一坪の庭」「遍路になつた父」「お初ちゃん」「愛にかへる」

「踏み違へた路へ」「結婚地獄」戯曲「其の夜」「指輪」「受難」「嵯峨の秋」「沼」評論「民衆教化と劇藝術」等を出し、劇文藝雜誌「人と藝術」及び文藝雜誌「文壇」の編輯に従つてゐる。

現住所 東京府下代々木初臺五三九

鶴見祐輔

ツルミユウスケ (著)

明治十八年一月三日群馬縣多野郡新町に生れ、岡山中學校、第一高等學校を経て、四十三年七月東京帝國大學法科大學の政治科を優等の成績で卒業し、同年拓殖局に入り、四十四年鐵道院に轉じて今日に至つた。此間外國に出張を命ぜられたこと前後十數回、官吏生活の大半は外國に在つた。氏は「婦人公論」「實業の日本」「改造」「現代」「雄辯」「週刊朝日」「サンデー毎日」等に清新にして趣致ある文を寄稿し多くの讀者を有して居る。著書には「南洋遊記」「歐米名士の印象」「米國々民性と日米關係の將來」「偶像破壊期の支那」「三都物語」「政治と小説」「文明政治家ウイルソン」

「世界人たるの意識」「思想山水人物」等あつて、何れも新人の鋭き眼に映じたものが暢達の筆で書かれてゐる。

大正十三年三月鐵道院を去つて代議士の候補者となつたが、淇増氏の一蹴にあつて落選したので、いろ／＼の問題について文筆を弄してゐたけれども、米國の五大學で「現代日本の批評」を講演する筈で七月渡米した。

現住所 東京市麻布區三軒家町五三

テの部

故寺崎廣業

テラサキコウギヨウ (畫)

徳郷宗山、騰龍軒主、天籟山人等の號がある。寺崎廣知の長男慶應二年二月二十五日羽後國秋田上根小屋町佐竹家の家老の家に生れた。初め同地の小室透俊に就て狩野派を學び、後、東京に出て平福穂庵に就き、それより大に苦學し、或は「繪畫叢誌」の編輯に携はり、又は新聞挿畫の版下を描

下生である。八年二月二十一日歿し、土地の有志相議つて廣業寺を建立した。

寺崎武男

テラサキタケオ(畫)

明治十六年三月東京に生れ、東京美術學校に入つて四十年西洋畫科を卒業し、農商務省實業補習生となつて伊太利に渡り、遊學十年の後大正五年歸朝した。翌年の春、日本水彩畫展覽會に「ピアツエッタ」「夏の光」「尼寺」「バガナの岸」「庭の橋」等數十點の水彩畫、バステル畫を出陳し、文展へは第十一回に壁畫「フレスコ」「飛鳥朝の夢」を出した。大正八年十二月再び歐洲に遊び、大類文學博士と共にそのスケッチとその紀行を太陽誌上に連載した。

現住所 東京市赤坂區表町三丁目二一

寺松國太郎

テラマツクニタロウ(畫)

號は坦齋。明治八年六月萬壽村に生れ、夙に小山正太郎の不同舎に入り、又田中久衛、淺井忠等の

き、技漸く熟して前美術院時代に「今様美人」「月下燈影」「王陽明」等の優作を出し、東京美術學校教授に任ぜられた。明治三十一年、岡倉覺三と共に教職を辭して日本美術院創立に與つたが、三十六年再び就任した。又二十七八年戰役に從軍し、四十三年再び支那に遊び、文展には第一回以來日本畫部審査員となり、作品は第一回に「大佛開眼」第二回に「月」第三回に「溪四題」「秋山雨後」第四回に「夏の一日」「長城の夕」「長江の夕」第五回に「支那風景」第六回に「瀟湘八景」第七回に「千紫萬紅」第八回に「高山清秋」第九回に「夜聽歌者」「信濃の山路」第十回に「清簾」第十一回に「白馬山八題」を出した。又天籟畫塾を開いて多數の門人を指導し、斯界に盡した功績は頗る大である。大正六年六月帝室技藝員に任命された。烏谷幡山、野田九浦、町田曲江、水上泰生、矢澤弦月、栗原玉葉、故河崎蘭香、菊澤武江、保間素堂、三浦廣洋、石山太柏、鹽崎逸陵、森廣陵、小猿雪堂、葛谷龍岬、故吉岡華堂等は氏の門

諸家に師事して西洋畫を學んだ。四十一年、關西美術協會に於て受賞したのを初めとして、四十二年の同會、及び四十三年日英博覽會にも受賞し、文展へは第三回に「大原女」第四回に「かげの人」第五回に「銅瓶」「髮」第六回に「朝市」第七回に「櫛」第八回「若き女」を出して褒状又は三等賞を得た。又其作「髮」は佛國官設サロンに入選し世界聯合文藝協會會員に推されたのは名譽な事である。現に關西美術院講師、太平洋畫會會員である。

現住所 京都市東山線通二條下ル

田 鶴年

デンカクネン(彫)

東京の石工彫刻師で兼て書畫を好む。湧田定次郎の三子、慶應元年五月江戸淺草今戸に生れた。通稱豊太郎、鶴年はその號である。幼い時石川氏を繼ぎ、家世々石工彫刻を以て業とした。氏は幼より斯業に熱心し終に今日の名聲を博するに至つた。會て東京石工組合設立に際して、之に盡力補

ト の 部

助すること十有二年の間一日のやうであつた。その設立にかゝる石工徳仁會も亦益々隆盛を來した。又會て同業者と共に東京石工合資會社を創立してその監査役にあげられた。氏は又性質文事を好んで業餘書畫會の開筵に際して出席せぬことが無く、先輩大家と共に鷗盟會を發起してその設立に盡力した。

現住所 東京市本所區表町二四

故土居光華

ドイコウカ(漢)

有名なる詩人、字は士濟、淡山と號し、岡田鴨里、森田節齋に従つて儒を學び、又高野山西南院に在つて佛典を讀んだ。後江戸に出て林鶴梁大沼枕山等に交つて詩文を研究し、又和歌を加藤千浪海上胤平に學び後日光に隠れ、南照院興雲律院に寓して經史を講説し明治戊辰岩倉具定に知られて岩倉